

訂増
生命保険物語

DF416

40



77M21279



0030200000

3

0030200-000

DF416-40

生命保険物語

津田侃二・著

津田侃二

増訂版

1939. 6

ADJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年5月1日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

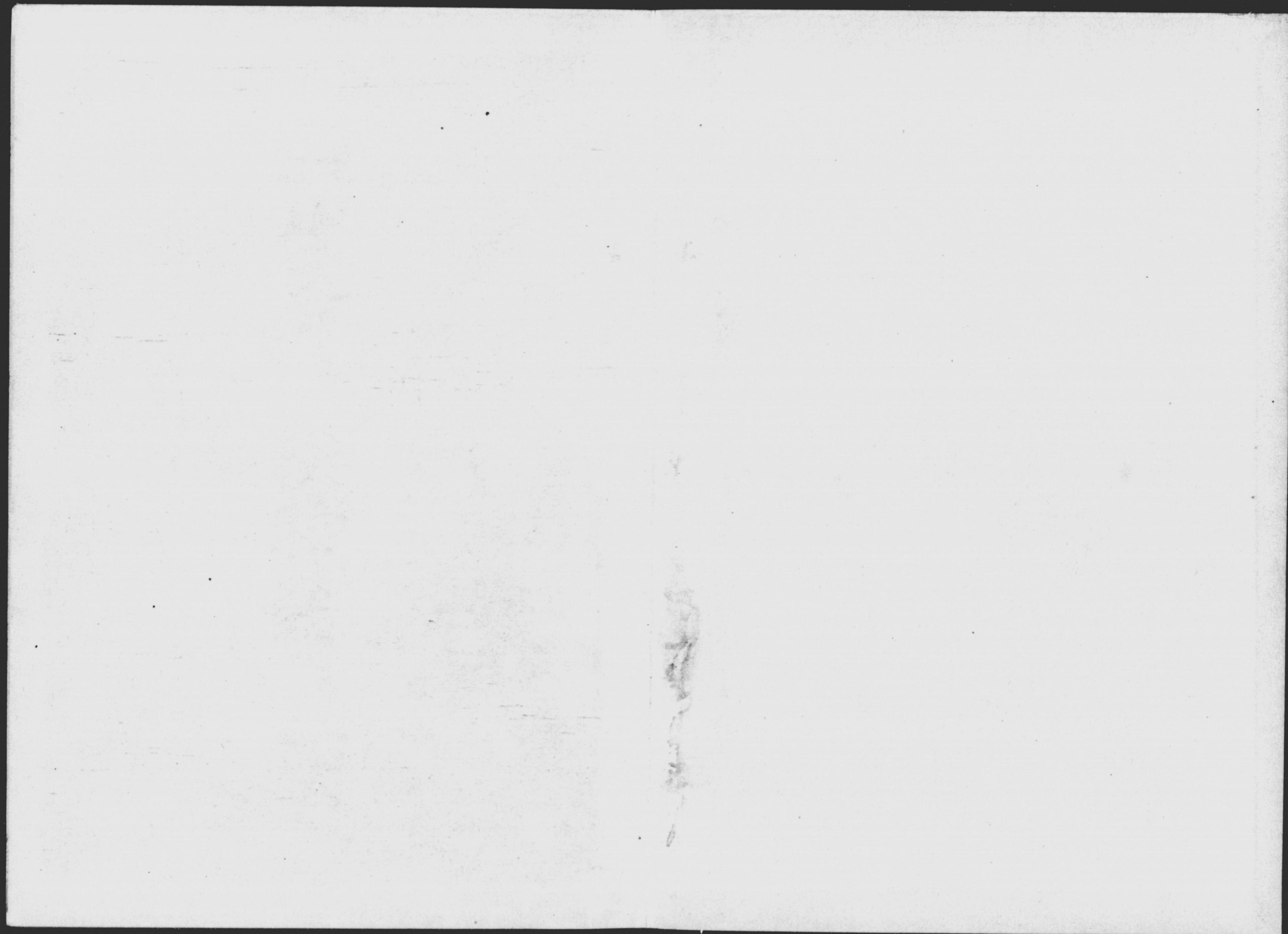
訂增
生命保險物語

DF416

40



77W21279



DF416
40

忍
無
邪

題
傅
田
玉
手
著
畫
五
五



339.6

77W21279

讀者の一人として

園

乾

治

「生命保險物語」の著者からその新版を出すに就て序文を書いて貰ひたいといふ手紙と新版の原稿と舊版一冊とが速達で届けられた。それは丁度三月の半頃で學年末の一番忙しい時であつたが、自分はやりかけた仕事を抛擲して、早速新版と舊版とを一丹念に比較校照して読み始めた。その時は何も序文を書かうといふ下心からではなく、只さうしたかつた自分の衷心の欲求からであつたが、それをやつてゐる中にとりとう決心がついて「カカセタイタダキマス」といふ電報を著者に送り、その夜の中に

すつかり讀み了へた。

併し自分の如き者が他人の著書に序文を書くなどといふことは烏澁がましいことである。自分は嘗て親しい友人が處女出版をするに就て序文を需められたことがあるが、洵に氣恥かしいので、情に於ては忍び難いことであつたが、とうとう固辭したことがある。今でも自分の氣持はその時と變りがない。併し考へて見ると自分は恐らく「生命保險物語」の一番熱心な讀者の一人であり、また著者の爲人に一番深く感動してゐる者の一人であらう。さうすると序文を書かせて貰ふことは自分にとつて爲さねばならぬ當然の仕事であり、またこの上もない有難い仕事であらう。さう考へてとうとう序文をお引受したのである。

○

「生命保險物語」を自分が始めて知つたのは全く偶然の機縁からであつた。確か昭和七年であつたと記憶するが、或る生命保險會社に勤めてゐる同窓の友人から研究資

料を贈られたその中に「生命保險物語」があつたのである。自分はこれを読むだ後、著者に遠慮のない所感を書いて送つた。それ以來著者との文通が始まつたのである。

併し自分は今に至るまで一度も著者に會つたことがない。若し面識があるといふことがその人を知つてゐるといふことであるならば、自分は著者を知らないといふべきであらう。併し自分は著者の經歷は「著者の身の上話」によつて窺ひ、その爲人はその中の挿話によつて知り、また著者の心意氣は著書の至るところに満ち溢れてゐるところによつて十分に感得してゐる。

著者は自ら町醫者を以て任じてゐる。併し著者は匙加減で病人に安心を與へる單なる町醫者ではない。汎く同胞の福祉を増進することを念願とし、且つこれに向つて不退轉の精進をなしてゐる者で、「生命保險物語」も畢竟斯くの如き著者の同胞愛の發露に外ならぬものである。著者が一燈園西田天香氏に師事してゐることは本書の卷頭の題字によつて略ぼ推察し得られるが、著者が神都に於て毎年開かれる修養團の會合に

参加してゐることを他所から仄聞して、自分の著者に對する畏敬の念は更に深まつたのである。

○

「生命保險物語」は人生の甚だ不安であること、人はそれを口にすることも好まないが老少不定、何時死の神に迎えられないとも限らぬこと、而して吾等の生活の不安に對しては、保險がその對策として最も適切であること、保險が數理を基礎とし頗る合理的組織であること、保險と貯蓄とを比較し、また貯蓄の利子と保險の配當とを比較し、その間に根本的に相異のあること、保險の強みは協同の組織にあること、保險の効果はあらゆる階級に及ぶべきこと、保險に加入するとすれば如何なる點に注意しなくてはならぬか、實際にこれを利用する場合に種々の便法のあること等を説いてゐる。而もその文章は飽くまで平明懇切であり、多くの例證と比喻を交へ更に圖解を添へる等の工夫を凝らして居り、如何なる階級の者でも一度これを讀めば、立どころに

保險を理解し、その必要を痛感するに至るであらう。これ等の效果に於ては専門家の「學」又は「論」と銘打つた幾多の著書の遠く企て及ばざる長所を有つてゐる。この點から「生命保險物語」は好個の「國民的保險讀本」であると云ふことが出来る。

「生命保險物語」の新版に於ては、これ等の長所はそつくり其儘存續せられてゐるのみならず、隨所に大小幾多の補正が加へられ、更に新に執筆せられた若干の章節がある。それは時代の變遷に應ずるためのももあり、著者の意圖を一層明瞭にするためのももあり、また著者の不斷の研鑽と熟慮との結果に成るものもある。何れにしても斯くの如き訂正増補によつて「生命保險物語」は茲に面目を一新し、「國民的保險讀本」として一層完璧に近づくに至つた。一部の讀者から見れば、保險金額を増加する便法として利用せられる所謂「千鳥」を詳しく述べた點、若しくは死亡保險金の支拂の分析が一會社の資料に據つた點に、幾分の不滿を感ずる者があるかも知れない。併し著者の態度は公平無私であり、著者の眞意は保險の保護を厚からしめることにあり、

また死亡の原因の分析によつて世人の注意を促すにあることは誤なく知られ、寧ろ著者の保険に對する深い理解とこれに寄せた熱誠とに敬意を拂ふべきであらう。

茲に新版成るの機會に於て多年畏敬する著者の不斷の精進を祝福すると共に、保険に加入するとせざるとを問はず、また保険事業の經營に關與するとせざるとを問はず、あらゆる階級に亘り、一人でも多くこの「生命保険物語」が讀まるゝことを心から禱つて已まない次第である。

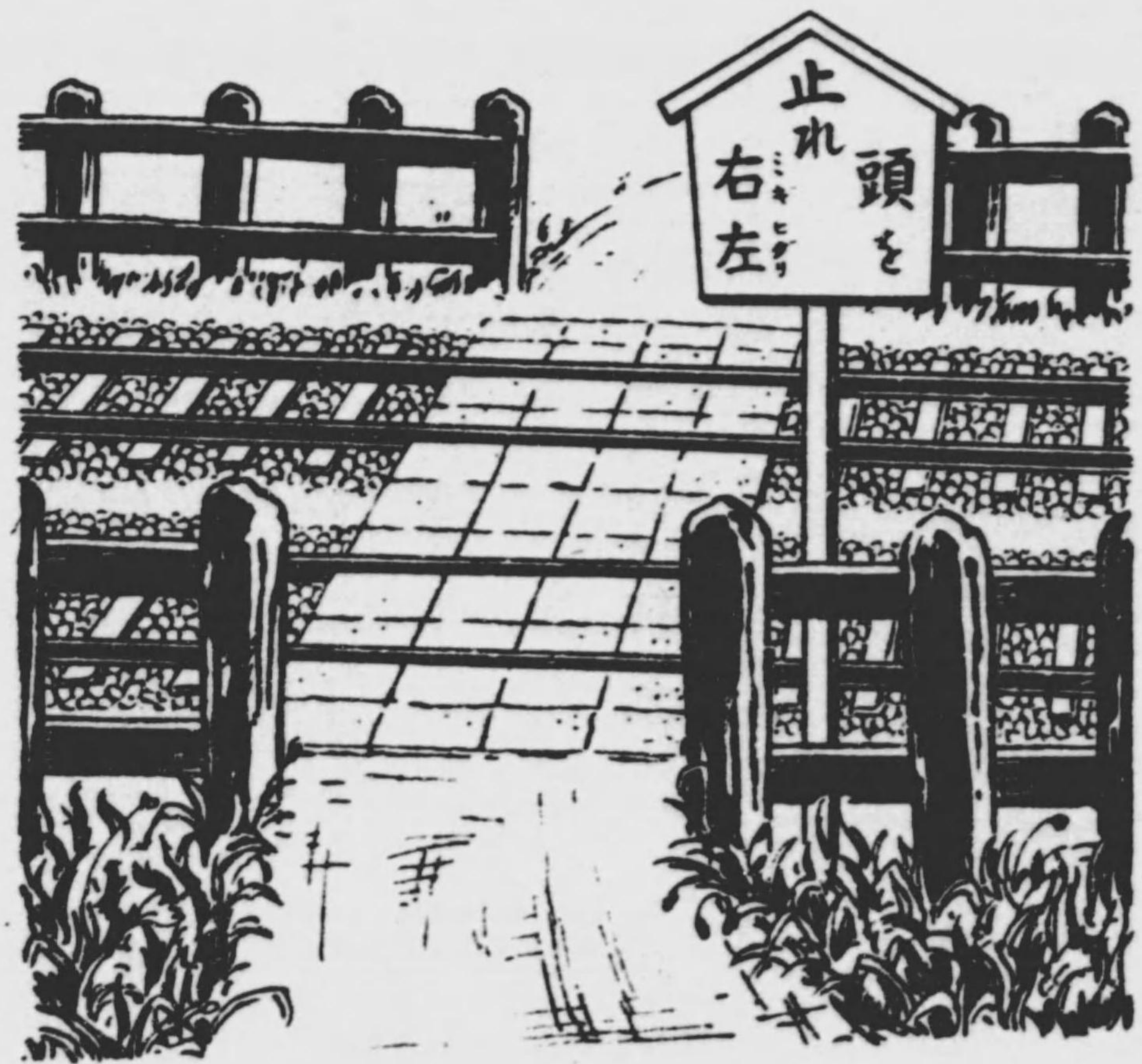
(昭和十四年四月二十三日 靖國神社第五十四回臨時大祭第一日招魂式の夜)

「注意」は就て現
代賞罰の嚴酷

其方儀鉄道踏切に於て
頭を左右に廻はさる科
は依り死刑に處す

現在貴下のお宅では
次の一事が家族全体
の死活に關する注意
を高くはしないですか!?

枕金を先づ貯金か
先づ保険か 頭を右左



はしがき

一、生命保険は一種の商品である。而も大きな商品である。日本でも一ヶ年の現金取引七億圓。之に携はる人十八萬人。著者は此の十八萬人の外に立つ全くの素人^{しょうと}。

一、保険が商品であり、之を賣る人が十八萬人もあるのに、素人の出る必要など更にない筈なれど、保険が商品なるが故に買ひ得ない人が無數にある。其ノ一は眞實保険の必要を聞かされても、商人の手前味噌と聞き流す人。其ノ二は此の人は買ひ得まいと保険賣る人の方が遠慮してゐる人。

一、著者は好きで保険を買ふ側の人。今から三十餘年前千五百圓から買ひ始め、チビリチビリと買ひ足して現今自分に三萬圓、長男(醫師)二萬圓、次男(中學生)一萬圓、妻と娘三人で一萬圓、合計七萬圓を買ひ溜めて尙ほ飽き足らず。親戚、知己、友人と手

の届く限りを説き勧め、最後がなんとかして前項其ノ一、其ノ二の人々に買はせ度い念願に燃えて、遂に此の小冊子を書いた次第。

一、讀者との一問一答——

讀者「それなら君は保険屋さんの別動隊かね」

著者「否、僕には醫者といふ忙しい本職がある」

讀者「本職でなければ内職か」

著者「然り、内職かも知れない。只だ普通内職といふ語は假令五錢でも、十錢でも金の儲かる善の仕事に用ふ様だが、僕は此の本を出す爲めに、最初から大か小かの損を覺悟で取り掛つたのだが……」

讀者「解つた様で解らない。なんだか人間離れのした事を言ふ人だね」

著者「御尤もだ。併し餘り簡単に話せば人間離れを通り越して、狂人じみて聞こえるかも知れず、それかというて是非とも解つてから本文を読んで頂き度いが……」

讀者「要するに近頃流行の奉仕といふやつかね」

著者「奉仕も随分濫用せられる様だが、寧ろ一燈園の人々が稱へる『托鉢』といふ氣分

で書いたのだ。併し之も一燈園の托鉢を知る人以外には通用しない樂屋落ちだらう。

それよりも此の本の終りに『著者の身の上ばなし』の一章を書き添へて置いたから、先づあれから読み始め、次に本文を読んで頂けば却つて好都合かも知れない」

讀者「本文を後廻しにして『著者の身の上ばなし』といふ君の自家宣傳を先きに讀めといふのか」

著者「自家宣傳と言はれ、ばそれでもよい。先づ右の一章を讀まれたら、著者に多少の理解を持つて頂ける筈。さうすると本文を讀む間に又しても、『こんなことを言ふのは保険會社の廻し者だらう』などと疑はれる心配が少く、結局保険の了解が早からうと思ふ」

x

一、本文中讀者に對しては、貴下、君、諸君など、自分のことは、私、僕、余、吾々など其の時の氣分次第で書き流してゐる。長者に對し禮を失する場合が多いかも知れないが、平に御海容を願つて置く。又著者がAとなり對話者のB、Cを設けて問答體を用ゐた處もある。

一、文法上無理とは承知し乍ら「少なく」とか「先きに」とか「新たに」とか「尙ほ」とか、其の他音便などもメチャ／＼で、只だ読み易いことを主として書いた場合が多い。又文語と口語が随所に混用してある。目障りかも知れぬが御許しを乞ふ。

一、用語も丁寧に致し度いのですが、ダラ／＼と冗長になるのを恐れ、御覽の通り亂暴な對話に致しました。悪しからず御諒察を願つて置きます。(敬語は此の一項だけで御許し下さい)。

一、屢々例に引く保険の金額は、一萬圓といへば及びも付かぬと思はれる方がないとも限らず、反對に千圓といへば、そればかりかと輕蔑されるかも知れないが、讀者諸君の境遇に應じて、書いてある數字を二倍、三倍、五倍にし、又は數字の下に零を加へたり、除いたりして、御自分の現在の境遇に引き當て引き直して讀まれんことを希望する。

一、本書第十三、十四章は米國の碩學ヒュプナー教授の生命保險經濟學の骨子生命價值資本化の大意を語り度い積りで、新に第三版に書き加へたものだ。私には過ぎた大仕事ゆゑ、原著者の眞意を傳へ得ないのは勿論、大きな感違ひどもしてはゐないかを惧

れる。特に大方の御教示を待つ。

一、本文中第十九、二十一章は生保界の耆宿矢野恒太先生の舊著を其の儘に頂いた處が多い。明記して先生に謝意を表する。但し此の本の型に嵌める爲め勝手に變改したり、蛇足を加へたりした箇所も少くないから、若し條理に合はない處があつたら著者の罪である。累を先生に及ぼされない様に願ひ度い。

一、本書は昭和六年五月に初版、八月に再版後絶版すること六七年に及び、其の間讀者の催促で幾度も第三版を思ひ立つたけれど、私に改訂の時間がない爲め、延び／＼になつて遂に今日に及んだ。此の間時勢の進歩は初版の時と隔世の觀あり、思ひ切つて補修訂正をしたけれど、尙ほ前後の關係がシツクリと行かない處がある。偏へに御ゆるしを願つて置く。

一、此の本は「保險と貯金の前後を誤らぬ様」に、否「餘裕があつたら先づ保險から」を強調するから、一見貯金國策に反對する如く感じられるかも知れないけれど、それは飛んでもないこと、元來「郵便貯金」、「銀行預金」、「國債應募」、「保險掛金」の四つは、國策線上では全然同一効果を現はすもので、現に郵便局には「保險報國」、「年

金報國」の標語さへ掲げられてゐる。單に同一とだけでは濟まされない。若し貯金と保険の前後を誤つた爲に保険で自救自助の出來た筈の一家族が、國家公共の扶助を受けねばならなくなつたらば、新に國策上の蹉きを一つ作ることになる。之は理窟でなくて、廣い世の中には相當に多い事實である。そんなわけで此の主張は少しも遠慮しないことにする。遠慮しないばかりではなく、私の積りでは此の本を讀んだ爲め、新に節約から掛金する保険の一口でも出來たなら、それこそ立派に貯金國策への御奉公になると思ひ、特に此の出版を急ぐことにした。

一、京都一燈園の西田天香師から此の著に題字を頂いた。平凡は深坑の如く、残念乍ら平凡人の聲は家庭と隣人以外には容易にとゞかない。先生に乞うてメガホーンになつて頂いた。

一、遇然本書の舊版を讀んで頂いたことが縁となり、此の改訂版には慶大經濟學部教授園乾治先生から序文を頂くことが出來た。之は私にとつては望外の仕合せ、御覽下さる通りの長文の序を頂いた時、私の感謝、感激を即時打電して御禮を述べた。無論歌でも詩でもなく、其の時の心持を其の儘に寫した電文は、

人世知己ヲ得タリ 轉タ永遠ノ生ヲ憶フ

筆ヲ執ル二十年 讀者ハ一人ニシテ足ル

で、頗る樂屋落ちの獨り合點が多いけれど、私の積りでは、……當代保險學界の權威たる園先生と、未來ある先生の門下學生諸子を通して（園先生は私の呈上した舊版物語を學生に讀ませるとして、慶大圖書館へ寄贈して下さつたが、此の改訂版も亦恐らく斯くして頂くことと思ふ）小さい乍らも永遠の一波を保險界に送り得ることを喜ぶ心情を述べ、又此の本を書き始めてから最早二十餘年になるが、先生の序文を「讀者の一人として」の題目で頂いた處から、こんなに私を理解して下さる唯一人の讀者を得たことに依り、私の二十年來の勞苦は酬いられ過ぎる程酬いられたとの意味であつた。

一、引用書では、粟津清亮、森莊三郎、園乾治、下村重美、龜田豊治朗、末高信の諸先生の著作に負ふものが多い。その他、保險學、數學の著書、保險に関する諸雜誌から材料を頂いた處が少くない。茲に謹んで感謝の意を表する。

昭和十四年五月二十五日

著者識す

目次

第一章	弓と鐵砲、貯金と保險……………	(一)
第二章	生命保險……………	(二)
第三章	保險ぎらひ……………	(二七)
第四章	死……………	(三四)
第五章	貧乏破産……………	(四〇)
第六章	能率の上から見た貯金と保險……………	(五)
第七章	貯金の利子と保險の配當(其一)……………	(六三)
第八章	貯金の利子と保險の配當(其二)……………	(七五)
第九章	保險の効力延長……………	(八四)
第十章	保險増額の一便法……………	(九四)

第十一章	保 險 と 安 心	(一〇六)
第十二章	共同の奇蹟、組織の力	(一一七)
第十三章	生命價値の資本化(其一)	(一二三)
第十四章	生命價値の資本化(其二)	(一三四)
第十五章	資産家と生命保険(其一)	(一五六)
第十六章	資産家と生命保険(其二)	(一六九)
第十七章	生命保険の利用	(一八七)
第十八章	生命保険の歴史と沿革	(二〇八)
第十九章	保険料は斯くして計算する	(二一九)
第二十章	株式會社と相互會社	(二三三)
第二十一章	生命保險會社の良否は何を標準として定むべきか	(二三四)
第二十二章	何れの會社を擇ばんか	(二五〇)

第廿三章	保 險 の 契 約	(二五七)
	(雜 篇)	
	保 險 繪 ば な し	(二七〇)
	某生命保險會社の保險金(死亡)支拂月報を見る	(二七六)
	雜 談	(二九二)
【附 録】		
	著者の身の上ばなし	(三一九)
	本書の反響と保險人の本書利用に就て	(三六三)
	あ と が き	(三六八)

生命保険物語

津田侃二

第一章 弓と鐵砲、貯金と保險

世界に類なき勇敢、敏捷な我祖先は、「イナゴ」の様に飛んで来る弓の矢を、左右に切り拂ひ切り拂ひ敵陣へ突入したものと見へるが、眼に見へない鐵砲玉には一寸困つた。徳川時代の武勇傳に屢々出て来る「飛び道具とは卑怯な奴だ——」と眼をグリグリ瞪る豪傑も、子孫幾代の後には完全に、オチ二進めの兵隊さんが持つ飛び道具に舞台を譲つてしまつた。

生活安定の武器として、貯金の弓か、保険の鐵砲かといふ問題は、「時」が解決して呉れる筈だけれど、諸君は今弓から鐵砲へ移り行きの時代に生れ合はせたのだから、自分で選擇し、自分で決定せねばならぬ。若し私の警告を無視すれば甚だしい危険に陥る。ソレならナゼ貯金が弓で保険が鐵砲であるかは、此本を讀み了らるる前に、完全に御理解出来ることと思ふが、保険にソレ程發明獨創の多い説明は手間取るから後に廻はし當面の現實へ當てはめて見ればよく合點が行く。

ソレは今「あなた」が日本國中誰一人非難するものなく、上下擧つて獎勵しつゝある「貯金」といふ天下の大道を歩むとしても、之と保険の前後を考へて見る丈の注意を怠らば、明日妻子を路頭に迷はせるかも知れぬ。

若し貯金といふことが、貴下の家庭で多少でも問題であるならば、此小冊子讀了の後「アツ危ふかつた」と氣付かるゝこともあるだらふ。(口繪、鐵道踏切の「頭を右左」)
 「貯金が危ない」など非常識の様だが、眞實なら致し方もない。殊に中流、中産、知

(錯覺) ひ違ひ目		(臆斷) ひ違ひ思	
①	同じ長さの二線がコン 長短不同に見へ	②	此の正しく平行せる六本の線が 斯くも甚だしく歪んで見へる
③	見た眼の感覺は二十尺の電柱が 高一万二千尺の富士より	④	あなたに眼に若し同じ金高が 生命保險證書 出た關係で 自然此の右と左が同一に見へたら
⑤	それは長さが略等しいから 此の弓で	⑤	然り 甚だ危険な臆斷である

識階級と稱する頭腦勤勞者、サラリーマン諸君に於て生活安定の爲に貯金萬能の考へは最も警戒せなければならぬ。見よ中級以下のサラリーマン諸君が、貯金らしい貯金を作り得るといふことは、ソレ自体が立派に婦人雑誌の記事になり得る程困難である。のみならず假にも五、七年乃至十年、十五年の年月を経なければ断じて出来よう筈がない。處が「生き身」をかゝへてゐる吾々は、何時萬一の不幸に襲はるゝかも知れない。其時の悲惨は想像する丈けでも御互の顔を暗くする。

手近かな一例を擧ぐれば月収百圓の某甲が、假に一ヶ月十圓づゝの貯金を勵行し、満足に三年を経過した處で突然死の不幸に陥つたとする。其時元金の總計が三百六十圓、若干の利子を加へて見ても四百圓には達し兼ねる。之ばかりの金は葬式費用と家の跡始末に消へてしまふ。残る妻子はドウして明日のパンを見出すだらふ。平生蜂や蟻の例を擧げて、萬一の場合に備ふる爲め貯金せよと教へられた其貯金が、コンなモロイ始末では、悲惨といはふか慘酷といはふか、まことに憫れな話である。私が思ひ切つて「貯

金が危ない」といふのはコンなことがあるからだ。

サテさうすると世の中に實際貯金より外に吾々の爲に萬一の場合を救ふものはないのだらうか。否確かに一つある。貯金によく似て而も萬一の不幸を救ふ段には天地雲泥の相違あり。それは生命保険である。今、甲と同じ境遇の乙某(三十才)が、同じ金額の毎月十圓を年掛百二十圓(半年掛ならば六十圓づゝ二回)の生命保険として掛けて居たとすれば、三年はオロカ契約の翌月に萬一のことがあつても、乙は四千圓を妻子に遺し得ることになる。四千圓は四分利公債を額面で買つても毎年百六十圓の利子を生み、一カド頼みになる遺産である。生きて働いて十年辛抱しても出来兼ねる四千圓が、百圓掛けた翌月に取れるとなれば世間の諺でいふ遺族の死亡成金、こんな木に餅の生る様なウマイ話が、三井三菱の銀行へ預金をしたと同様の確實さを以て諸君を待つて居るのに、何を苦しんで割の悪い貯金を先きにせねばならぬか。

元來出来た額の大小に拘はらず、月々十圓づゝの僅かな金を溜めて作つた貯金は、遊

山氣分で温泉へ行き、一日十圓づゝ消費する性質の金ではない。之れこそ一にも二にも、萬一の場合家族の危急を救ふ用意の金で、名は貯金と稱するも其實最初から目的は保険である。適切に言はゞ甲は個人で保険を自營して居たのだ。一家で溜めたものを萬一の場合一家の役に立てる式の保険、即ち吾人が貯金と稱するものは、舊式も舊式、希臘羅馬の昔より尙ほ遡り、人間が水草を逐ふて住居する時代から行はるゝ原始的方法であつて、或る意味では蟻や蜂の共同貯蓄より一段低級なものとも言へる。そんな舊式なものに頼ることは、眞に迂濶を通り越して大なる危険である。

凡て時代の文化に逆行するものは甚だしい危険に陥るものだ。一萬噸級の大汽船のある今の世に、千石積みの帆船で大洋を乗り切らうとするものは、何時暴風颶風で生命を失ふか知れない冒険だ。今の甲乙兩人の話にしても、未來の萬一に備ふる爲めには、今日吾人は一萬噸級の汽船に比すべき生命保険を持つて居るのに、甲は何を苦しんで舊式な貯金丸の帆船に乗つて、此の複雑危険な二十世紀の荒海を渡らんと企てたのか、ソレ

がそもそも間違ひのもと、其の不注意に對し、冷酷な自然の裁判は三千六百圓の罰金を課し、當然得べかりし四千圓の代りに、僅か四百圓丈けを涙にぬれた遺族の手に残して呉れたことになる。

一寸待つた、君の言ふ所は解つた様でどうも解らない。先づ第一に自分の常識が承知しない。ソレ程危い貯金を政府はなぜ奨勵するか？ 又天下の學者は此大切な事實をなぜ民衆に教へないのか？……との御質問が出たやうだが、政府には國策上極めて直截簡明に貯金を奨勵する必要があり、随つて貯金と保険の前後にまで干渉出来るものではない。又現在に於ても四十三億圓餘の郵便貯金を持つてゐるけれど、昔から貯金萬能の方針でないことは事實が證明してゐる。御覽なさい、今から二十三年前、大正五年一月一日始めて郵便貯金と併行して簡易生命保険を始めた處、民衆は決河の勢で加入し、其契約高現今實に五十九億圓に上つてゐる。

簡易保険は元來財的には餘り恵まれない同胞諸君、換言せば卸値で安價に買へる千圓

の民營保險すら尙ほ買ひ兼ねる人々の間に、毎月三、五十錢乃至一圓、二圓ソッコの掛金で買はれる小額保險であるから、小賣値段とも言ふべき、相當割高の保險料を拂はねばならぬに拘はらず、斯くも繁昌する所以は、保險に對する力強い要求が、社會の下層になる程強くなつて行く生きた證據だ。然り、政府は二昔も前に此要求を察して、チャンと實行に移してゐる。

次に學者はどうかと見るに、日本の學者は一般に民衆相手の教育を重視しない様だが、保險に於て殊に此感がある。タマに教へて見ようかといふ學者があつても、保險が商品である以上、親切過ぎれば誤解を招く虞れもあるから、一寸手が出ないのかも知れぬ。最後に保險會社こそは最も痛快、明確に貯金と保險の輕重前後を教へてくれる筈であるのに、不思議なことには平生注意してゐる私でも、此方面からトンと適切な話を聞いたことがない。萬一立派な説が唱へられたにせよ、保險會社の保險禮讚は、手前味噌として甚だしく割引して聽かれる。随つて宣傳効果は少ないだらふ。

斯く數へ來れば諸君は今日迄、貯金と保險の前後に就て全く無反省に經過されたことと思ふ。そこで私は今最も大膽卒直に貯金——萬一に備ふる爲の貯金、換言せば保險の意味での貯金——の短所を列記して此章を終ることとする。

(一) 萬一の場合一家の急を救ふ意味に於て、貯金は保險よりも遙かに非能率的である。今の世に能率を無視するものは劣敗する。之れは後章「能率」を説く際更に詳説する。

(二) 同一の意味に於て貯金は五年、七年、十年を經過するも尙ほ遠く保險に及ばぬ。今日の如き低金利が續くものと假定せば、貯金は十五年二十年の後と雖も永久に保險と比肩する望みがないことになる。萬一こんな永年の後漸く兩者比肩の日があるとしても、此の十五年、二十年の永い不安の月日をどうして過ごすかを一考して見ねばならぬ。

(三) 諸君の既往を顧み、諸君の知己、友人を見廻はして、一家の萬一に安心出来る

程の貯金らしい貯金が、例へ十年、十五年の後にも出来る自信のありや否。

(四) 貯金は兎角中絶し易い。保険は始めた限り強制の意味もあり、四五年掛け續けた後は、三年も五年も掛金を滞納しても效力の消失しない便法が、多くの會社に設けられてゐるから、月掛貯金よりも數倍繼續の容易なものである。

此外貯金と保険の優劣前後に就て細説する機會は多い筈だが、此章では只だ從來諸君が持つて居らるゝ貯金萬能の御考へに、電光一閃の疑問が起り、之から後に説く保険の話に、多少の注意と興味を惹き得れば足る次第である。

第二章 生命 保險

世の中には三種の生き方をする人が住んで居る。

- (一) 生存上今入用の金を儲ける人…………… 最下級労働者
- (二) 生存上今も後日も不用の金を儲ける人…………… 富豪資産階級
- (三) 生存上後日入用の金を儲ける人…………… 中流階級

生存上とは單に生きて行く必要の衣食住を意味し、殊更生活と言はず生存の字を用ひた。さて右の三階級の區別に於て、生存上今入用の金を儲ける人とは、最下級の労働者諸君であつて、眞に氣の毒な境遇の人々。所謂『土方殺すに刃物は要らぬ、雨の三日も降ればよい』といった様な階級の人、毎日主人が働いて取つて歸つた金で毎日細君が米屋に走る。たつた三日か四日の雨降りが續かば、實際に此の歌の通り死ぬ生きるの大問題が

起る。世には斯かる不幸の生活を送る人々が随分澤山ある。之れを他所事と見る様な不人情な考へを起しては相濟まぬが、此の人達の救濟は社會政策の範圍で攻究せらるゝものとして、之れ以上の探索は今御預りとして置く。

次に第二の生存上も後日も不用の金を儲ける人とは所謂富豪資産階級で、前の第一と全然反對の階級、此の階級には金は有り餘る、有り餘らねば富豪とか資産家とは言へぬ。新聞の三面を讀んでも中等下等の社會では、タツタ五十圓百圓の御金で毎日の様にお輕が身を賣り勘平が腹を切つて騒いで居るのに、此處は又悠長な別世界、××家の賣立と名は大袈裟でも實は御庫の整理に所藏の一部を賣りに出せば、茶壺一つが五萬圓、床繪一幅十萬圓といふ豪氣な話。全く貧乏人の膽玉は潰れてしまふ。こんな風だから此の人達の境遇では、單に生きるといふ丈けの費用は収入の十分の一か百分の一、中には千分の一で結構といふのもあるだらう。吾々が數學上實際は曲つてる弧の一部を直線と見做して、却つて説明の付き易いことが屢々ある如く、生存上必要の百倍も千倍も儲け

る人は、前の第一の階級に比較して考へる時は、生存上には不用の金を儲けると言つた方が適切である。此の階級のことによつても、語ることにあるにはあるが、話の順序で後廻しにする。

愈々最後に第一と第二の中間に位する第三番目の生存上後日入用の金を儲ける人、即ち吾々の屬する中流中産の階級を調べて見ると、此の後日の二字が實に重大の意味を以つて光つて居る。こゝに救濟があり、こゝに活路が見出せる。言ふ迄もなく『後日』とは明日も後日なれば數十年後も後日だ。中流階級の人々が苦勞するのは、考へてみれば此の後日入用の金である。第一番目の下級勞働者諸君と違つて、今日雨が降らうと明日風が吹かうと夫れに心配はない。病氣とあらば今月一ヶ月休むとも、今年一パイ動けないでも、未だ飯の喰ひ上げにはなるまい。近頃は失業の厄難にも相當脅かされるけれど要するに先きの事を考へない限りは喰つて通るに心配のない有難い境遇。自分が健康でさへあらば小供の教育もどうにか出来るだらう。假令今直ぐに大枚の學資を出す資力は

なくとも、今小學校に通ふ子供が職業學校とか専門學校乃至大學迄行く頃には、地位も進み収入も増すだらふ。出来ぬ様でも幾分かは貯金も出来てるだらう位の希望はある。只一つ月に叢雲花に風、自分の軀に萬一の事があつたら其時こそは、妻子を路頭に迷はすか、さなくとも昨日に變る今日の零落、サテも憐れな境遇に陥る恐れがある。思ふてこゝに至れば全身の血が一時に凝る程の氣持ち。『後に残りし妻や子が、どうして月日を送るやら』で昔も今も變らぬ中年男子の煩悶を痛切に覺へる、此の萬一の場合が私の言ふ後日だ。又長命するにしても學校を出た計りの長男に、直ぐから老人夫婦の厄介を掛けるも氣の毒、長命には長命の悲哀がある。慾を言へば死損つても養老金丈けは欲しい。之れも後日の内に加へて宜しからう。

要するに中流階級の人々は前にも言つた様に後日入用の金で苦勞すると謂つて間違ひない。處が此の後日が明日にも来るか、五年十年の先きか、乃至三四十年も先きかトンと見當が付かない。これ計りは御釋迦様でも判らないことだ。それで甚だ作戦計畫に

困る。前の章に書いた百圓足らずの月收の人が、よくよくの思ひで毎月十圓づゝ貯へて見た處で、二年か三年の内に死んだ日には三百四百の目腐れ金、葬式費用に消へてしまふ。あなたがち俸給生活者でなくとも、事業家が事業半ばで不意に殞れたら、手を擴げたことが却つて累をなし、一家破滅の不運に陥る例はいくらもある。要するに此の後日が果して何時来るかさへ判つて居れば、こんな悲劇はない筈だが、何分にも人事百般一寸先きは闇で致方もない。

それならどうしても此の後日の来る時期は判らないものかといふに、不思議にも只一つハッキリと判ることがある。八卦でもなければ、千里眼でもない。統計といふ奴だ。無論一人一人に就ては判りつこはないが、千人なり萬人なり集まれば、本年四十歳の人今年中に何人死ぬ、又此の年の人を平均すれば今後何十何年何ヶ月生きる、五十歳の人ならイクラ、三十歳の人ならイクラと正確に定まつて居る。一寸氣味の悪い話だが殆んど動きはないから立派に豫算が立つ。戦争とか疫病とかで少々動いても、大体に於て

平均壽命表 (内閣統計局第五表)(男)

年齢	平均壽命	年齢	平均壽命	年齢	平均壽命
0	44.82	35	29.61	70	7.43
1	51.07	36	28.83	71	7.03
2	52.35	37	28.05	72	6.66
3	52.54	38	27.28	73	6.29
4	52.33	39	26.51	74	5.94
5	51.85	40	25.74	75	5.61
6	51.18	41	24.99	76	5.29
7	50.42	42	24.23	77	4.98
8	49.62	43	23.49	78	4.69
9	48.79	44	22.75	79	4.41
10	47.93	45	22.02	80	4.15
11	47.05	46	21.30	81	3.90
12	46.17	47	20.58	82	3.66
13	45.28	48	19.88	83	3.43
14	44.41	49	19.18	84	3.22
15	43.58	50	18.49	85	3.02
16	42.79	51	17.81	86	2.83
17	42.07	52	17.14	87	2.65
18	41.40	53	16.49	88	2.48
19	40.78	54	15.84	89	2.32
20	40.18	55	15.21	90	2.17
21	39.57	56	14.58	91	2.03
22	38.95	57	13.97	92	1.89
23	38.32	58	13.38	93	1.77
24	37.67	59	12.79	94	1.65
25	37.01	60	12.23	95	1.55
26	36.33	61	11.67	96	1.45
27	35.63	62	11.14	97	1.35
28	34.91	63	10.62	98	1.26
29	34.18	64	10.12	99	1.18
30	33.43	65	9.64	100	1.09
31	32.68	66	9.17	101	0.99
32	31.92	67	8.72	102	0.84
33	31.15	68	8.27		
34	30.38	69	7.84		

相場を狂はす程の變動は先づないと言つてよい。之れが所謂『大数の法則』だ。
 世の中には生れる子も生れる子も皆女ばかりで、之れが第九人目の娘ですと嘆聲を漏らす一家もある。コンなことから平宗盛は、生れた計りの平家の姫君と取換へた傘屋の男の子だとの傳説がある位。生れる子の男女程兩親の思ふに任せぬものはないのに、一縣乃至一國の大局から見れば男女は常に略ぼ同數である。日本内地の人口を調べて見れば男三四、七三四、一三三人、女三四、五二〇、〇一五人で不思議に半分づゝになつて居る。之れと同じく永年掛つて作つた人間の死亡生殘表といふものは、恐ろしく正確なもので、生命保險會社は之れを標準にして計算を立てると、殆んど損をすることはない。今諸君に最も判りよい平均壽命表(前記、死亡生殘表より導きたる)を左に掲げる。

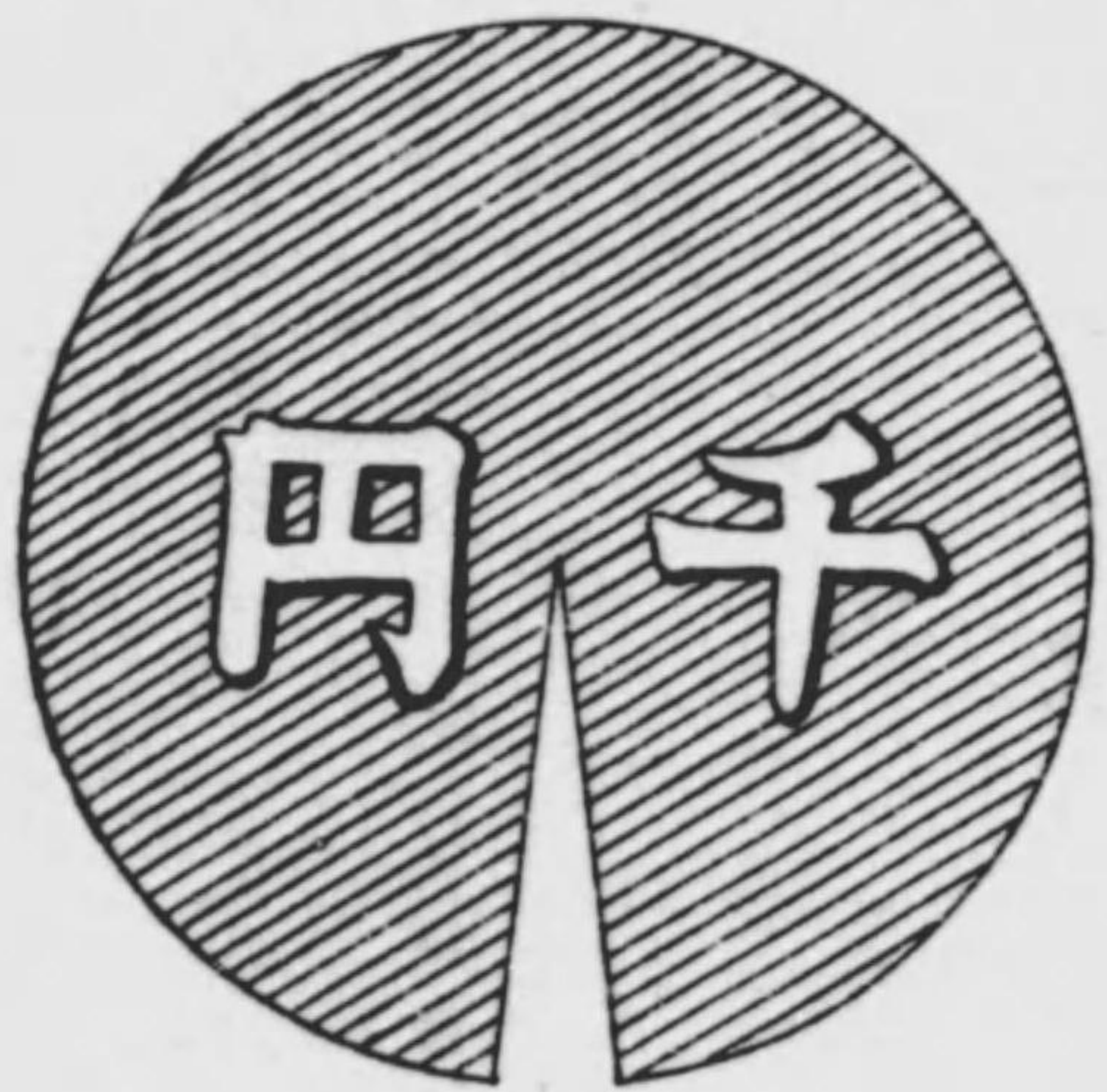
此の表で年齢三〇の欄に平均壽命三三・四三とあるは、三十歳の人は今後三十三年と一年の百分の四十三丈け生きるものと見て差支ないのである。

コ、に年齢三十歳で月々十圓内外しか餘裕の生じない苦しい生活の人が、ドウかして自分に萬一の事があつた時、妻子の迷はぬ様四千圓の金を貯蓄し度いと希望を抱いたと假定する。併し此の人が四千圓の持主になるには、毎月十圓づゝ貯金して約二十三年(三分の複利として)かゝる。其時迄は前に書いた後日(明日にも來はしないかと不安々々で日を暮さねばならない。諺にも十年一昔といふが、ソレよりもまだ永い年月の間、此の不安が続くとすれば、眞に『忍ぶることの弱りもぞする』の嘆がある。

處がコ、に一大吉報あり。多くの人の斯かる不安を即座に救ふ爲に生命保險會社といふ御店が出来た。店の信用はマコトに申分がない。日本の長者番附で一二を争ふ三井、三菱、住友にも此の店を出して御座るが、事業繼續の年數と大きさでは之れよりもまだ上を行く大店もあるとのこと。此の店へ行くと後日札(保險證券のこと)と名の付く札を

賣つて居る。一枚の額面は概ね千圓、五千圓から一萬圓位迄、タマには五萬、十萬といふ大物もある。

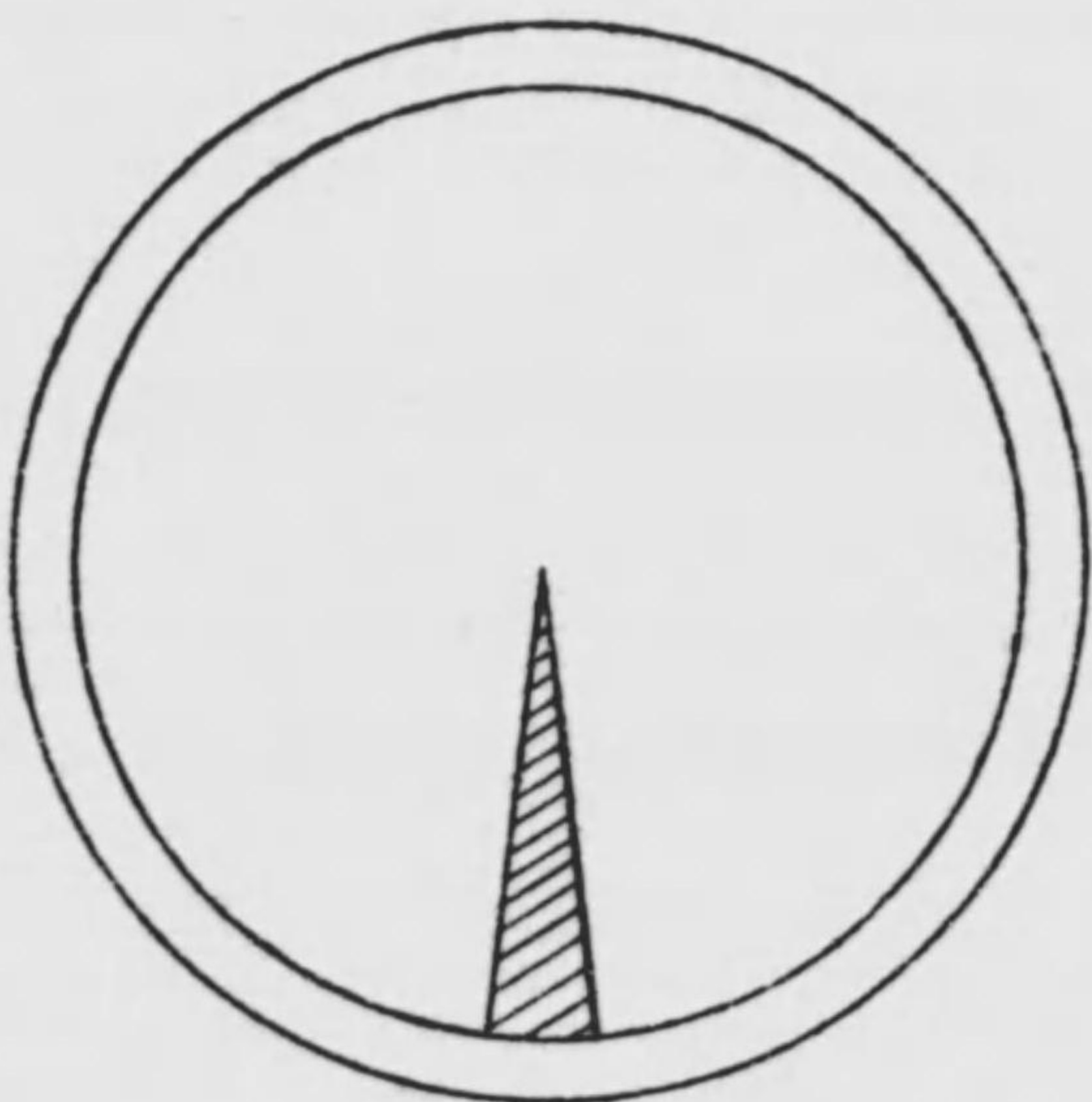
後日札理想像圖



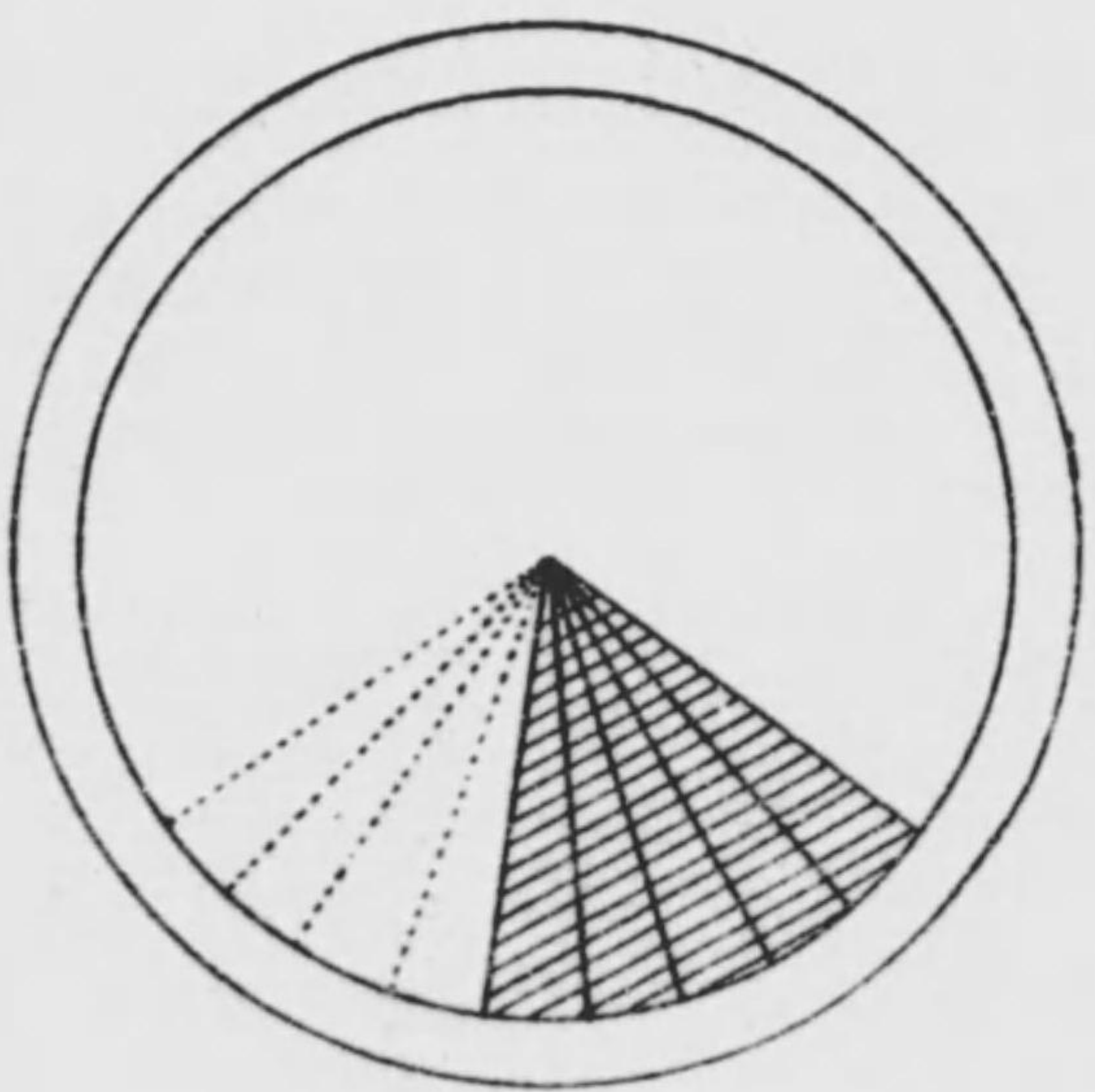
(甲)



(乙)



(丙) 乙ノ一片ヲ嵌メタル圖



(丁) 点線内(四年間)ハ掛金ナシニ効力ヲ持續シ得ル圖

買ふ方の都合次第では一度(一時拂)に金を拂つて、額面千圓の後日札を三四百圓(年齢三十歳前後)で買はれぬこともないが、ソんなことをするのは金の有り餘る人の話で

減多にない。

此の札は『切り賣り』するのが普通で十分ノ一づゝ(十年満期養老又は十年拂込終身保険を指す。以下此の例に依る)でも十五分ノ一、二十分ノ一、乃至三十分ノ一づゝでも切り賣りして呉れる。更に小さいのが欲しくば三十分ノ一を又半分(半年掛)にでも切つて呉れる。乙圖が其切り賣りの一片であるが、イクラ小さい一切れでも必ず次の文句が書いてある。

預　　り　　證

一金△千圓也

右正ニ預リ申候、若シ貴殿今日以後一年(半年)以内ニ死亡ノ際ハ此ノ小片引換ヘニ金△千圓相渡シ可申候

但シ此ノ小片三十枚(一年掛三十年満期養老保険ヲ例ニ取ル)御揃ヘ御持參ノ方ヘモ同様金△千圓(額面ノ全額)相渡シ可申候

又『切り賣り』の最初の一片(圖乙、第一回掛金のこと)を買ふ時に、此の一片づゝを順々に嵌めて行く外枠(圖丙、保險證券のこと)を同時に渡される。此の枠を一パイ詰めたばかつたら、無論額面の金額を渡して呉れるし、萬一死んだら假令一片か二片を詰めたばかりの時でも、文句を言はず額面全額を渡して呉れて、モ一切り賣りを買ふ義務は全くない。

此の乙なる一片の價は買ふ人の年齢に依り、随分の相違があるが、假に貴下が三十歳としたら、千圓の後日札三十分ノ一の一片が三十圓、四十歳として四十圓位である……ドーです、永い年月を不安、不安でクヨクヨするより、只の三十圓で千圓の預り證(千圓は單位で千圓の二倍、三倍、五倍、十倍、百倍自由なり)を得られる此の後日札を御買ひになつては?。貴下の掛金の續く限り此の一小片(圖乙)は額面全額の現金と變りはない。蓄音機やシンガミシンの月賦賣で、代金は未済のまま、現品は最初の掛金引換へに當方へ引取つて直ぐに楽しめると同様、貴下は三十圓で千圓、三百圓で一萬圓の

安心を即刻引取つたことになる。

只掛金が續くか知らとの不安が直ぐに起きるかも知れないが、ソんな心配も最初の三四年のこと、勿論初めの三年や四年は假令借金しても丹念に掛金して行かねばならぬが、三年以上を経過すれば一定の解約返還金といふものを生じ、此の返還金を掛金に利用すれば四年目を一年、六年目からを四五年は掛金を怠つても失効しない。圖の丁は『乙』の一片づゝが五つ嵌めてあつて、其次にある點線の四片が掛金を怠り乍ら四年間效力を持續して居る實況を示したものだ。四五年掛金を怠つても失効しないなら、ソんなにビクビクしなくともよい道理だ。

ヨク解つた。今一度念の爲に聞いて置くが、辨慶の千人斬りが義經一人で行き詰つたやうに、廿九片の『切り賣り』を買つて残る一片がドウしても買へない時、之れ迄の苦勞が水の泡になる様なことはないのだね。ソレは勿論、此の小札を十五片も買つた時は、モ一前の效力延長を利用して後一回も買はずに、遙か向ふの三十年のベース(満期のこと)

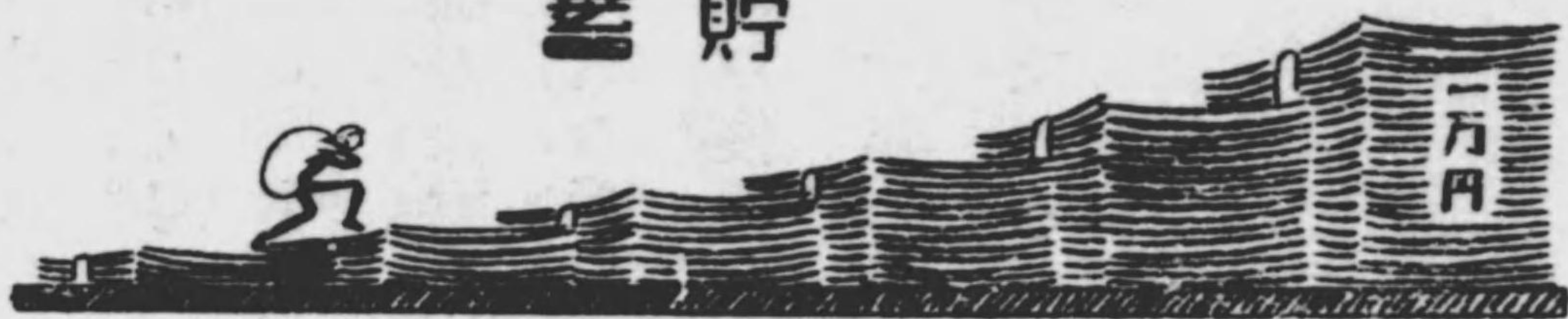
と)へ滑り込みが效く。況んや二十九年にもなつたら解約しても返還金がザツと九百三十圓(三十年目の掛金を出さずに済むから四十圓丈けの損)は取れる(解約返還金)。無論未熟の果物をムシると同様、損は損だが斷じて全損にはならない。(解約返還金及び效力延長のことは後章に詳説)。之れで話しを今少し前の後日札へ返す。

店(保險會社)では前掲死亡表に據り、各年齢に應じ額面千圓に對する『切り賣り』一片の定價がチャンと定めてあるから年齢は幾歳でもよい。大抵多くの店では十歳前後から六十歳迄の申込を受ける。随つて其間の年齢の定價表が作つてある。此の定價を保險料といふ。たゞ此の切り賣りといふ語が、多少諸君の御耳に障るかも知れないが、併し切り賣りほど便利なものはない。昔から百萬石の殿様でも鯨の丸買ひは出来ないと言ふ如く、今時の百萬長者でも、牛肉と鮪は切り賣りを買ふ筈、誰れも買ふ切り賣りを彼是言ふ必要は更でない。否觀來れば今の世に瓦斯、電燈、ラヂオ、水道、電車、汽車、旅館劇場、何物が切り賣りでないものがあるか、こんな風にも考へることが出来る。

文明とは最も多く切り賣りを買ふの便宜を享くる生活なり——と。切り賣りなんて決して馬鹿には出来ない。

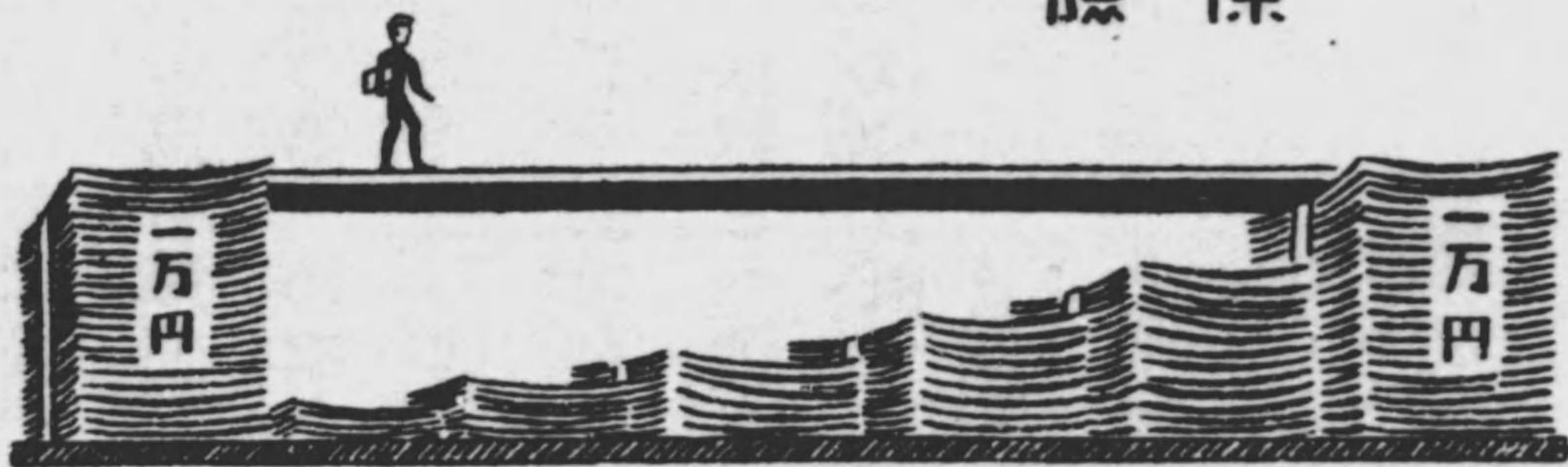
今一つ變つた譬へを引かう。誰れの家でも夫婦で始終物語りにする手近の目標があるものだ。勿論其人々の境遇で違ふけれども、最低千圓もあれば三千五千乃至一萬、其邊の處迄行けば一先づ安心だがネーと口癖の様に繰り返さるゝ所謂第一目標の金高がある。夫れから先は慾に限りがないから、多い程よいわけ。千圓になれば三千、五千、五千になれば一萬、二萬と際限なく目標は先へ進むけれども、私の申す第一目標とは極めて手近の而も之れ丈けは是非共なければ萬一の際に忽ち困る金高で、大抵は貯金にしても或は事業の上からでも、五年、七年乃至十年以内に達せらるべき、空想に非ざる分の目標。此の位クドクド説明すれば直ぐにも、ア、宅では三千圓ネーと奥様が主人を顧みられる筈だ。私は之れを家庭の天王山、乃至二〇三高地と名付ける。此處へ達したら大願成就と申す程でなくとも、ヤレヤレと一と先づ安心の背伸びが出来る。大阪城を指

貯蓄



此の道険はし氣を付けて、汗と膏で辛抱して、無事で登れて十五年、それは御無理よ二十年

保険



此の道易し氣も安し、ころびや直ぐ着く乗物で、ころばにや散歩ゆるゆると、花見月見で樂に着く

これは一言の説明も加へずして、保険の有り難味を圖面で解らせる、世界的といつてもよい一名畫である。此の章の本文に合致させる爲には金高を三、四千圓と書くべき筈だが、矢張り此の繪の持ち味を損はぬ爲、一般に書き慣らされた通り一万圓(一万弗)として置く

○説明が要らない代りに繪の下へ「著者の感じ」を其儘に書いて見た。

顧の間に見下す天王山、旅順陥落は後一押しと謂ふべき二〇三高地、之れを占領するに屍山血河ヨクヨクの悪戦苦闘を豫期して居たのに、之れは又案外容易な占領の致し方がある。外でもない三千圓を第一目標とする一家では、百圓（三十餘歳）を以て先づ三千圓の保険を契約することだ。然らば間道より手兵を急派して形勝の地を奪ふといふ形で、只の百圓（半年掛なら五十圓でもよい）で三千圓の第一目標へ占領の旗が立つ。之れより後は一年毎に百圓の兵隊さへ送らば、遂には確と我が物になること疑ひなし。五年、十年の先と思ひし目標は今日直ちに到達して、従前の取越苦勞は一掃される。何と愉快ではないか。

第三章 保険ぎらひ

前の章に言つた如く世間には全く保険に注意を向けない人も多いが、不注意を通り越して『保険ぎらひ』を標榜する人も随分多い。きらひと迄行かずとも好きになれない人ス、めらるるまゝに少しは保険に入つても、イツも掛金が大儀だとコボしてばかり居る人も多數にある。

實を言へば保険の心配なんか要らない世の中に住んで見度いものだ。ロイドジョージが英國の議會で養老年金制を提出した時に獅子吼した。「此の祖國を死守するに足る丈けの國にする爲めに此案に賛成されたい。」の一言は一應の道理がある。忠實に勉強し乍らも一生貧乏する人の死亡には國家が妻子の生活を保證し、其人の老病には國家が養老年金を支給する様になり度いものだ。併し之れは今の處一つの理想に止まる。

今の世の中に「保険ぎらひ」といふことは、前の理想論に非ざる限り、最も大膽な無智を表白するものである。併しナゼそんなにキラヒになつたかを調べて見れば、相當に理由がないでもない。

第一はポロ會社に手を焼いた人々、之れは少し以前だが、折角掛金を續けた會社が次に倒れて元も子もない様になり、保険を親の仇の様に思つて居る人が相當にあつた。次は明治から大正にかけて契約した無配當保險の契約者で、元金丈けでも現在既に保險金以上に掛け込んでゐるといふ老人も少くない。之が今でも相當に「保険ぎらひ」を製造しつゝあると思ふ。併し之等は最初から會社と保險種類の選擇を誤つた自業自得で、ポロ銀行に懲りた田舎の婆さんが、現金を寢床の下に入れて毎夜眠れないといふに等しい。コンナ人は之れ迄の損を取返す爲に、今度こそ確實優秀の會社を擇び、更に充分契約の種類を擇んで自分が這入れなければ自分の子や孫なりとも今一度這入らせるのが眞の道である。

第二に保險ぎらひといふ人の中には、其實保險がきらいではなく、保險へ入れ入れとすゝめられるのが嫌ひ、といふ人も少くないやうだ。近頃では保險を人にスゝめて加入させることを保險を賣ると言ふが、前の章に私の例へた「後日札」を、先方からワザワザ賣りに來ることも屢々ある筈だ。

然し既に保險が賣物買物となり、種々の因縁をタヨつて押賣りせられたら、嫌ひにもなるだらふ。此の點に於て私の理想とする保險の文書宣傳。例へば此の本を讀んで貴下が得心が行つたら自分で保險會社へ申込む。得心が行かねば其儘書棚へホリ込んで置くといふ心持ちには、全く強制強要の意味がなく、眞に冷靜の判斷が出來てよいと思ふ。

第三に保險がキラヒといふ人には、スゝめらるゝ材料がキラヒといふのも隨分ある様だ。苟も保險をスゝめるからには

「死」 「貧乏」 「破産」

といつた様な社交上忌むべき語が必ず保險の根底に横はる。之れが目ザハリ耳ザハリに

なるものらしい。「四」の字さへ死と發音が似通ふとて避ける人情の弱點へ、生命保險と言ふものゝ實は死亡保險だからヨイ氣持ちはしないだらう。併し汚いからとて家を構へて便所を置かぬといふ我儘は通らぬ。便所を邪魔扱ひするよりも、根津嘉一郎サンの様に、疊を敷き本棚と置時計を据へて置く方がまだ賢いかも知れぬ。

『死』はマダよいが貧乏、破産と來ては實際鼻ツマミ、イクラ正眞正銘の貧乏人でも、面と向つて貧乏貧乏と言へば氣を悪くする。況んや紳士の服裝をして紳士の卓に就いてる人々に向つて、『貧乏』の話なぞはドウあつても調和が悪い。更に況んや『破産』ナゾとウツかり口をスベらさうものなら、追ひ出して鹽を撒かれる。此の難問題を如何に取扱ふか、保險を賣る人の苦勞の種、困難の程、察するに餘りありだ。

或る時私に保險をス、めに來た老練の外交員が、「先生ナド御軀が金の無垢ですからドウゾ今少し保險を」と暗に私が醫者といふ紳士に似た羽織労働者であつて、今死んだらサゾ遺族が困るだらうといふことを、婉曲に悟らせんとしたことがある。私は其巧妙な

修辭法に覺へず失笑した。

修辭の巧妙は感服の至りだが「御軀が金の無垢」位るではナカナカ夢が覺めぬ。矢張り私が親戚友人の極々親密な者等に用ひる正面攻撃の「貴様今死んだら後の家族がドウなると思ふか？」の巨彈一撃で粉碎するのが一ばん有効だ。尤も之れは初對面の方や餘り懇意ならざる人々に對しては用ひ難く、矢張り一步退いて保險の理を説くより外はない。

併し實際に於て「保險キラヒ」とか保險に無關心といふ人の出来る最大の原因は無理解である。今でこそ日本も契約總額二百十億圓（昭和十二年末簡易保險郵便年金を含む）世界で第三位の保險國になつたが、之れで漸く保險が解りかけた計りのところ、ダカラ未だ未だ解つた様でも解らない人が多い。ソレに保險キラヒと同様に困るのは、一千圓の年收ある人が一千圓の保險を付けて置いて、之れで保險が解つた積り、濟んだ積りで居るのが非常に多い。之れなぞは保險を「オモチヤ」にして居る様なもので、死んだ時に

始めて細君がしみじみ「オモチャ」であつたことを感ずるがモ一遅い。私が頼まれて保険會社へ死亡診斷書を書く時に、奥サンが屢々訴へる悔恨は「コンなに早く死ぬとすればナゼ今少し澤山に保険を付けてもらつて置かなかつたでせう、残念です」と。

元來日本人は國民性として保険に無頓着な傾きがある。日本一の無柱大建築國技館が焼けた時は歐洲戰好況時代の鐵の高い時でもあつたが、保険金が僅かに十萬圓で燒跡の古金の値が十五萬圓、若し保険の法に依つて保険金を受取る代りに燒跡の始末を保險會社に任せば、火災保險が付いて居た爲に却つて五萬圓の損が行くといふ珍談を帝都の眞中で作つた國民、豐葦原瑞穂の國といふほどの農業國の農民が「百姓ナンて確い様でも一六勝負です、一年中の汗水が二百十日の半日に吹き飛ばされますからね」と維新開國七十年、未だに適切な農業保險を作り得ない國民。此の國では世に時めく顯官將軍乃至朝野名士の遺族が、主人の歿すると共に急に落魄するを珍らしとせず、わけても中流中産の階級では、主人の死が忽ち一家全滅の悲運を生むこと火を賭るより明かなるに拘は

らず、浮世の荒波を無保險で渡るの大冒險を敢てし乍ら、僕は保險はキラヒなど、涼しい顔をして御座るのもある。

併し國民も漸く醒めて來た。生活戰は日を逐ふて劇しくなる。世界に比類なき家族主義も兵站部が斷たれたら家ぐるみ全滅だ。モ一日本人も大正末年の日本人ではない。道理で生命保險も一躍當時の四倍になつた。世間の景氣不景氣に拘はらず、保險計りは依然として増加の一路をタドつて居る。コンな時にマダ保險キラヒなぞと言つてるのは、一種の馬鹿か仙人だらう。イヤ馬鹿と言はてれ腹を立てる前に、「如何にも國民性の缺陷といふものは恐ろしい、自分も全く油斷して居たわい」と猛省一番今日限り「保險ざらひ」を止めにして、以下説く處の各章に就て、適當の理解を得られん事を御勧めする。

第四章 死

三四

死、――縁起でもない標題だが、吾人の生活には忘れる事の出来ない大問題。只死の問題を直かにお話しすると、何だか此のイヤな事を直接自分へ結び付けて話さるゝ様な氣がして面白くないが、書物の上では第三者の位置に立ち、極めて冷静に考察することが出来る。此の點は直接に話すより却つて書物で説く方がましだと思ふ。佛教の感化を受けた吾人は、祖先以來死の宿命に就ては相當深く考へる習慣を持つて居る。

生れては、遂に死ぬてふことのみは

定めなき世に、定めありけり

生者必滅、會者定離、此の位確定したことはない。たゞ之れを日常生活に結び付けて今

死んだら後に遺る者が……といふ様に死を見詰める事は、却つて案外油断して居る。

よく人の言ふことだが『人間死ぬに定まつて居るけれど、何時死ぬか判らぬからこそコゝしてアクセクと働くのだ、假令五年十年はおろか何十年の先にしても、何年何月何日と定まつて居たら心細くて仕方があるまい』と。然り其通りだ。人間の心理は實に微妙に出来て居て、自分に都合の悪いことはソツとペールを被せて直観しない様にする傾きがある。之れも決して悪くはないが、たゞ此の傾向が平素から當然に運んで置かねばならない準備を閑却し、問題が愈々眼前に現はれたときに周章させるものだ。

之れ迄は、ヒトのことだと思つたが

オレが死ぬのか、こいつたまらん

笑ひ乍ら落付いて死ぬる偉人の眞似は出来ななくても、必ず來る筈の人間の終局に、平生ドーにか出来る筈の準備を怠るのは自分自身で死の苦痛を倍加する様なもの、死に對する準備は必ず油断してはならぬ。

三五

今の世に死が最も悲惨な問題になるのは、子供の手足の伸びない前に、父親が死ぬといふ一事、之れが御互に最も大きな苦勞の種である。忘れもしない、私が三十九歳の春同町内で私と同年の三十九になる財的にあまり恵まれない男K某が、突然内臓出血で極度の貧血に陥り、トテモ助からない病床の中で、夫として又兒女五人の父として、妻子に取巻かれ乍ら、「先生助けて下さい、今どうしても死なれませぬ。子供が小さいですから」と縋る一語を聞いた時、毎度此の種の場面に慣れた積りの私も、胸にギクリとこたへ、三日食味を覺へない程のショックを受けた。

實は町醫者の私が畑違ひの保険の書物を書くなどの考へを起したのは、此のKの死と今一つ同僚のSが十三を頭に三人の男兒を遺して死んだことが直接動機になつたのである。若し此の小著が萬一にも世間多少の遺族を無保険の悲惨から救ひ得るならば、KやSは自ら其の妻子を救ふ能はざりし代りに貴き犠牲となり、血書の遺言狀を私の此の筆に託して、世の父たり夫たる人々に一大警告を發し、未だ見ざる人の妻と子を救ひ得た

ことになる。

KやSは別として、私は職業柄最も屢々不用意の時に突然死の黒い手に襲はるゝ不幸の人々を見る。死ぬる命は人の力でどうすることも出来ないが、適當の額丈け保険に這入つて置けば死の悲惨の半分は救ひ得るとも言へる。まことに有難いことだ。

有難いといへば人間何が仕合はせになるかわからないものだ。吾々に救ひの神となる保険の基礎をなす死亡統計は、數學のプロバビリティー(邦譯は確率。又は確からしさ)といふ原理の發見が元になつて居る。私の記憶ではナンでも此の原理の發見は、佛國の片田舎の或る軀の弱い用なし息子が、病身ではあり用なしの退屈まぎれに、カルタの札を弄ぶうち、一から十迄の札の中から盲滅法に一の札を抜き出すことを繰り返せば、何度に一度一の札に當るかといふ「確からしさ」を繰り返して居ると、回数が重なるに随つて十度に一度といふ數に近づいて来る。百回千回と繰り返すほど此の數に近くなる。最後の結論は……『十枚の變つた札から或る一枚の札を盲滅法に抜き出す

「確プロバビリティーからしさ」は1/10といふことになつた。』

用なし息子の話はタツタ之れ丈けだが其次が面白い。此の解り切つた様な原理『プロバビリティー』の發見は、今日の天文学、哲學に迄も大なる貢獻をしたが、ソレよりも驚くのは此の原理から導き出した死亡統計、災害(難船、火災の如き)統計が、今日の保險の發達を促し、日本一國の生命保險でも前述の如く二百億餘の契約高に上り、年々二億圓(昭和十二年末)の保險金を支拂つて不幸な寡婦孤兒を潤し、且つ老人を慰めて居る。米國の生命保險契約高は日本の七、五倍の一千百九十三億三千九百万圓。英國が二倍弱の三百五億三千万圓(昭和十年末比較)。コンナ風に世界各國の人を救ふオツタマゲル様な大きな保險の組織そしきを生んだのが『プロバビリティー』の原理だ。

諸君モ一^度考へて見ませう。佛國の片田舎の軀の弱い用なし息子のカルタいぢりの手から、世界の人類を救ふ大原動力だいげんどうりよくが生まれたことになる。諸君は今ホンの一寸したハヅミで此の本を手にされたこと、思ふが、其のお手にある本が明日諸君の奥様や御子供

達の運命に、如何に大きく作用するか計り知られないものがある。

コウ思ふと『プロバビリティー』の發見者も、KもSも僕も諸君も皆一つ鎖くさりの一環でしかない。四海同胞の一語は文字通りに凡てが兄弟であると見度い様な氣持ちがする。

第五章 貧乏、破産

或る橋の袂で易者が行き來の人を呼び止めて

易者 「モシモシ貴下は心配事がありますね。」

通行人 「それはヨク當つた。如何にも今オレは心配なことが一つあるが君にソレが判るか？」

易者 「判らないで何とせう。貴下の心配といふは、金のことか、女のことか、若しソレでなかつたら、世間の義理合ひに就てであらう。」

通行人 「之れは不思議、易といふものは實によく當る、己の心配は其金のことだ。」

とウマウマ虜になる、といふ話。併し此の男も靜に考へれば直ぐに馬鹿々々しいのに氣

付く筈だ。誰だつて心配の一つや二つは胸に持つて居る。此の弱點で先づ釣られた。次に世の中の心配事を數へて見れば大體に此の三つしかない。三つしかないものを三つ言へば之れこそ百發百中。然も後の二つも煎じ詰めれば多くは始めの金で解決が付く場合が多い。金、金、金、十人が十人、百人が百人、此の金で苦勞する。有つて苦勞するのは十人で一人、後の九人は凡て無いからの苦勞。啄木の

働けど、働けどなほわが暮し

樂にならざり、ぢつと手を見る

がシミジミと胸にこたへる。なぜコンなに皆が皆貧乏なのか、今少し人間を貧乏から解放し、世の中を明るくする法はないものか。こゝに私は冷やかな統計を掲げて吾々が容易に貧乏圏外に脱出出来ない宿命を語るとしやう。

今の世の中で、財産は平等に分配されるものでないことは御互に百も承知だが、如何なる程度に不平等に分布されるかを表はす爲めに、米國の統計學者『ローレンツ』の考案

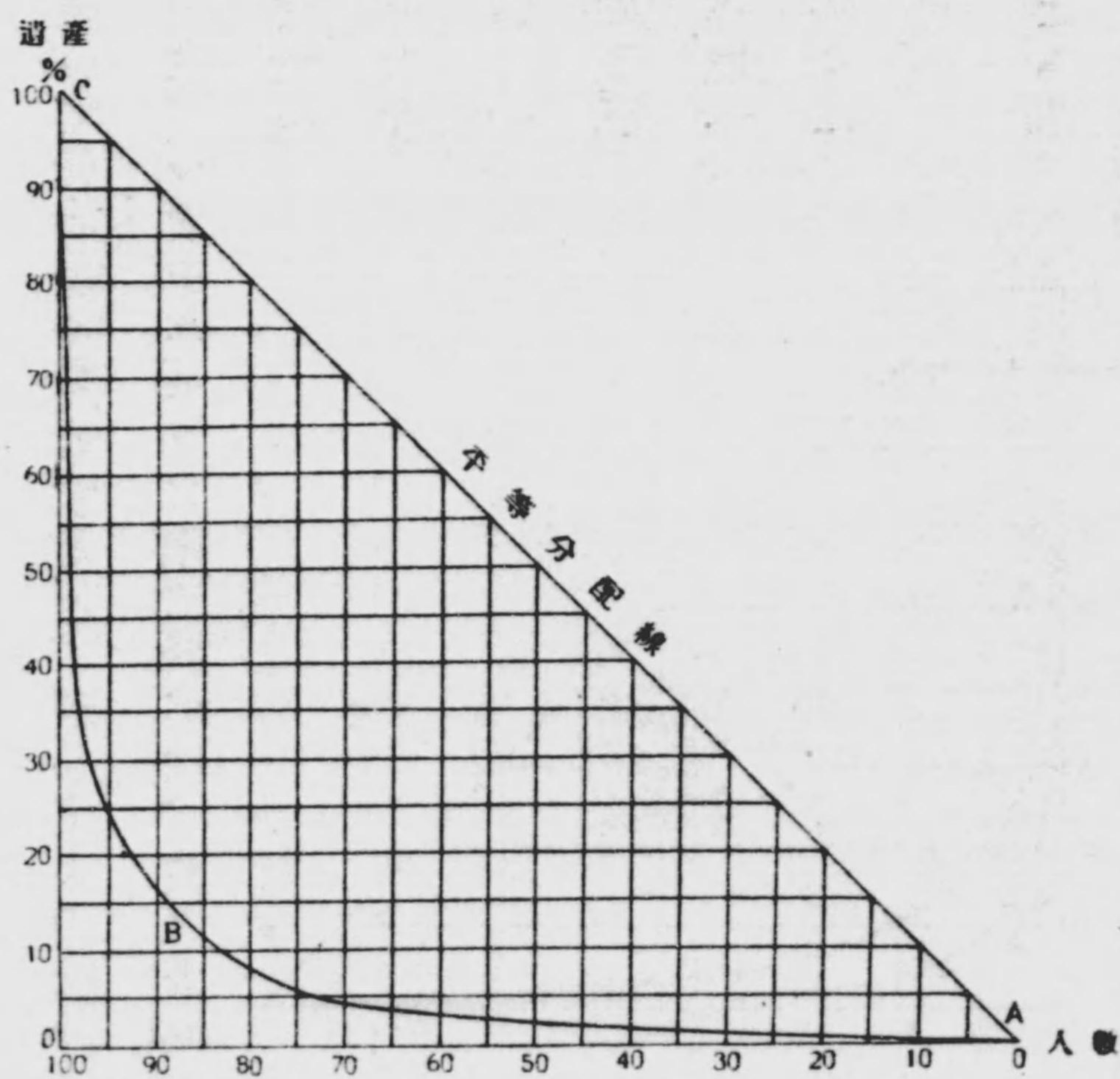
に係る曲線が屢々用ひられる。之れが有名な「ローレンツ曲線」と呼ばれるものだ。

日本の統計は知らず、遠い外國の而も今から半世紀前の統計ではあるが、財産分布の
不平等がどんな風に行はれて居るか、一目瞭然と解かる。米國「マサチューセツ」州に於
ける一、八八九一、八九一年間に死亡した三五、一四八人の遺産に就ての統計（キング氏
による）を示せば左表の如くだ。

遺 産 (單位千弗)	人 數	各階級ノ 全 遺 産 (單位千弗)
0.5 以下	23,151	9,260
0.5—1	1,466	1,378
1—5	5,715	15,432
5—10	2,005	14,637
10—25	1,612	25,791
25—50	537	18,901
50—100	334	23,480
100—200	176	24,148
200—300	59	14,632
300—400	28	9,492
400—500	18	8,270
500 以上	47	37,274

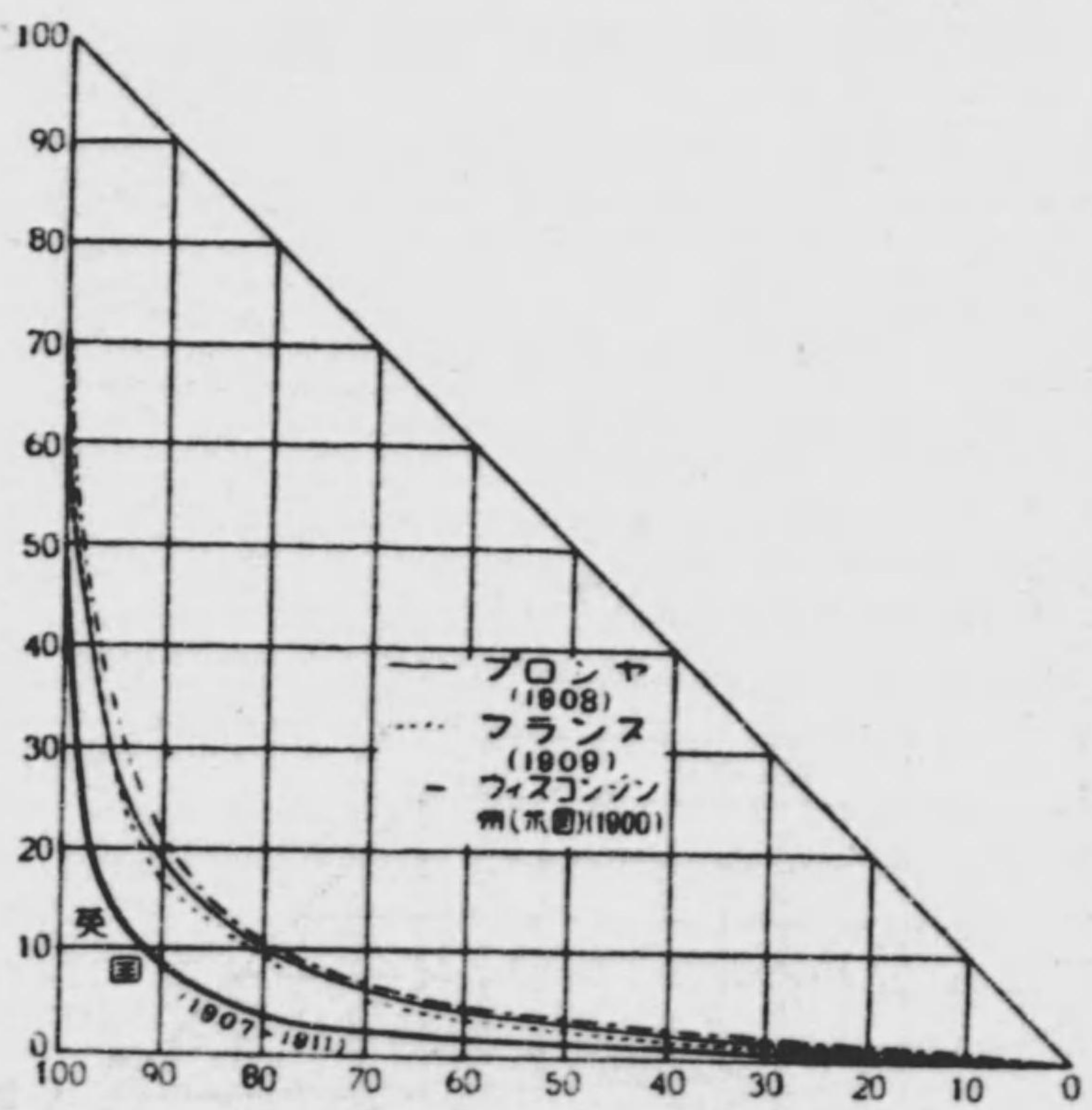
右の表の數字から百分比の表(略す)
を導き出し、之れを縦線じようせんに取つて「グ
ラフ」に書いて見ると極めて面白い下
表が出来上る。

小學校でも「グラフ」を教へるから
特に説明する迄もないが、若し富の分
配が全く平等なものであるならば、三
〇%の人は富の三〇%、七〇%の人は
富の七〇%を所有すべき筈であるから
ローレンツ曲線は直線 AC となること
は明かだ、由つて直線 AC には平等分
配線といふ名がつけてある。而してロ



ローレンツ曲線が平等分配線を遠ざかれば遠ざかる程、分配不平等の程度が高まつて行くことになる。之れ丈の説明を合點して置いて此の表を熟視すると、若し遺産の統計によつて富の分配を計り得るものとしたならば、マサチューセッツ州に於ては、貧乏な側から數へて百人中の八十人まで集つても、まだ全體の富の十分ノ一にも足らぬ百分ノ七を所有するに過ぎず、更に九〇%の人數でも僅に富の一七%を、否更に九九%の人數でも漸く富の五三%を占めるに過ぎないことが知れる。言ひ換へれば百人中の九十九人と一人とが財産を半々に持つて居たといふことになる。

以上の説明で多少諸君の興味が出たこと、思ひ、最後に今一つ歐米各國の富の分配に關する



『ローレンツ曲線』を載せて置く。(右三つの圖表は理學博士小倉金之助氏著「統計的研究法」より轉載、説明は同書の明快なる説明へ余が勝手に蛇足を加へたるもの)。

さてこんな風にグラフにして見れば大多數の貧乏が一目で見える。百人中の九十人以上は遺産らしい遺産を残さない人といふことも判る。幸ひ貴下は此の最左端の十人に屬すると云ふかも知れないけれど、萬一右の方の九十人組に居られた處で恥でもナンでもない。仲間は此方が多く、左右を顧みて甚だ賑かだ。此の九十人の中でも、ナニ昔から身代廻り持ちといふからね、其中にこちらへ福が廻つて来るサとの樂觀説を持つて居る方もあらう。之れも心の持ち方としては賛成だが、此のローレンツ線は次第々にAの直線から遠ざかつて行くのが世界の大勢と聽いては、此の望みも少々心細い。

さうすると假りに廻り持ちで貴下が十人の中に入れば前から居た十人組の一人は九十人組に落ちねばならぬ筈。弱肉強食、奮闘努力、成功萬能主義から言へば之れも致方ないかも知れぬが、九十人が恐らく皆奮闘努力するから貴下一人が特別有效に成功すると

は受取れない。矢張り冷静に考へれば前に説いた『プロバビリティ』の原理で、最初に十人組に突入し得る貴下のチャンスは $1/90$ 、そして今の十人組が全部九十人組と交代しても（そんなことはあり得ないが）まだ貴下のチャンスは $1/10$ に過ぎない、といふのが學問的である。

貴下が若し奮闘努力主義と言はるれば奥様も安心し、親兄弟も喜ばれやうが、それが成功する確率は $1/10$ — $1/90$ 、貴下が若し米株こめかぶの相場に手を出したと言はゞ奥様は泣いて諫め、親兄弟は舉こぞつて心配されやうが、相場は上るか下るか二道しかないから當るチャンスチャンスの確率は $1/2$ 、家族親戚一同の賛成する奮闘努力主義も、其成功する確率は米株の相場以下と聞いては悲觀せざるを得ない。極限きょくげんといふ考へ方かたでは稍高等になるが、中學で教へる代數や三角法の中にも出て来る。

$$1/\infty=0$$

といふ數式を御存知でしやう、8を横にした様な字は無む限大げんだいを現し、無限大むげんたい分ぶの一は零

といふ式ですが、此の無限大が假かりに千、萬の大數であるならば此の式は最も確實で、十年前から勸業債券が一枚あるが當らないネーと言ふ嘆聲は、即ち雄辯に此の數式の正確を語るもの。そんな大きな數字でなくとも處世しよせいの上うへなどでは、僅かに十か二十の數を既に無限大と見て方針を定めなければならぬことが多々ある。例へば、専門學校入學試験の合格率が十人に一人、二十人に一人といへば、餘程の秀才ならざる限り之れを避けて筋肉労働者にでもなる決心を付けたが安全。大學卒業生の就職率八人に一人と聞いたら借金して子弟を大學に入れやうとする方針は再考を要する。

話しが元もとへ戻もどつて努力奮闘で十人に一人（場合に依りては九十人に一人）の成功を期する方針などは、實の處無限大分の一は零の數式から見れば、最初から危くて方針にはなつて居ない方針。こゝらで一つ考へを更へてみたらどうか知ら。

諸君、チト消極せうきよくの様だが吾々は貧乏を宿命あきらと諦あきらめ、一つ外の方法で生活の安定を計つてはどうだらう。今から五十年前の私の小學時代は明治も若く、社會が生き生きして

る時ではあつたが、親爺おやじがいつも總理大臣になれと教へたものだ。之れは其當時日本内地の男子が假に二千萬人居たとして、一千九百九十九万九千九百九十九人の失望者を作る教育で御話しにならないが、其の次に流行つたのが、余は如何にして現在の百萬圓を贏かち得たかを誇らんとする努力奮闘成功主義。之れが段々下火したびになる頃から、自ら犠牲ぎせいになり埋草うめくさになつて、世の爲、人の爲に捧げる教が修養團一燈園等々で何れも實踐躬行じつせんきうこう的に唱道指導せられ、直ちに幾萬の信者、共鳴者が其の下に集まるといふ盛況。之れも時勢の變化に伴ふて、漸く一般が自覺し始めた一つの徵候ちようこうと見られないこともあるまい。

兎に角一六勝負の様な努力奮闘成功主義の危いことは僅かづゝでも解り始めた様だ。例へ自分丈ぶんぢの損得勘定そんとくかんじょう、所謂功利的こうりてきに考へた處で、人に勝ち人を押し退おけて前に進み百萬長者にならうとするよりは、左右隣人、相頼あひたり相助け、手を繋いで生活の安定を計り、極貧ごくひんに陥らないやうに努めるといふことが賢明な方法であること丈ぶんぢは疑ふ餘地がない。

こゝ迄頭が冷靜になると、それが單に一片の理窟りくつでなくて、數十年來殆んど無意識に實行せられ、而も今日非常な勢で増大して居る大組織だいそしきが目の前まへにあることに氣が付く。それは申す迄もなく生命保険である。日本の民營生命保険（徴兵保険を除く）も資産總額三十一億圓に達し、事業資本としても金融資本きんゆうしほんとしても嚴然げんぜんたる一大勢力である。之れが基礎きそをなす一件の契約高は千五六百圓位に過ぎないから、一件當り（一人數件の契約者も相當にあるから一件一人とは限らないが）年々僅かに五六十圓づゝ掛けた金が積り積つて斯くも巨額の金高に達したもので、而も此の金が優秀の理財家に依つて、大部分は相當によく働いて居る。

さうなると吾々が不時の死亡と老後の爲に積んだ善の小額の金は、意外に大きな人間にんげんとなつて、とても及びも付かぬと思つた大資本家列坐すわの中に坐り込み、押しも押されもせぬ大勢力となつて活動して居ることが判つた。此の『ロボット』の働はたらきが後に話す保険の配當となり、而も此の配當が段々貯金と同額に近くなり、否一時の現象げんしょうであるに

せよ昨今では、保険の配當が貯金の利子以上になつたから、保険は全然無償で付けてもらつてる様な面白い現象を呈しつゝある。共同の力といふものは恐ろしいもの有難いものだ。

最後に破産のことを一寸書き添へる。法律上の破産は其道の人に聽くと今の經濟組織に於ける極刑で、即ち其人の經濟生活に對する死刑の宣告であるさうだ。此の法律上の破産者を除外するわけでは勿論ないが、私の之れから後破産と言ふのは今少し廣い意味で、之れ迄富裕であつた人の新しく貧乏人の階級へ落ちて來る現象を指すのである。

資本の合同とか、企業きやうの統制合理化とうせいごうりかとかいふ名の下に、小企業は「トラスト」「カルテル」「コンツェルン」に吞まれ、小賣業は「デパート」や「チエーンストア」に壓迫されて、從來活動して居た富裕な人々が段々舞臺から退却を餘儀なくされるのが今の世相であるが、此の退却の前後に運の好い人、上手に立廻る人は堅實な財産を以つて浮世の安全地帯へ身を轉ずるけれど、多くの人は一段上の大ブルへ飛躍ひやくの誘惑ゆうわくやら、事情止むを得ざ

る大勢に押されて續々と貧乏人の仲間に落ちて來る。私は之れ等の人々の爲に多少轉ばぬ先の杖ともなれかしと、後に資産家と生命保險の一章を書き加へることにした。

×

×

×

こんな冗談じやうだんをいふ人もあるか知れない。己れなぞ貧乏はしても破産の問題からは解放されて居る。何となれば失ふべき何物をも持たないからと。併し之れもあながち冗談として聽き流すことが出來ない。若し親切な人が居たらこんな忠告をするだらふ。

君は今現に世の所謂紳士の服を被て、紳士の食卓に就き、君の妻を奥様、子供を坊ちゃんと呼ばれて居るではないか。

君は今君自身の最も近い唯一の財産、即ち其君の五尺の軀からだが一家の全財産であることを忘れては居ないか。萬一さうとすれば君の死が妻子の爲には、最も悲惨なる破産であ

る。

此の種の破産に對する生命保險の效果に就て一考することは君の神聖な義務の一つではあるまいか？……と。

第六章 能率の上から見た貯金と保險

廿世紀は能率のうりつの世紀と或る學者の言つた様に、何から何迄一にも能率、二にも能率、如何にも能率を無視するものは今の世の中では劣敗れっばいするより外はない。近頃は百「パーセント」といふ對話の日用語が出来たが、之れは能率の本にある能率一〇〇パーセントから出た語、此の一事でも時代の趨勢すうせいが窺うかがはれる。

サテ斯く迄能率といふことに氣を付けねばならぬとして、何れの家庭でも大問題である生活安定に向つて貯金と生命保險の兩者の内何れが最も能率的に働いて呉れるかの研究は、誰の爲にも重要な仕事に相違ない。

第一に考へなければならぬのは、貯金は呑み込んだ金が皆消へてしまふ傾向がある。

先頃の大坂新聞には、千圓を抱いて「ルンペン」が死んだとあり、嘗ては名古屋に七萬圓の銀行預金を持つた乞食爺こじまぢやがあることを耳にした。千圓、萬圓が、ルンペン乞食の口座に眠つては社會は潤うるほはないし、呑み込んだ金が皆消へるとはこゝのことだ。

それはその筈で、誰でも自分の貯金はもう之れでよしと満足してゐる人はあるまい。千圓溜たまれば直ぐに二千圓、二千圓溜れば直ぐに五千圓を目標とし始める。さて五千圓溜つたら、其の日から目標は一萬圓と變る。それなら愈々一萬圓。最初の目的からいへば十倍に達した時に、之れからはソロソロ之れを有効に使つてなぞと考へるかといふに、ドウシテドウシテ今度は一足飛びに五萬、十萬と目標が先きに行く。落語家らくごかが俚諺りせうで此の状態を面白く歌つて見せる。

富士の山程お金を積んで

それをチビチビ使ひたい

如何にも人情の弱點をよく穿つて居る。元來通貨の流通高は、日本國中で二十三億圓餘、

一人當りは二十四圓餘にしか當らないが、土地も、家屋も、鐵道も、機械も、一切合財皆金に讀んだ處で、日本の國富が一千百一億八千八百萬圓、國民一人當りの平均は一、七一〇圓(昭和五年内閣統計局)、序でに國民一人當りの年所得が百六十五圓(同上)といふ總額の中で、今の國民全體が未だ足らぬ足らぬと金溜かねため競争の奪ひあひをやつた處で、決して皆が皆目的を達するものではない。假りに今神様が吾々百家族(以下便宜百人と呼ぶことあり)に對して百萬圓を下さつたとする。之れを前の章の「ローレンツ」曲線に依つて分配するとせば、先づ最初の一人が凡そ半分の四十七萬圓を頂く。次の九人で三十六萬圓を頂く。其の次の十人で九萬圓を頂く。未だ大多數の八十人が残つて居るがモウお金は七萬圓しか残つて居ない。此時に平等びやうどうに分配してもモウ一人當り千圓に足りないが、半數の五十人目に平等分配したのでは一人當り五百圓づゝしかない。先に私は貯金は皆呑み込んで消へる様だと云つたが、貯金若くは貯蓄といふものが此の比喩たとへによく似た消へ方をするとは諸君の親戚内若くは近所合壁友人間を見渡さるゝ時に如何に

もと領かるゝだらう。

若し神様が最初に百の家族を幸福にしてやらうと思召して此の金を下さつたとしたら人間の我慾で此の人達は二重の損をしてるといふことに諸君は御氣が付かるゝか。私が二重の損といふ其の一つは、誰も氣の付く二十一人目以下の頒け前が少な過ぎて役に立たないことゝ、今一つは最初の一人から十人迄の様に澤山もらつたものも『能率遞減の法則』で金に比例する幸福を享け得ないといふことだ。

『能率遞減の法則』は種々なものに當てはまるが、大體を説明すれば、諸君が一日三度一杯づゝの飯しか給せられなるとすると、どうも腹がひもじい。永く之れが續けば瘦せるだらう。之れが若し二杯づゝに増されると急に幸福は二倍する。之れで身體の健康は充分に保たれ、食後の寂しさも殆んどない。體重も平均を保つか又は少しづゝ増量する。此の二杯が飯の發揮する能率の頂點である。次に之れが更に三杯に増される。多少滿腹の幸福を感じる様だが此の幸福は決して一杯が二杯に増された時の大きさではなく、

精々高く評價しても幸福は最初の二倍半と言ふ處かも知れぬ。更に之れが四杯、五杯となると幸福を増す代りに同一の飯が有毒物となり苦痛に變化する。

之れ丈け説明したら合點の早い諸君は直ぐに次の様に云はるゝかも知れぬ。さうすると衣食住の内で食が最も早く能率遞減の法則に支配せられ、其次が衣、其次が住、住なんかナカナカ早く遞減の法則が來ないね。矢張り廣くてキレイなのがよいから。併しお寺の様に廣くても困るがと。然り其通り其通り實によく理解出來ました。それで貴下は充分に能率遞減の法則は呑みこめた筈。併し一寸一言苦いことを言ひ添へて置かないと之から先きの説明が六かしい。

城中皆餓へたり、喰へ共咽を下らず

藪から棒にそれは何だ。之れは昔或る城が兵糧攻めに遇つた時其城から出て、敵方へ使ひに行つた軍使が、先方で大へん御馳走を出されて啖呵を切つた一句だ。子供の時に讀んだのだが今以て忘れることが出來ない。私も二十餘年の町醫者の生活で随分氣の毒

な人を度々見る。夕食の時に貧弱な食卓に向つても、ア、勿體ない『城中皆餓へたり喰へども咽を下らず』と覺えず嘆聲をもらすことが屢々ある。

貴下も吾々の同胞に此の不幸な人々が無數にあることを念頭に置き、餘り贅澤を考へずに、一定の金が發揮する最大能率の限界、即ち其れ以上は金の増す割合に幸福の増さない金高を發見してもらひ度い。

それでないと私の今假に設ける限界を見て、現に稍高い文化生活でもして御座る方はフン……それしきの金でと冷笑せられるかも知れぬ。此の限界をなるべく低く見るところをすゝめるのは私一人ではない。二宮尊徳翁の

飯と汁、木綿着物ぞ身を助く

其餘は吾を、苦しむるのみなり

なども吾黨の見方だ。それ丈け用心棒をツ、かへて置いたら、此の百家族百萬圓の話の進行上、五千圓若くは一萬圓から能率の遞減が行はるゝものとして異議はあるまい。

サテ愈々一萬圓から能率が遞減し始めるとしたら、五萬圓は一萬圓の五倍に非ずして二倍、百萬圓は五萬圓の二十倍に非ずして之れも精々二倍、一萬圓に對し漸く四倍にしかなり得ないな。更に此の邊から先きは、金が仇、金あるが爲の地獄と見らるゝ家庭も随分見受けるし、さうでない迄も金は只優越感の道具でしかあり得ない。將棋の持駒、碁の取石と何の選ぶ所ぞ。ソレに幸福の四倍五倍は他の方面でイクラでも填め合はせが付く。例へば彼が苦勞性である代りにノンキである丈けでも幸福は恐らく二倍すべく、況んや彼が病身である代りに健康であるならば、幸福は忽ち三倍四倍するであらう。彼が讀書の趣味を解すること、彼が藝術に理解を有すること、彼が家庭の平和を樂しむこと、何れも幸福を二倍にし、三倍にする筈である。こんな風に達觀すれば百萬長者、千萬長者を羨むがものもない。貧乏人の溜飲が多少下るだらう。

兎に角能率遞減の法則は好むと好まざるに論なく人間萬事に皆適用せらるゝもので、之れ丈けの概念は御持ちになつても損はない。要するに個人の我慾を離れて大局から見

下すと、生活安定、幸福増進の爲には貯金は甚だ非能率的の損なものである。

今度は方面を換へて、神様から頂いた百萬圓を保険に振り向けたらどうかと観察して見る。先づ之れ丈けの金の中八十萬圓を一時拂保険料として會社へ拂込めば、其人々の年齢にも依るけれども凡そ二萬圓の保険が各家族の主人に付くこととなる。それから後は一錢の掛金の心配もなく、遺族の救助といふ點では現金が二萬圓銀行に預けてあると同様だ。残りの二十萬圓で火災保険と、今日政府が行つて居る健康保険の今一段進んだものを百家族全員に對して行ひ得るから、今度は主人のみならず家族も家屋も一切のものが疾病、傷害、出産、死亡、火災に對し手厚い保険を付せらるゝことになる。随つて健康なもの丈けが安心して働けばよい。

其上に四五年目からは凡そ三百圓づゝ年々利益が配當されるから一寸金鵝勳章功五級の年金に近い。死なば遺産が二萬圓。生きては一切の疾病、災難を保険された上に年金三百圓、而も此の救には百人中一人の漏れもない。之れを前の貯金に比べると實に天と

地程の相違がある。諸君は此の大きな能率の差を何と見らるゝか。

同じ百萬圓の金で之れ丈けの相違の出来る原因は外ではない。貯金は『金錢に親子なし』のエゴイズムで、一錢でも多く取り込み勝ちとなり、其取つた金が丹念に死藏せらるゝに反し、保険は百戸、千戸、萬戸の金を一大家族の如く一つの金庫へ收めて置いて、必要のあるものが順々に出して使ふから、誰一人不自由をしないことになる。保険の書物には保険の効果に就いてこんなことが書いてある。

社會全體ヨリ言へバ富ヲシテ其利用ノ比較的不急ナル所ヨリ、最モ必要ノ急ナル所ニ融通スルノ效果アリ。富ハ利用セラレテ始メテ眞ノ富トナルヲ知ラバ、保險ハ又間接ニ富ノ増加ヲ來ス所ノ動力タリ。(下略)

實に旨いことをいふ。實際富は利用せられてこそ、始めて眞の富だ。千戸、萬戸の一大家族が、水の流るゝ如くに右から左へと融通しあふ。一寸亂暴の様に聞こへるが、それには近代文明の生んだ組織の力で一糸亂れぬ統制がある。公正無私な按分比例、少し

の心配も不安もない。諸君は思ひ立つた即日から此の大家族の仲間に入り、思ひ存分利益を享受することが出来る。之れこそ眞に能率百「パーセント」と言ふべきであらう。

第七章 貯金の利子と保険の配當（其二）

或る時太閤秀吉公が會呂利新左衛門に向つて、なんなりと望みのものを遣はすから言へと仰せになつた。新左衛門畏まつて

新左「私事生來の貧乏故錢が少々頂き度う御座る。」

太閤「それはイト易きこと望みの高を申せ。」

新左「下賤の身多くも入用に候はず、障子の樹の數四十として、最初の一樹に一文錢を置き、二番目の樹には二文、三番目には四文、四番目には八文と斯く倍々に増して行き、四十番目の樹に置かるゝ丈けの金が頂かるれば仕合せに御座ります。」

情けないことには秀吉公も中學へ行かなかつたから、2³⁹の大きさに見込み違ひをした。

秀吉「サテも聊かの望みかな、早速取らせるに依り計算を致せ。」

そこで新左衛門が太閤の前面に於て計算を始めた處、最初の二十榊位迄は格別のこともなかつたが、三十榊以上となれば段々恐ろしい巨額となり、四十榊目の金高が驚く勿れ五億四千九百七十五萬五千八百十三圓八十八錢八厘（現今の金で一文を一厘と見做し）となつた。サスガに目先の早い秀吉公も之れには閉口して上意取止めとなつたといふ笑話があるが、貯金の面白味は最初の元金へ利が加はつて、丁度此の話の様に倍の倍の倍……になる處にある。百圓の金へ年二割づゝ利子が付けば、複利計算で四年ソコソコに二倍になり、二十年の間には此の二倍が五回繰り返さるゝから

$$100 \times 2^5 = 3200$$

百圓の元金が大約三千二百圓即ち三十二倍に殖える。

昔は之れに近い利殖の出來た時代もあつたが今では全くの夢物語。只頻繁な貯金詐偽といふ奴が屢々此の計算で素人を瞞す様だ。ソコで實際今時貯金に志す人が豫算を立て

れば、公債、社債の利廻り範圍の三分か四分としなければならぬ。ソレならば倍になるのが三分で二十四年目、四分で十八年目といふ氣の永い話、百圓の元金が廿年目に三分の利殖で一八一圓、四分の利殖で二一九圓位の處だ。更に年々百二十圓づゝ貯金して三分に利殖した金高が四千圓に達するには二十三年かゝる。

此の金利の低下で貯金は其魔術的方面、倍の倍の倍……の夢から全く覺めて、再び野蠻人の單なる蓄積に近いものに逆戻りしたことを忘れてはならぬ。利子の力を大部分失つた貯金は、たゞ根氣と好運に依頼する外はない。ソコで第一に必要なことは、一旦貯金した限りは斷然引出さぬ心掛けである。折角五百圓出來ては二百圓引き出して三百圓へ後戻りし千圓出來たと思へば又其内から三百圓出して使はねばならぬ様では、何年経つても貯金らしい貯金は出來ない。出して使ふのはまだ貯金になつて居ない金で預金に過ぎない。世間には永年家政を切り廻し乍ら、此の貯金と預金の區別に心付かない人が随分ある。

マツタ貯金と預金の區別に就て威張つて見たが、實は此の説も受け賣りに過ぎない。僕の軍醫時代の同僚にY某なる快男兒があつた。短軀肥大柔道初段の荒武者で、見るからに快活な男であつた。不思議に理財の觀念強く、獨立自尊を傷けない限り貧乏なんか恥でもなんでもないとふのが此の人の持論で、誰の前でも自分の貧乏話と貯金話をしたものだ。此の人の貯金實歴談が面白い。今僕の受賣りした貯金と預金の區別がそれで、

Y君の曰く、貯金なんでもものはソウ澤山に出来るものでない。月收五十圓の人で五圓も出来たら結構だ。自分は四十圓の月收（今から三十年前は物價も安く俸給も安く、少尉の俸給は四十圓に過ぎなんだ。）で三圓しか出来ない。（但し彼は此の外に三圓の生命保険料を拂ひつゝあつた）。夫婦二人暮し、人前で貧乏話しを平氣でする。一厘半錢でも無駄のない此の人にしては、餘りに少なきに過ぎると誰でも不審な顔を見ると、彼は更に得意の話頭を進める。

余は余の一身一家に起り得べき凡ての場合を豫想して、平生より次の準備を爲し置く。余の小金庫ともいふべき手文庫には多くの紙袋あり。軍服は夏服二年に一着、冬服一年に一着、外套マント各三年に一着を着古すが故に之等を月割として軍服の袋に入れ、和服は年々何々を要するが故に月割として和服の袋に、納税は月額何程を要するが故に納税袋に入れる。曰く何の袋、曰く何の袋と斯の如き袋が十數個ある。用に臨んで紙袋を開く、未だ嘗て一回も貯金に手を付けたことがない。紙袋の中にある現金に對しては、初めより少々利子の損あることを覺悟して顧みない。反對に貯金は最初より絶対に拂戻しを豫想せざるが故に、一定の額に達する毎に成るべく確實好利廻りの公債社債類を買ふことにしてる。

斯かる組織の貯金は臨時費に蝕まるゝの恐れ絶対になく、却つて不意の臨時收入全部を貯金とすることが出来る。例へば旅費の剩りが四十圓手に入れ

ば、忽ち一年分の貯金を一時に増加するの楽しみがある云々。

恰もよし彼は二年間満洲駐屯軍附として豊富の給與を受けたれば其差全部を貯金となし、中尉を経て大尉に進むも依然少尉の生活程度を維持したから、最初の月額三圓は漸次十數圓二十數圓となり、大尉級に進んで未だ幾何ならざるに千圓の貯蓄を得たと報じて來た。

僕の嘗て遇つた範圍に於て、斯くも貯金の上手な男を見たことがない。貯金に志す人はY君を模範にしたらよからうと思ふ。然し多數の人は一進一退の貯金高を眺めて年月を経過し、幾年経つても貯金らしい貯金の出來ないのが常だ。不動銀行が一種の強制貯金を案出し、鰻上りに六億に近い預金を吸収し得たのも、凡ての人の此の弱點を巧みに捕へた結果と見られる。

要するに貯金といふものは、先づ意志が強く、次に運がよく順境に恵まれて、其上に

永い永い年數を経た上といふ相當六ヶ敷い條件が三つ揃はねば生活の安定を得る迄の役に立ち兼ねる。だから一口に貯金といつてもナカナカ身に付き難いもので、第一意志が強くといふことから容易に似て甚だ容易に非ず。第二の運よく順境といふことが人力では如何ともすることの出來ないもの、最後に永い永い年數を経た上とは何たる心細い事だ。來年の事を言へば鬼が笑ふといふ位。

あすありと、思ふ心のあだ櫻

夜半に嵐の吹かぬものは

で夜半に嵐の吹かぬ保證を誰がして呉れる。大丈夫と思ひし主人の身に萬一の事あらば妻子は忽ち淪落の淵に沈み、女子は得べかりし良縁を失ひ、男子は青雲の志を抱いて空しく學校を中途退學するの慘さは眼前に見る様だ。貯金の利殖も亦難い哉と言はねばならぬ。

x

x

x

次は保険の配當の話に移るが一寸問答を交へる。

B 「君の言ふ處を聞けば貯金の利子もなかなかたよりになり難いが、保険には全く利子は付かないものかね」

A 「配當附保険といふ各會社の盛んに契約してゐる種類では、利子に似たものが取れる」

B 「似たものでは満足出來ない、なぜ斷然利子が取れると言へないのか」

A 「今日三十圓掛けて、明日死んでも千圓呉れる保険から、斷然利子を搾り出せとはチト慾が深いね」

B 「イヤ解つた、慾が深過ぎた。前の貯金の話しに比べると、保険は今月百二十圓掛けて來月死んでも、文句なしに四千圓呉れる道理だから、會社は貯金の二十二年分の元利を一度に辨償して呉れるんだもの。其上利子をよこせば全く無理だらう」

A 「其通り其通りナカナカ解りも早い」

B 「オダテては困る、然し僕は今考へて見る内に配當附保険なんでものが不安で恐ろし

くなつた」

A 「至極御尤も、よい心掛けだ。生命保險會社に高率配當競争といふことが流行して、

イツも其筋の眼が光つてる。切角保險へ加入するのに配當などに釣られては駄目だ」

B 「配當競争といへばボロ會社の蝟配當たこはいとうといふ奴と同じかね」

A 「先づソレに近いものだ。會社の前途を暗くすることも蝟配と同様だが、生命保險の配當が皆蝟配といふわけでは決してない。僕の契約してゐる某會社など、創立後間もなく三分の配當をなし、約二十二年前から四分五厘の配當を續けて、而も會社は堅實に發展し、澤山な配當金を積立てゝゐる。之等は蝟配でない斗りか、模範的配當といへる。要するに業績の如何に拘はらず高率配當を競ふのが危いのだ」

B 「君の言ふ三分とか、四分五厘とかいふのは何へ付ける利子の事かね」

A 「勿論僕の掛けた保険料への事だ」

B 「ソレなら假に百圓の掛金へ三分の配當をすれば、毎年三圓づゝ、四分なら四

圓づゝ呉れるのかね」

A 「違ふ。僕が若し百圓づゝ掛金をするなら十年目には千圓となるだらう。其千圓へ三分なり、四分なりを付けるのだから金高は君のいつた十倍、二十倍になることがあ
よる」

B 「一寸待つた。頭がグラグラつとして来た。君が百圓の掛金を十年積んだのも、僕が百圓づゝの貯金を十年續けたのも、お互の懐ふところから持ち出した金は同じく千圓だらう」

A 「其通り間違ひなし」

B 「ソウすると僕の懐から出た千圓の貯金へは、郵便局でも銀行でも昨今利子を三分(假定)の三十圓しか付けないのに、君は同じ千圓を保險會社へ掛けて、十年も前から死んだら三千圓呉れるといふ保險を付けてる上に、會社から更に利子を四十圓受取ると言ふのか」

A 「略其通りと言つて置かう。只一寸違ふのは君の方は預けた日から言つて明年の其日に利子を受取るのだから、金は今千圓懐から出て居るが利子は昨年迄に預けた九百圓の三分即ち二十七圓を受取つたのだらう」

B 「全く其通り、君の方は？」

A 「僕の方は一寸面倒だ、先づ會社が保險を付けて保險金を受取りに来る人を待つて居たが、豫定より死亡者が少く、又積立てた金は豫定より利廻りがよし、其上會社の経費がグツと節約出来たので、此の三方面から剩あまつた金を返すといふ筋だ。随つてホントに剩つたのか糠喜ねかよろこびかを見定める期間が要るから、君の二年目よりズツと後れて五年目に返して呉れる返還金へんくわんきんといふ次第、即ち今年配當を受けるのは六年分の六百圓に四分を掛けた金高二十四圓を受取るのだから、矢張り君よりは三圓少い。安心したまへ、貯金の勝だ」

B 「貯金の勝だなんて冷かしては困る。何といふ情けないことだらう。君は僕より順々に三年後れて其返戻金とやらを受取るといふ丈けの相違で、三千圓の保險をたゞで

付けた譯になるではないか」

A 「正に其通り、昨今ではさうなつてゐる」

B 「僕はド、ド、どうしたらよいのか？」

A 「だから君も之れからは、保険も強制貯金きようせいちよきんの一種だらう、など早合點をしないで、眞劍に研究をし直すのだね」

B 「全くだ、全くだ。先づ保険の配當とか返戻金とかはどうして出来るかの理由から聴くとしよう」

A 「君はナカナカ合點が早い。一ぶくして次の章に保険の配當の生れる理由を説明することゝしよふ。」

第八章 貯金の利子と保険の配當 (其二)

保険の配當の話しは保険會社の成り立ちを話した後の方が解り易いが、話しの行き掛り上此の章で一吋御話しする。詳しいことは後に話すとして生命保險會社には株式會社と相互會社の二種類ある。株式會社は營利會社であるから、被保險者の満期、死亡にキチンキチンと保險金を渡した上で金が餘れば全部株主の利得になる。そこで随分思ひ切つた配當してまだ其上に積立金がウンと出來たものだ。

處が後に出來た相互會社の方は株主といふものがなく、早く言へば被保險者同志の香奠かうだん(及び養老見舞金)組合とでも言ふべき組織で、組合員の死んだ時と、老齡満期に保險金を渡してまだ金が餘つた時に其金の遣り場に困る事になる。勿論會社の基礎を鞏固にする爲めの積立はモウ充分に濟んで居るし、將來の保險金を渡すに差支を生じない爲め

の責任準備金といふ積立は政府が干渉するから之れも充分に積立てある。其上にまだ金が残るから其始末が問題になるのだ。受取り手のない金だからとて際限なく積立れば、會社の根本は肥へるだらうが、之れは要するに最初に加入した組合員を搾つて、後に加入する組合員を肥やす事になるから甚だしい不公平になる。ソコで必要以上の積立をするよりも剰餘金は分配するがよいといふことになり、サテ分配するなら標準はどうするかと考へた末、多くの會社では之れ迄組合員が掛け込んだ掛金の累計へ按分比例に配當すればよいといふことになつたのだ。之れが前の章に云つた累加配當になる。(以下問答)

B 「それなら配當は相互會社丈で株式會社は配當をしないか」

A 「其通り……。最初は相互會社丈が配當をしたものと思つてよい」

B 「それで株式會社へ保險を頼む人がよくあるね。同じ事なら僕は配當のある相互會社の方がよいと思ふネー」

A 「勿論君の説に間違ひない。或る町に同じ種類の商品を買う甲乙二つの雜貨店が並ん

で居て、甲の店は賣上一圓毎にハンカチを一枚添へる。乙の店は添へなかつたらどうなると思ふ」

B 「甲の店に計り客が行つて乙の店は倒れるかも知れないね」

A 「そこで乙の店も早速甲と同様にハンカチを一枚づゝ添へることになつたのが、株式會社の配當だ。今では株式會社も株主の配當を制限して利益金の大部分を配當することになつた。随つて店は甲乙共に繁昌してる」

(附言)

此問答には或大株式會社の要職の方から、株式會社に對する第一印象を悪くするとの意味で御注意を頂いた。マコトに御尤もと思つたけれど、説明としては矢張り之が一等よくわかるので、濟まぬ乍らも其儘とする。但し念の爲讀者諸君に申上げて置く。三十餘年前に生命保險配當の機運を作つた功は、相互會社の受くべきものだが、現在の配當は率と方法の上で、株式相互各社が白熱的に競争してる

から、優劣は次に説く第一、第二、第三の會社業績如何に依て決する。株式と相互の名に拘はり、配當率の利、不利を感違ひしてはならぬ。

B「配當の起原はよく解つたが、最初の約束のどうして配當する様な金が剩るか、聽き度いのだ」

A「それが本題だ。元來保險會社に剩餘金を生ずる源が四つある其の

第一は各會社共に死亡満期の際に保險金を遅滞なく渡す用意に責任準備金といふものを多額に積立つて居るが、此の金の利子を三分五厘乃至四分五厘で増殖するものと最初の豫算を立つてある。それが實際には六分にも七分にも廻ることがあるから、之れが第一の剩餘を生ずる財源。(利差といふ)

第二 保險料の中には營業費が少くとも二割以上見込んであるから、會社が營業費を儉約して一割か一割五分で濟ませれば、之れで第二の剩餘を生ずる譯である。(費差といふ)

第三 死亡表は普通一般のものを標準として居るが、契約は嚴密な身體検査をしてから後に加入させるから、契約當初は死亡者が豫定程に出ない。之れが第三の剩餘を生ずる財源となる。(死差といふ)

第四 保險を中途から止める人があらば、最初の二三年迄は掛金の全部又は大部分を掛け捨てることになる、會社としては非常に有難そうな財源だが、之斗りは頗る心持ちの悪い金で(後章詳説)利益とは言ひ難い處もあるけれど、取敢へず金が手元に残るに相違ない。之が第四の財源である。(解約益と名づける)

此の四つを點檢して、どの一つを見ても派手な配當競争など出来る譯のものでない事が解るだらう。又一般金利が下つて行くのに生命保險丈けが超然と四分五厘、五分の高配を持續し得るとも思へない。前に言つた様に以前は配當などはなかつたものだ。それでも保險の効果は充分に擧げて居た。そこで現在の保險の配當の高下に眼をくれず、其會社の營業狀態を研究し、此會社なら如何にも剩餘が出来るだらうと思はれる會社を選

ぶ様にしたら間違ひはない。諸君の眼がそこまで肥へて来て優良の會社へ契約したら、誰れも見通しの付かぬ現下の支那事變に依る經濟的影響は別として、三分の配當を受ける豫定には稍永續性のあるものと思つてよいかも知れぬ。

今言つた様な次第で今後の配當を餘り重く見ることは健全な考へでなく、寧ろ前の章でB君の言つた「配當が恐ろしくなつた」といふ考へ方の方が間違ひがなくてよろしい。たしか、會社の外交員が配當豫定表を見せて保険を勧誘することは、其筋から止められて居る。先づ其程度に配當に眩惑めいわくされない用心をして置いて、假に三分の配當が永續するとせばどうなるかを表にして御目に懸ける。

此の表は三十歳の人か或る會社の三十年満期養老保険三千圓を契約したと假定し、毎年の掛金は略百圓となるから簡單に百圓と定め、之れが三分の配當を繼續して受けるものとせば次表の如き結果となる。但し配當は前にも一寸話した様に契約の五年目から始まり、満期の際と後三年呉れることになる。(配當の初を一年又は二三年早くして満期後の配當をしない會社もある)。

利益配當に依る保険料相殺表

年	度	保險料	百分ノ三當	差引拂込金
一	年	〇〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
二	年	〇〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
三	年	〇〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
四	年	〇〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
五	年	〇〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
六	年	〇〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
七	年	〇〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
八	年	〇〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
九	年	〇〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
十	年	〇〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
計	十年	三三三三三三三三三三	三三三三三三三三三三	三三三三三三三三三三
三、〇〇〇	(期滿)	〇〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇
一、三九五	(後期滿) (滿時期) 配當	九八八八七七七六六六五五五五五五	〇七四一八五	〇〇〇〇二二二二二二二二二二
一、九四七				

右の表で太肉の字で書いてあるのは満期の際及び満期後の配當で、之れを合算すると三百四十二圓となる。

此の表で拂込金額は千九百四十七圓なれども右の三百四十二圓を差引けば、正味の掛金は千六百〇五圓で三千圓の保険金を受取る勘定となる。少くも濟む分は只の半年分五十圓か一年分百圓を掛けた丈で三千圓受取る人もあるが、最大限迄長壽して養老満期で受取つても、保険金の正味半分計りを掛ければよいといふことになる。

今から七年前此本の第一版で私は、右の表を土台にして、此處へ「保険と貯金の損益比較表」を載せたものだが、今はモー比較を超越したから此版には削つてしまった。其當時貯金の金利が五分止り、公社債の利廻りが六分内外であつたと思ふ。保険の配當は今と大差なし、四分五厘處であつたから、貯金の金利を五分、保険の配當を三分として比較表を作つて見た。ソレでも二十二年目迄には保険が有利といふ答が出た。

併し昨今の状態は、保険がまだ四分五厘、五分といふ配當をしてる間に、貯金の金利

はトツクにから三分ソッコ、公社債の利廻りが四分前後に落ち、之が續かば貯金と保険の比較は、永久に問題にならぬことになつたのみか、何千、何萬といふ保険が全然無償で付くといふ面白い現象になつてしまつた。

ソコで敏感な國民的經濟意識は、忽ち生命保険躍進時代を作つて、昭和六年末八十億圓の契約は昨年末に百九十億となり、保険始まつて半世紀の行程を、此處タツタ七八年に一足飛びにした。之は當然過ぎる程當然のことで、今後まだまだ我國の生命保険は躍進膨脹を續けることと思ふ。

此時に當つて諸君の内に、若し依然此大勢に目覺めず、世間見ずの朝寢をしてゐる方があるならば、……皆の奴今日のハイキングに、己れ一人を残して行きをつたなど、八時を過ぎて寢ボケ顔を家族の前に出した姿。併し朝寢の間に事故の無かつたは天祐で幸に軀さへ健康ならば、今だからと遅くはない。此低金利といふ、保険道ハイクの絶好日和を空しうして、後日お友達に笑はれない様になさることが肝要だ。

第九章 保險の效力延長

八四

これは極めて重要なことである。保險もよいが萬一死にもやらず生きもせず、のブラ病氣にでも取付かれるか、運悪く失業して高等遊民の部類に入った時に困るからね——とは相當に思慮のある人から聞く保險の非難で、まことに御尤もだ。元來が逆境不運に備ふる爲の保險であるから、今聞いた二つの様な最悪の場合を豫想せずに入するのは無謀である。前の切り賣りの例でも述べた様に、毎年時を定めて買ふ間は効力が持續するが、若し掛金の時期が來ても掛けることが出來ねば、前の掛金は無効となつて、新に契約を仕換へねばならぬこととなる。新に契約するといった處で、それは健康であるならばの事だ。病氣が原因で掛金の出來なんだ程の人は、會社が餘程安心の出來

る恢復と見なければ契約に應じない。又契約を新にすることが、掛金の増加、配當の遅延等での位損であるかは、諸君の想像以上である。兎に角保險を中絶したならば前の掛金は全損に近い大損と思はねばならぬ。

尤も或る意味から言へば火災海上保險と同じく生命保險の掛金も一定期間の危険を保險したのだから、決して掛金の全損ではない。其の期間に死ねば立派に保險金が取れたのだ。死なゝんだからこそ取れなかつたのであるといふ理窟も立つけれど、元來生命保險は老若平準の保險料を徴収する爲、若い間の保險料が比較的高く、又多くは養老保險を兼ねて居るから、其方の積金が加はつて自然保險料（其年齢の死亡の危険に相應した保險料の意・後章に説く）よりは、ずつと高くなつてゐる。随つて途中で止めることは全損に近い大損といふことになる。そこで契約した以上はどこ迄も粘り強く繼續せねばならぬものと心得られたい。

若し諸君が僕の説に同意して保險を付けらるゝ時は、先づ第一に掛金が續くか知らん

といふことを顧慮して頂き度い。「人參服んで首縊る」といふ諺のある如く、身分不相應の保険は考へものだ。

只此の邊は僕が心配する迄もなく諸君の方が概ね用心し過るのが常だ。從來の經驗上身分不相應な多額の保険は滅多に見ないが、大抵は保険を付けたと言つても身分不相應に過少で、五人乗りのボート一艘へ百人も乗つて避難せねばならぬ様な、眞にオマジナイに近い保険の付け方をして御座る方が多い。此の點で諸君を恐れさせ、用心深い人々を一層臆病にする必要を認めない。

寧ろ僕が之れから説く處を參考して、思ひ切つて保険を付ける方の側を考へて御覽になるのが眞だ。富豪諸君の契約する萬一の隠し玉としての保険は別として、どうせ保険に一家の安全を託したいといふ程の中流階級の人々は、最初から掛金など幾年でも心配はないといふ樂な境遇の人は少い。皆な主人が健康で現在の職に居りさへすればとか、商賣が今の景氣で續きさへすればとかの條件付きで掛金のヤリ繰り算段も付くのが

多い。又掛金の出所に思ひ煩ふ程の境遇こそ、眞に保険の神に救はるべき人々である。掛金が苦しいと思ふ時が最も保険の必要な時期だと思はれてよい。

之れは勿論杓子定木には行かないが、こゝに全く無財産の月給取りの方があるとすれば、今後五年間掛金に困らぬといふ保険金額を標準となされば概ね間違ひは少い様だ。

中でもこんなのは一層確實だ。今手元に五百圓の貯金があるが、之れだけでは萬一の場合遺族が立ち行かないと思ふ人が、年々百圓づゝなら貯金を引出す計りでも五年間は掛け續けられるとの自信の下に、三千圓の保険を付けて置くなんかは略途中で行詰らな

いと思ふ。千圓でも一萬圓でも此の比例に相違はない。

なぜ五年と限るかといふに、多くの會社ではこんな規定がある。勿論年齢と満期迄の年數にもよるが、凡そ三十歳で二十五年満期養老保険の人ならば、五年掛け續けたら後五年間、十年も掛け續けたら其後満期迄一生ほつて置いて、會社の方で解約の時に返す筈の掛金を流用し、自動的に契約の效力を延長して呉れる。

斯うなると餘程安心だ。失業の事は一寸不案内だが、三年も五年も失業が続くことは稀だらふ。病氣の事なら僕は醫者だから多少心得て居る筈だ。五年間以上死にもやらず生きもせずなんて病氣は、そう澤山にあるものではない。(疾病、癱疾に對する保険料免除を特約する會社あり)殊に次の表(九一頁)で御覽になれば解る様に、三十年満期でも七年掛けたら後は十年、十年掛けたら其後は一生放つて於ける譯だから、最初の計畫としては五年間猶豫のある處迄掛け續けたら、其先の融通は如何様にも付くものと考へてよい。

要するに五年以上もプラプラする様な稀有な場合を心配して、現今極めて危険な生活を無保険で通るといふ法はない。

念の爲申し上げて置く。猶豫したらどうなるかといふに、契約五年振りに大病に罹り三年間掛金を怠つて八年目に死んだと假定すれば、會社は三年分の掛金に多少の利子を付け、年掛け三十圓の人ならば百圓足らずの金を保険金の千圓から差引いて、九百圓を

遺族に渡す譯になる。此の場合千圓が缺けるのは面白くない、なんて贅澤をいふ人もあるまい。三十圓の掛金にさへ困る處へ九百圓(三千圓の契約なら二千七百圓)の金が遺族の手に渡るとすれば、これこそ眞に地獄で佛だ。

效力延長の効果は僕自身にも痛切な経験がある。今から二十年前に僕は或る娘を或る人に縁付けた。無論嫁ぐ時には健康であつたが、主人が三年振りに大病に罹つて働けなくなつた。豫て僕の主義だから、縁付けると同時に主人に二千圓の保険を付けさせたが、三年目にもう掛金が出来ないと言つて來た。大病に罹つてるのに保険を棄てる様な馬鹿は出来ないから、僕は六年目迄毎年保険金を立替へて掛けた。六年目に、もう之れからは自動的に效力が延長するから手に叶ふ時にだけ掛金するやうにと申し送つて置いたら、一旦病氣が恢復して僕の立替へた前の借りはすつかり拂つた。八年目から再び大病で掛金は怠り勝ちになつたが、もう效力に就ては全く心配はなかつた。

斯くて十二年目にトウトウ死亡した時は、幸唯の一年分丈の掛金滞納で千九百幾十

圓かを受取り、妻と十一になる娘の子は、斯かる困難の中からも二千圓に近い遺産を遺してもらふことが出来た。之れは偏に保険の有難さ殊に效力延長の賜たまものと言はねばならぬ。

ソレ程被保険者ひほけんしゃに有利な条件である故に、近年になつて優良の保険會社は殆んど凡て此規定を約款に加へた様だが、ソレでも諸君は之れから保険を契約する時に必ず此の自動的效力延長の約款やくかんのあるか否かを確かめて這入はいらねばならぬ。僕は或る時頗る優良な某會社の外交員に、君の會社の良いことは百も承知だが、效力延長の規定がないから僕は澤山に加入出来ないと言つたら、其人は證書さへ擔保になさればいくらでも立替へますから、其立替金で掛金をさつたら如何です。と無造作に返答した。

併し實際に三十圓、五十圓乃至百圓下りの少額せうがくの金を、保険證書を擔保たんぽに借るといふことは甚だ自尊心じそんしんを傷けるから、覺えず延び延びとなり失效に陥り易い。又こんな困難な場合には、保険證券は會社へ掛金の擔保として預けるよりも、もつともつと重要な擔

保に使ひ度いことがある筈だ。(保険證券擔保の事は後章再説)。呉々も最初契約の時、約款中に此の自動的效力延長じどうてききりくちんじやうに関する規定の有無を注意することを怠つてはならぬ。

今左に僕の契約して居る某會社の效力延長の表を掲げて置く。但し契約年齢は三十歳で、上段は配當金を算入せず、下段は配當金(三分と假定)を算入したものだ。

自動的效力延長表 (三十歳の契約)

種 類	配當金(三分)ヲ算入ス			
	十五年滿期	二十年滿期	廿五年滿期	三十年滿期
保險料ヲ拂込タル年數	三六	五九	五二	七五
保險料ノ拂込ヲ忘ルモ契約ノ有効ナル年數	其後四年の全期間	其後六年の全期間	其後五年の全期間	其後六年の全期間
配當金(三分)ヲ算入セズ	三三	五六	五八	七三
保險料ヲ拂込タル年數	三三	五三	五七	七三
保險料ノ拂込ヲ忘ルモ契約ノ有効ナル年數	其後四年の全期間	其後十年の全期間	其後七の全期間	其後十の全期間

近頃各會社共に殆んど凡て此の自動的效力延長を約款に加へたり。

解。約。 保險の效力に關する話の序に、解。約。、拂。込。中。止。、拂。切。の話しを付け加へて置く。

解。約。とは讀んで字の如く契約を解くのであるが、最初の一二年は掛金全損、三年位より解。約。價。格。 (解。約。する時に會社からの返還金) といふものが生じ、之れが段々と増加して前記の如く效力延長の助けともなるが、又一時に此の價格丈けの金を受取つて縁を切ることも出来る。之れでも三十歳契約三十年満期養老の千圓二十五年目には既に七百餘圓 (此外に満期迄の掛金五年分を出さずに濟むから損は三百圓でなくて百五十圓だ。思ひ違ひのない様に!) にも達して居るから、満期にならない前から一廉の力になる。勿論解約が厭ならどの會社でも解約價格九掛若くは其以上の金は保險證券擔保で低利に融通して呉れる。

拂。込。中。止。

拂。込。中。止。とは今後掛金の見込斷じて付かず、さりとして死にさうでもないといふ時に、拂。込。を打切りとし、夫れまで掛けた金に應じ拂。濟。保。險。證。券。を受取つて、契約を小さくするのだ。無論有利なものではないが、止むを得ぬ時は此の道もある。此外或會社には延。長。定。期。保。險。とて今後の掛金をせず、又保險金高を減少せず、經過年數に應じ今後何年何ヶ月何日間 (但し此日限を一日過ぎても無効) の定期保險をするのもある。

拂。ひ。切。り。

拂。ひ。切。りとは極く景氣のよい方の側で、今後何年かの間繼續して保險料を拂込む筈になつて居る契約を、都合に依り前へ繰り上げて一時に拂ひ切つてしまふのだ。不時の收益所謂アブク錢でも擱んだ時には、至極結構な法である。此の法の一つともいふべきものに、一時拂ひとして契約の初めに一回に掛金を濟ませて仕舞ふ方法もある。

第十章 保険増額の一便法

保険は最初千圓も這入つて、之で濟んだ積り卒業の積りであることは甚だ危険である。必ず地位、境遇の進み、家族の増すに随つて増額して行かねばならぬ。地位が進んで収入が増し、ソレで保険を増額するのは最も順當で且つ容易なことだが、人事百般の如くならず、中には殖へるのは子供と借金斗りですといふ様な氣の毒な境遇の方も少くない、ソレならいつて子供の殖へたに保険が前の儘では

「三人目傘一つから食み出され」



といふ悲惨な場合がないとも限らず、況んや借金が殖へたら、ソレこそ保険を増して置かねば、萬一の場合遺族に借金を遺し全くのドン底へ落す虞れがある。

前にも書いた筈だが、保険は掛金の苦しい時程必要の程度も高い。コゝに進退兩難の悲哀がある。私は或るお宅で、奥さんや主人とこんな問答したことがある。

奥「今の掛金さへ青息、吐息で續けてゐるものを、此上保険を倍にせよとは御冗談です」

僕「ソレなら前の三千圓は何年前の契約でしたかねー」

奥「モ一八年にもなりません、今の學校へ行く長男が腹にゐる時でしたから」

僕「失禮ですが餘程掛金が滞つてゐますか」

奥「イーえ、私の内では恥しながら之ばかりがタヨリです、石へ嚙りついてもと掛金はキチンキチン拂つてゐます」

僕「併し自動延長のある事は知つてゐられるでせうね？」

奥「何だかソんなことを承つてはゐますが」

僕「奥さんソコです、御主人も来て御聞きなさい。前の契約の三千圓はモ一八年も掛けてあるから自動延長で十年以上ほつて置いても失効の心配はないでせう、だから造作もなく三千圓に這入れるではありませんか、ドーせ前と同じ丈の金を出す積りなれば……但し御年が八年経過してゐるから前の百圓が百二十圓も要りますかね」
今度は真劍に主人が膝を乗り出す。

主人「實はドーにかしてとは前から思つてゐたのだが、何分にも掛金が倍になること斗り恐れてソんな處へ考へ及ばなんだ。二三十圓で倍額になるなら今日直ぐにでも」

僕「君の敏感で、之しきのことへ氣付かなんだといへば不思議だが一寸面白いだろ」

主人「面白いどころか僕には救ひの神様だ、矢張り君はよく考へるね」

僕「褒められて恐縮だが、之は僕の創作でもなんでもない。随分古くから投機師な

どの間で「千鳥」といつて各社を喰ひ荒す方法に用ひられ、ソレが段々進化して、今では保険の合理化とか、混合保険、組合はせ保険などの勝手な名を付けて盛んに実行してゐるよ。今でも普通は「千鳥」といふね」

主人「會社は嫌ふだらうね」

僕「好みはしないね。僕も話すことを躊躇するが、知らないのは君達石橋組（石橋をタ、いて渡る人々のシャレ）の所丈け位なもので、モ一盛んに實用されてゐるから致方はない。寧ろ公けに話して善導する方がよかろ」

主人「合法的に約款を利用するのだから悪いことではない筈だね、ソレで今直ぐ倍額六千圓にした僕が、五年後に死んだらドーなるのだ」

僕「無論會社は掛金を只くれるのでないから、五年分の五百圓を差引いて残り五千五百圓を渡すよ」

主人「ツマリ五百圓の損だね」

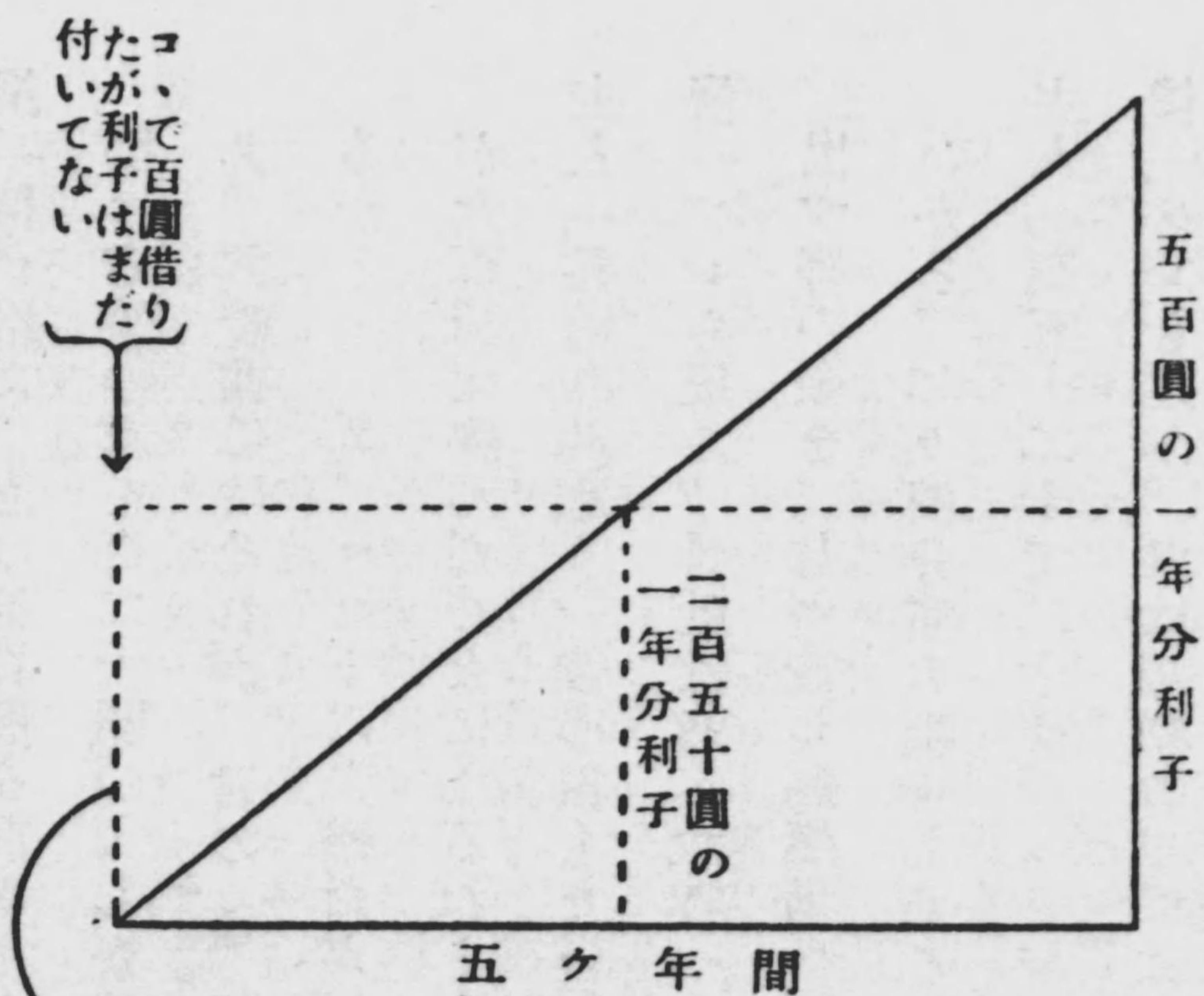
僕「何が損だ、君は五百圓を前取りしてたのだよ。君は今年から毎年二百二十圓づゝ掛ける筈の處を百二十圓づゝしか掛けないだろ。其不足の百圓は保険金の前取りだよ。其證據にはそれが、君の懐に残るか……(1)、郵便貯金銀行預金の通帳に残るか……(2)、マコトに失禮だが毎年借りて掛けたとしても借金が千百圓出來た筈が六百圓で済んだことになるね……(3)」

主人「其通り其通り一錢の損もないわい」

僕「ソレも違ふ。會社は君へ立替へた掛金へ六分か六分五厘の利子を取る。此掛金に出す筈の金を、君が若し郵便局へ預けて置いたとしたら、二分五厘しか利が付かないから、年々四分宛の損をしたことになる」

主人「四五―二十で二十圓づゝ五年だから百圓の損か？」

僕「ソレも違ふ。君は最初の年には五百圓でなく百圓しか借りては居ない。五年は少いからコンな面倒な計算をしなくてもよいが、十年も十五年も借りた時の利息の概



此の長方形が二百五十圓を五年間借り通した利子の總計となる

算を一寸御目に掛ける」

「此圖の通り最初の年が百圓で、最後の年が五百圓なら、點線を底邊とする右の三角を左へ埋めて、二百五十圓を五年借り通したと見るのが一等早い目算となる」

主人「ソ、だ二百五十圓の四分なら十圓だから五年で五十圓の損だ、イヤ此位は損とはいへないよ。君の智慧を借りた斗りに二千九百五十圓の得をしたことになる有難い有難い」

僕「全く其通り、ウツカリすれば三千圓しかない處を、僅か五十圓利子の損をした

五利千には五圓實子十圓の損
 分九分五厘の月屋をふ餘の圓
 消すれケケ月屋をふ餘の圓
 ケツマすれば月屋をふ餘の圓
 をて受保後りるば月屋をふ餘の圓
 ばと受保後りるば月屋をふ餘の圓
 損ばと受保後りるば月屋をふ餘の圓
 るとも一錢思取金九、解預で三分損

丈けで、倍額の六千圓になつたといふ計算だが、之さへ外で六分五厘の借金をしつゝ暮してゐる人々には、一錢の損もなかつたことになるね」

主人「コンなことなら僕はまだまだ早く増額したものを、クヨクヨ心配した丈け損をした」

僕「ソコだ、『今少し早く』をズツと繰り上げて、最初に三千圓の代りに五千圓か六千圓契約してよかつたかも知れないね」

主人「ソレは僕にチト荷が重過ぎたらふよ」

僕「重荷といつても只三年の辛抱だ、今の『千鳥』を應用すれば掛金は四年目からはモ、半分の百圓でよい」

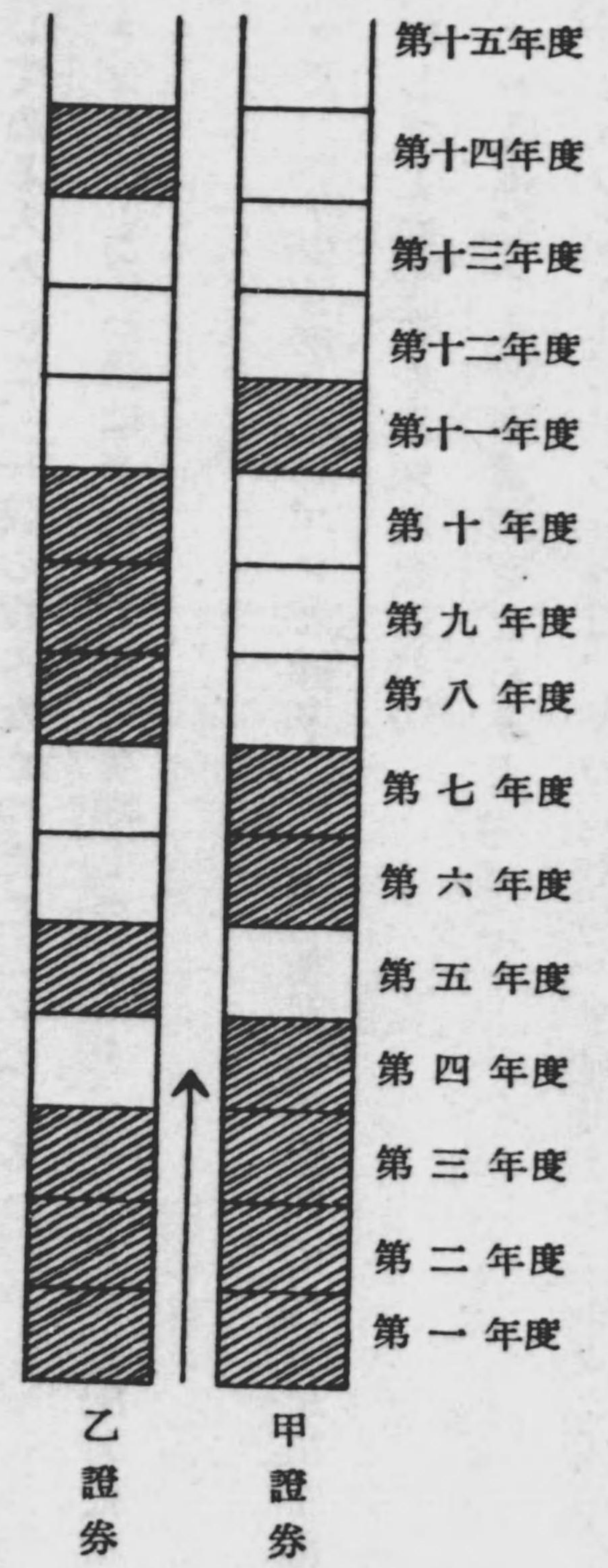
主人「ソレは又ドーして？」

僕「三年掛けたらモ、一年間の效力延長がきく、ソコで四年目からは一方丈けづゝ掛けて行けばよし、更に二三年目からは三年目か五年目交代に掛けて行けばよいこ

とになる、ソレなら君は永久に今の二百二十圓の代りに二百圓掛ければよかつたのだ。其上第二證券(只今契約する積りの保険次圖の乙に當る)の満期が八年早くなる」

主人「一寸合點が行きかねるが」

僕「圖解が一等早わかりだ」



右の圖で先づ最初會社に對し甲乙二通の證券を要求する、最初の三年丈け兩方を掛けて行き、第四年目は甲丈け(一年千鳥)第五年目は乙丈け、第六、第七年目は甲丈け(二年千鳥)といふ様に半々づゝ掛けて行けば、モ一後は殆んど何年でも隨意に一方丈けを掛けてよし、止むを得ねば甲、乙同時に休んでも失効はしなくなる。

(例へば圖の第十二、第十三年度の如く)尙ほ之は配當なしの計算で、實際は配當が付くからまだまだ樂だよ」

主人「よくわかつた、三千圓とか五千圓を二枚にすれば千五百、二千五百と端數になつてよいのか」

僕「無論差支へない、千圓以上の端數は御隨意だ。此方法で行けば、大抵の人は可能と思ふ額の二倍契約が出来る、ソレでこそ保険だ、最初の三年は家中の『貯金通帳』を總動員して更に足らねば借金しても決して行き過ぎではない」

主人「之で勇氣が出來た。前の契約は十年もホツて置けるのみか都合のよい時、後二

三回掛ければ満期迄手は要らない、ソコで僕としては寧ろ新に四五千圓を契約し、今君から聞いた式に十年間育て、行くのが本筋かも知れぬ」

僕「少しも間違ひなし、千鳥の效能は此勇氣にある、今の今三千圓の新契約を恐れた君が、四五千圓の自信を得たといふのが此方法の妙味、僕は此勇氣を付ける爲に君に千鳥を教へたのだ」

奥「わたしにもよくわかりました、ホントに有難う御座います。早速實行いたしますよ」

x

x

x

コンな風で、僕の懇意中では「止むを得ねば千鳥で行きます」と勇敢に保険を付ける人が段々殖へて行くが、大抵は「抜かずの寶刀」で皆丹念に掛けてゐる。「ドーです、千鳥は？」と問へば、掛けさへすれば六分五厘で郵便貯金の倍以上になるのですから、子

供の貯金迄「保険へ貸し」として私が出納すれば、滅多に「千鳥」のお世話にはなりませんよ。……之だ、此家庭は百%「千鳥」を善用して御座る。第一之で勇氣を付け、第二は之で六分五厘といふ、今時に稀な好利廻りを簡單に見付ける。

此外に近頃私の行く先々では、四年、五年を経過し、今直ぐに「四年千鳥」、「五年千鳥」の出来る契約を持つてる石橋組がザラにある。コンなのは新契約の決心をするのがマコトに造作もない。而も大部分は新しく契約してから、「千鳥」は「積り丈け」「勇氣を付けた丈け」で實行はしない。

掛けて見れば立派に掛かる。私は思はぬ處で貯金(保険掛金も貯金に同じ)報國の御手傳ひをしたことを喜んでゐる。

第十一章 保険と安心

一〇六

或る婦人雑誌にこんな投書があつた。標題は「言ひ出しにくいこと」として、

生命保険といふことは、何んとなく妾たちの様な若い者のいふことではないやうな気がしてなりませんでした。そのくせ財産のない夫の腕一本に頼つて生活して居る身分では、時々其事を思ひ出さずには居られませんのに。

夫の勤めて居る會社は、去年の上半期は殊に利益が多かつたといふので、ボーナスはいつもの倍でした。私達は結婚して二年目の今日迄ボーナスは屹度いつでも其大部分を定期預金にして來たのでございましたが、今年は多い丈けを

又別の有益な貯金の工夫はないかしらとて、夫の相談するのをよい機會に、思ひ切つて生命保険のことをいひだしました。

氣にでも障るかと案じて居たとは反對に、夫も實は早くから時々考へて居たのだと云つてすぐに賛成して呉れましたので、早速二人とも加入することになりました。

それ以來私達は、若し死んだらなどいふ不吉なことを相互の心の中で考へ合つて人知れず不安に襲はれる様なことがなくなりました。

保険といふことを言ひ出すのはなど、妙に互に氣兼ねて、それ以上のいろいろな想像を逞うしてゐるよりは、この様に言ひ出して見ると、心の不安が取り去られるものだといふ、よい教訓を得たことを喜び合つてゐます。保険のこと計りでなく、何でもさうだらうと思ひますから。

一〇七

以上が投書の全文である。よい處へ御氣が付いたものだ。併し僕をして言はしむれば随分遅い氣の付き方だ。無財産の方が定期預金にする餘裕のある金を、第一着に保険に廻さぬといふ法はない。

又生命保険を何だか貞操に係る秘密でも打ち明ける程の思ひ入れで、夫に相談するなんて、随分舊式ですネと言ひたい。可なり物の解る方が之れだもの、如何に一般の保険思想が幼稚であるか、推察出来る。

中には随分ヒドイのがある。主人が折角行く先きを案じて保険に入らうとすると、自分等の爲と思ふことか、細君氣色を變へて、保険なんて縁起でもない御止しなさいよ。貴郎が死んだら妾一緒に死ぬわ……と反對する。——一寸問ふて見るが子供をドーします？、マサカ此奴も殺してとは言へまい。馬鹿も休み休みいふがよい。

餘談はさておき、此の投書の主も意外の安心を得たのを喜んで御座ることが、言外に溢れて居る。年收四五千圓もある人が、千か二千の保険に加入したからとて、それはオ

モチヤも同様だから、別に安心などいふこともあるまいけれど、凡て身分相應の保険に入つた後の心地はかうしたものだ。

永い間の寢物語りにした、五年も十年も十五年も先きでなくては得られないものと思はれた、憧憬の財産が忽然手に入つた様な次第となり、まづまづ安心といふ會心の笑みが、今日只今得られたとしたら、之れが嬉しくなくてなんとしやう。

安心なんて無形のもので、眼に見へる利益ではないと思つて居たら大の間違ひ、主人近頃の神経衰弱、イヤ病氣といふ程でもないが、馬鹿にイライラして癩癩が強く、時々不眠に襲はれる。之れこそは實に文明の中毒、働きのある男で多少之れに冒されない者は少い位、之れが又どれ丈け其人の能率を減殺するかを考へて見るがよい。

保険は之れに對し實に有力なる救濟の一法である。こゝに二間幅の橋があると假定して、若し此の橋に欄干がなかつたら兩側の三尺づゝは危険で歩む人がない。随つて中央の一間しか橋の用をなさないわけだ。土橋の兩側に草の生へるのが此の理である……。

若し此の橋へ丈夫な欄干を取り付けたと假定せよ、始めて二間の橋が二間の用をする。

諸君、只さへ幅の狭い吾々の生活、此上兩側を残してどうなるものか、どうか今與へられた幅丈けでも、恐れなしに歩いて見度いものだ。東京に十五年居るがまだ日光を見ない主人、學校の遠足から歸つた十三の長女から、目と鼻の先なる江の島の景色を傳へ聞きする細君、鐵や石でない血と肉で出來た人間の軀が、此の永の年月、こんな苦闘と幽居に神経衰弱「ヒステリー」にならないのが不思議だ。此のセチ辛い經濟に物見遊山でもありますまいよと、テンから休むことなど考へ及ばないで、五圓拾圓と血の出る思ひで溜めた用意金が、かうした過勞から來る病氣の藥價、入院料として出て行くとは、何んたる悲惨なことだらう。

どうです、主人も奥様も、萬一の危険は保險の欄干に任せて置いて、此の夏は只の二三日でもよいお役所か會社の休みを利用し、時局柄一家を擧げて伊勢參宮でもして來ては、初めて人世の味がわかつた氣持ちがするでしやうよ。

能率の學問の教ゆる處では、此の休養することが又働く以上に貴下の働きの總計を増大する筈である。之れも保險の一徳に數へてよからう。こんな定義を下し得るかも知れぬ。——生命保險とは貧乏を救ひ、兼ねて貧乏の不安を救ふものなり。

保險の安心で一番有難いのは病氣の時だ。生命保險が疾病保險の用をなすことは本書で屢々述べる處だが、今私の此の章でいふのはそれではなく、萬一の心配が自分を苦めないことを指すのだ。

平生強いことをいふ人でも、病氣の時は案外氣が弱くなり、神経も人一倍鋭くなる、此の時爲すこともなく來し方行く末を考へて、扱て自分の死後妻子の頼るべき恒産なく忽ち親戚の甲乙に厄介にならねばならぬとか、夫れさへ出來ない人は忽ち路頭に迷ふと想像したら、眞に腸寸斷の思ひがある。瀕死の病苦に此の重荷を加へて壓迫さるゝ働き盛りの男子の苦しみは、私も前に二三の例を擧げたが、誰れでもこんな場合の二つや三つ知らない方はない筈だ。

醫者が病氣の時に例外なく要求するのは身心しんしんの安靜あんせいだ。身の安靜は動かぬこと、寝ることで盡つきるが、心の安靜とはクヨクイラクせぬことである。さうすると保険は如何なる病氣にも養生ようじやうの助けとなることが御解りでせう。嘗て雑誌「實業の日本」に次の如き某財界名士の實驗談があつた。

私は學校を出て間もなく生命保険を他ひとから勸すすめられた。當時私は獨身で他に係けい累らいもない。それで保険の必要はないと思つて一旦は斷つた。けれど再さい三さん勸すすめられて、遂に千圓計りの保険を付けることにした。すると其後間もなく私は、腸チブスを患わづらつて入院した。病勢は大分險惡けんあくになつて一時は一命も危くなつた。

勿論其當時私は學校を出た計りであるから貯金がない。萬一死亡するが如きことあつては、葬儀そうぎの費用にも事缺かくが、夫れより先づ目前の入院費用に困る。

それで友人は非常に心配して、何處からか金を借りて來ようかと、内々私の意中を探つて居た。しかし私は無抵當むていとうで金を借りるなどいふことは絶対に好まない。然らばどうするか。其際私の心頼こころたのみにしたのは保険證書である。

私には保険證書がある、萬一死亡すれば證書面の金額が取れる。快くなれば活動して多少の借財は返すことが出來ると私は恂おそう思つてもう少し病氣が長くなれば保険證書を抵當にして、私を信用して呉れる人から金を借りる積りであつた。

即ち私は其際保険を付けて居つたが爲に、嘗たに死後の心配がなかつた計りばかでなく、無抵當で金を借りないといふ、私の年來の主義をも枉かげず、病中少からぬ慰安ゐあんを得た。

之れが名士の追懷談ついかいだんである。保険が如何に病中の慰安ゐあんであり、又生命保険が如何に適

切に疾病保険の作用をなすか、御判りになるだらう。

或る年の暮、僕の郷里の餘り裕福といふ程でもない百姓の一人息子が、勧められて溢千圓の保険を契約するのを見た。保険好きの僕も當時は餘り結構の事とも思はなかつたが、其後半年ならずして此の息子が重症の肺炎に罹つた。僕は主治醫として頗る豫後を悲觀し、御氣の毒だが千圓になるかも知れぬと、寂しい冗談も言つて居たが、一週間程経て無事に解熱した。其時親爺が崩るゝ計りの笑顔で、御蔭様で千圓取り損ねましたと僕を拜んだことがある。小百姓の分際で、千圓取り損ねて心から欣喜雀躍するんか、保険でなくては見られぬ喜劇だ。

時は四月の十五日、僕が今之れを書いて居る窓の外は櫻の眞盛り、上野、飛鳥山、向島と満都の人は花を追ふに餘念もない。そこで安心の一例として今一つ人生を曇天の花見に例へて見る。

月に叢雲花に嵐、兎角不安な花曇り、面白いと思へば直ぐに不安の付き纏ふが今の世の中の状態である。自用车を驅り、花下の散歩に運轉手や三太夫の隨行する、極めて小數の人々は別として、吾々大多數の徒歩黨に、持て餘しものは花見に雨傘外套だ。自分の丈けは未だしも、細君子供の分迄背負はされては、何んのおのれが櫻かなで、重荷の爲に花の氣分にもなれない。

こんな時に吾々に同行する自動車か幾臺かあつて、僅か十錢足らずで此の荷厄介な雨具一切を預つて呉れるとしたらどうだ。急に身體が軽くなり、而も雨降らば降れ、風吹かば吹けの雨具はチャンと用意してあり、氣分も始めてのんびりする。愉快に花見も濟んだ歸り途は、足休めに少々づゝは乗せてもらへる。(養老保険)

夫れが又よくしたもので、人の世の不幸の雨は決して一時に降らぬ。同年同月同日に保険を契約した人々でも、死ぬる時は五年十年乃至二三十年以上の差がある。空に知られぬ袖時雨と此處は泣いても隣は笑ふ。人様々の運命は

坂は照る照る鈴鹿は曇る

間の土山雨が降る

で不幸の雨に遇ふ人丈けに、イザ雨傘よ外套よと渡すとしても、自動車一臺で随分多人數の御用が勤まる筈だ。

此の自動車を保険といふ。自分の物は自分で持たねば承知が出来ぬと、強ひて雨傘外套を背負ひ行く主義を貯金といふ。

第十二章 共同の奇蹟、組織の力

僕が此處まで説いて來るとこんな質問が出る。大分保険の事が解りかけた様だが、チト話しが旨ま過ぎる。之れ迄旨まい話しには幾度も乗せられて懲り懲りだ。現に自分の友人は、東京の雑誌かなんか讀んで、相場さへ行れば巨萬の富は立所に得られると妄信し、可なりの身代をキレイに叩き潰した。旨まい話しには餘程警戒を要するからね。

元來常識で考へても判ることだが、種も仕掛けもないもので、無より有を生ずる法は天下にない。三十圓や四十圓で千圓の預り證をよこすの、吾々には五年も十年もかゝるべき難攻不落の二〇三高地を一夜に占領するのつて、之れには何か忍ぶべからざる不利

益が隠れては居ないか、こゝの處を更に詳細に説明して欲しい。

然り此の疑念は御尤もだ。君の所謂無より有を生じないといふ常識判断

雨霰雪や氷とへだつれど

落つれば同じ谷川の水

保険もどうせ強制貯金の一種だらうの推定で、保険の恩澤に與からない人が多いから、特に此の一章を設けて説明することにした。

由來生命保険は十九世紀が完成した人類の誇りと言つてもよい程の大發明、コンな簡單な譬喩で片付けるのは勿体ないが、之も保険成立の原理を物語る一局面には相違ないから、馬鹿になつて聽いて頂く。

昔から世渡りといふから、世を渡る意味に於て、又しても橋の例を持ち出さう。此處に恐ろしい斷崖があつて對岸との幅は僅かに二間許りだが、下には青い淵がある。之れを渡る爲に君は一尺幅の橋材一本を持つて居ると假定する。

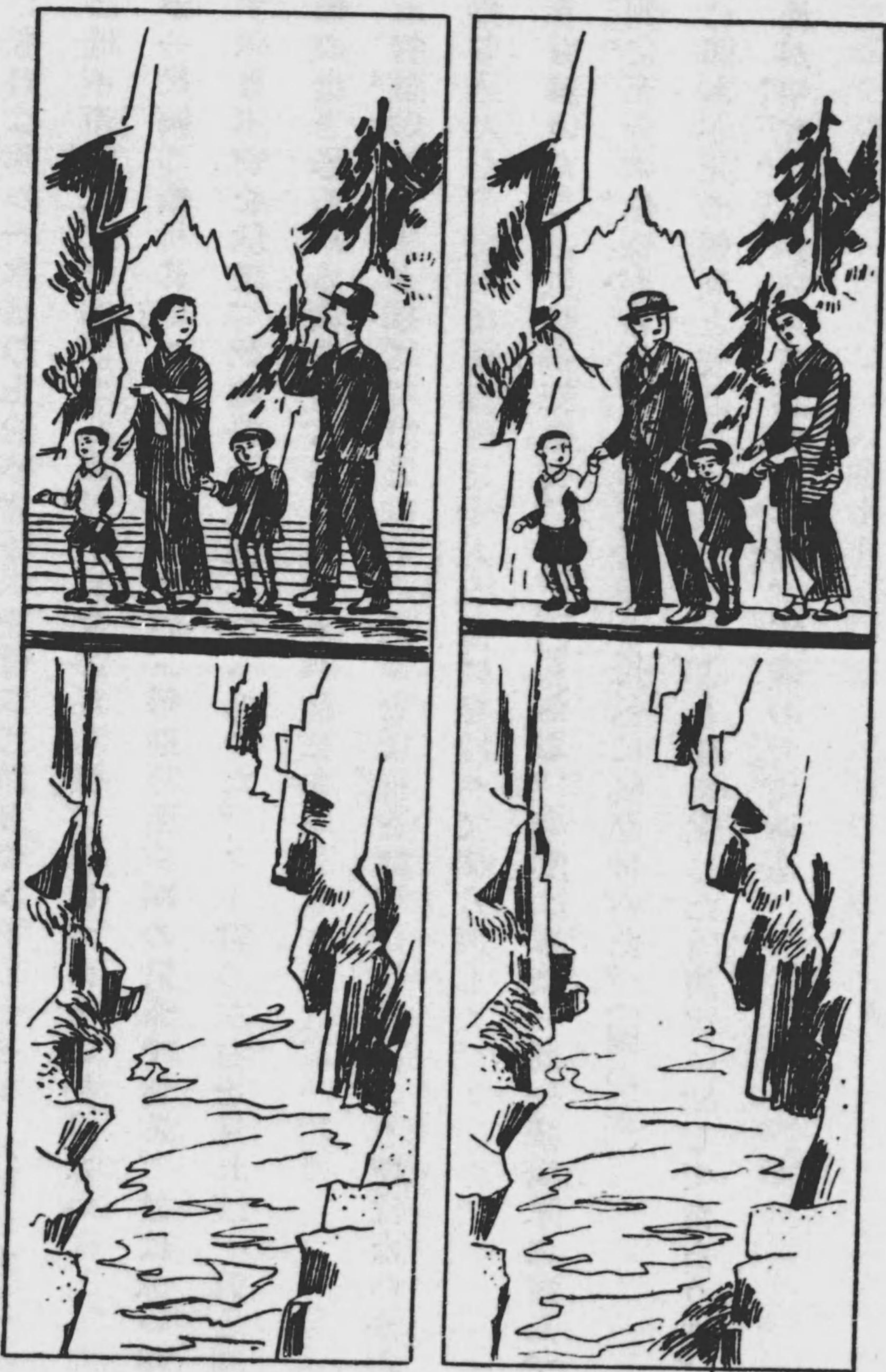
今しも君は此の一本橋の上を細君子供を伴つて渡りつゝあるとせよ。(圖の右)一步を誤れば橋下の淵に沈まねばならぬ。實に身の毛も慄つ思ひがあるに相違ない。

僕が一尺幅の橋材に例へたのは君の地位、學問乃至少額の財産である。君は永い年月戦慄すべき不安を以て、此の橋を往復しつゝあつた。フト君の左右を見れば、君と同様一尺幅の橋を恐る恐る渡りつゝある連中が無數にある。

或る智慧のある男が來て、君と左右の人々と橋材を並べて掛け渡さうではないかと相談を持ち込んだ。之れは面白いと十人の橋材を並べて掛け渡した。

どうも驚いたことに幅が三米突(一間半)もある。今度は家族一同一列横隊に並んで、尙兩側に充分の餘裕がある。始めて兩岸の景色に氣が付いた。(圖の左)

君に問ふが此の便利と安心とは果して無より有を生じた所謂旨い話しであらうか。否否之れが相互扶助から來る共同の奇蹟、組織の力である。



今一つの例を持ち出さう。甲の里と乙の村との中間にある丙山は、昔から上りが半里、下りが半里の難所で、以前は自動車一圓と定まつて居たが、此の不便な交通も電車のトンネルが出来てからは、廿分ノ一の五錢でどちらからでも行ける様になり、其上二十分の時間が浮いて来た。オマケに此の電車からは年々多大の利益が擧がるといふ話し。之れも立派に共同の奇蹟、組織の力だ。

こんな奇蹟は君の目前にいくらでもある。曰く図書館、曰く公園、曰く電話、曰くラヂオ、曰く何……分けても諸君の前にある新聞紙を御覽。紙價の高い今日、三錢、五錢で之れ丈の白紙を賣つてもそんなに儲けはあるまいものを、大新聞には幾百の記者、事務員が居る。中には國務大臣に等しい俸給取りも居り、日々幾百千圓の電報料を拂ひ、日本の津々浦々は元より、世界の各地から報道を集め、夜に日を繼いでの大車輪で、諸君の前に供せらるゝ新聞紙が只の三錢五錢とは、之れこそ無より有を生じた程の安値、勿論新聞社には莫大の廣告料が這入るが、之れも多くの人が讀むといふ事實の副

産物、換言せば新聞は副産物に依つて經營せられ、諸君は多數が讀むの故を以て、ロハに近い僅少の金で此の社會的耳目に親しむことが出来るわけ、之れも共同の奇蹟、組織の力と言へば言へやう。

惟ふに從來餘りに大なる努力を要する貯金に失望した人々が、初めて保険に對つた時、どうも話しが旨過ぎるとして疑懼するの無理からぬこと、之れも後章保険の組織を説明するに當り、更に疑團の氷解を見るだらう。

第十三章 生命價値の資本化（其二）

生命價値といふ語は日本人の國民性としてはイヤな感じがするが、亞米利加あたりでは盛に用ひられ、君の生命價値十萬弗オーライ五萬弗保險といった様な保險のヌ、め方這入方が相當に行はれる。日本人はウツカリ君の生命價値なんて言はゞ、大切な人間様の軀を金で評價するなぞ失敬な……と一喝するかも知れぬ。

併し日本でも今から七十年前の祖先は十萬石の殿様とか、五千石の御家老様とか、社會最高の地位に在る人を正札附きで呼んだ時代もあり、現今でも娘を貰ふには結納金を持參し、又何の不思議もなく生きた軀が月給になつてゐるではないか。ソレだから矢張り感情は感情、便利は便利として、今後善き意味での「生命價値評價」は段々用ひられ

ることになると思ふ。

「生命價值」とは何か？、之は今から六十五歳の老年期迄數十年間に、貴下の軀から生れる善のお金の總額を、利子を差引いた今日只今の金高に換算累計したものとでも言つたらよいか知ら。兎に角に此利子を差引いた總額の全部か一部に等しい保険を契約することが「生命價值の資本化」といふことになる……。左官職の熊さんが時々冗談を言ふ。——オイそこの二萬兩の道具箱から「仕上げ鍍」を一本出してくんね、と。

浪六の小説に出る様な此七軒長屋の熊さんが、二萬兩の道具箱とはそもそも何の意味か？。熊さんの曰く——己が二十二で今の嬢と所帯を持つて丁度三十九年。此間に此道具箱からの稼ぎ高は二萬兩をピンとハネるぞ——如何にも三十九年、一萬四千日では此計算に間違ひはない。同じ長屋に住む本年六十で、子澤山と宵越しの金を持たない點で熊さんと似寄りの下働き傳公が、側から感嘆の聲を放つ。まことさういへば親方、テメーなどでも若い時から今日迄に此瘦せ腕から一萬兩稼いだることになりやすウワツハハハ……

……。思へば人間六十迄生きるには、假令手から口へとは言ひ乍ら、手傳ひの傳公でも一萬圓の大金を、銀貨や銅貨で受取つてゐる。

只傳さんの一萬圓には切り詰める餘地がないとしても、傳公と同じ口數を養つて來た熊親方の二萬圓には、何とか剩す餘地はなかつたものか。若し講釋師の辯じる「見へたか多助」の様に、鹽を嘗めて貯蓄したら元金一萬圓（莫大の利子は此外）が貯るのではなかつたか……との疑問が起る。ソレにはチャンと生きた解答がある。

熊さんと同職の八五郎さんは、四十で天死したが、鹽を嘗めなくても死ぬ迄に千圓の金を貯め、其金で「おかみ」が飲食店を出し、ソレが小當りしたから長男を學校に通はせ、其子が今百圓の月給取り様だ。之が立派な解答になる筈。只慾を言へば死ぬ前の年に、八さんの小金を貯めてることを知つた大屋さんが、アレ程ス、めてくれた千圓の保険に這入らなかつたことだ。此話を肝に銘じた二世八さんは、十年前の就職後間もなく一千圓の生命保険を付けて、其當時彼自身はもとより、家族にも大なる安心を與へた

但し今は安心でないことにまだ気が付かぬらしい。

私は今六十年饑餓線の外に一步も踏み出し得なかつた氣の毒な傳さんを別として、熊さん、八さん、二世八さん、此の三人の生命價値の扱ひ方を諸君に宿題として再考されんことを願つて置く。

私の見る處で此三人三様の缺點を擧ぐれば、熊さんは二萬兩の道具箱の隅に、六十の彼を極度に幸福にする千、二千の保険金がイクラでも這入り得たことを知らない。八さんは無理解が元で、這入れる保険に這入らない、二世八さんは折角入り乍ら現在では彼の萬一を救ふべく餘りに少くない。此三つのないが、三人三様に生命價値をお粗末に扱はせたことになる。

フン生命價値とはソんなつまらないことかとハンヂョウを入れて一笑に付せられるかも知れないが、假説を差しをき真正銘の實談を申上げる。今から三年前の或る夏の話、私は頼まれて隣村へ生命保険の診査に行つた。私が家へ這入ると主人大そうの不機

嫌、ドーもイヤといふのに無理強いにス、められて、印を押しはしたものゝ考へて見て下さい。此家だつて兄に借金して昨年冬に建てた斗りの始末、子供は多いし、入用は嵩む、逆さに振つても千圓の保険掛金が出る筋はない筈ですが……と私にガミガミ言ふ主人が大工で細君が小作の農業働き、借りて建てたといふ其家も、五百圓はかゝるまゝと思はるゝお粗末なもの。如何にも年三十圓の掛金は苦しかる。

ソコで私は言つた、アナタの御話しにウソがなければ、人間生き身でイツ萬一がないとも限らぬが、其の時「かみさん」や子達は木で作つた家を喰つては生きられまい。同じ借るなら家を建てる金を借るよりも、保険の掛金を借る方が先きではなかつたですか。君の腕一つが財産といふなら其財産へ、二千圓の保険を付けたらドーです。家は喰へないが二千圓の保険金は、長男の兵隊迄喰ひ延ばせるからね。と話し始めたら、此人頗る理解の早い方で、直ぐに私の話す「生命價値の資本化」といふ「彼の腕を確定資産化する」ことの道理がのみこめ、二千圓即決の契約が出来た。

血の出る様な掛金を、途中で行き詰つて捨てさせては一大事と思つた私は、歸る時入念に助言した——失禮だが掛金に困つたら兄さんに頼みなさい。兄さんも君の萬一の場合、此れ以上君一家に補助の要らぬ用心と、家へ貸した貸金迄生かす一石二鳥の掛金取替を、恐らくイヤとは言ふまいから——と知慧を付けて置いたが、其後此人が三年目の掛金を滞りなく済ませたと聞き、私はス、めた責任上安心の胸を撫でおろした。

貯める金とて別にはないが

貯めて貯らぬためしなし

の諺ことわざの如く、年々の三十圓にさへ泣き言を並べた彼は、立派に六十圓づゝの掛金を搾り出し、モ一掛金の安全地帯とも言ふべき第四年目（第四年以後は掛金を休んでも保険の效力を失はぬ故斯く言ふ）に足を踏み入れて、完全に生命價値の資本化をなし遂げたことになる。

只氣遣きづかふのは私のコ、迄の話では、生命價値の資本化とは、都會地の熊さん、八さん

や、小作農片手間の大工さんの身の上のみある様に聞えるが、實は全く違ふ。私は最下級から話す積りだ。此階級の人さへも尙閑却出來ない生命價値のあるものを、此人々よりズツと高い生活と自信するインテリ階級、資産階級の人達に、「之だ、自分達の問題だ！」と眞剣に考へ直して見て頂き度い爲の序説じよせつに過ぎない。前の例で言ふなら、第二世八さんから上の階級にこそ、生命價値の確定資産化が層一層必要になる。ソレならナゼ其方の例を出さないかの御叱りを受けるかも知れないが、ソレが一寸困難だ。ドウ考へても一口には言へない。

例へば第二世八太郎君にした處で、彼は或る大きな鐵工所に技手として勤めて居り、今後十四五年の後には恩給を受領することになる。此點で彼は官公吏、教員など、共通の未來を有する。彼は又天性の利巧者で、持場の仕事に時々有益な獨創の才をあらはす。此創造力は彼の上役も認めて居り、此爲破格の増俸も受けてゐる。永年の後には立派な特許權でも拾ふかも知らぬ。此點は創意からイツ福運を堀り出すかも知れぬ文士、畫家

多くの自由業者などと相似た共通點がある。

彼の家の商賣は最初の飲食店が今は大衆向きの食堂に迄發展し、彼は始めの相談相手から次第に事實上の經營者となり、彼の萬一に母と細君の受ける損害は、一般の農家、商店若くは企業家諸君と似通つた境遇とも言へる。

ソコで熊さん、八さんの場合は、單に毎日稼いで歸る手間賃を幾分づつでも積み立て得るとしての生命價值であつたものが、二代目八太郎君になればモーリス様に複雑になる。況や一廉の實業家とか、相續税を心配する中以上の資産家などには、一層困難の度を増すから、何れは専門の技術者が出來て、之に生命價值の評價を頼む時代が來るだらふとさへ言はれてゐる。併し今の處では自分の評價は自分でなさるより外はないのだから其方法の荒筋を申上げることとする。先づ

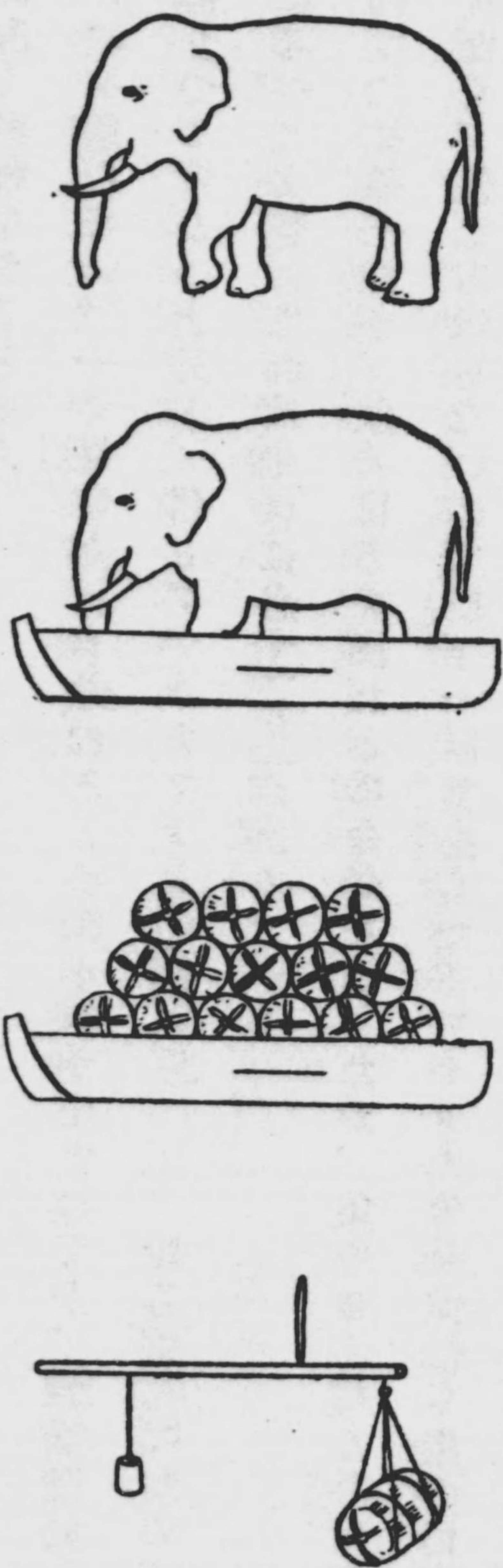
- 一、家族に對する價值
- 二、事業に對する價值

の二つを念頭に置きながら、皆さんが自分の身に持つ(一)訓練、(二)技倆、(三)勤勉、(四)判斷力、(五)創造力、(六)想像の實現力の六つを反省し、自分で自分を評價せられるのだ。詳しく言へば此(一)から(六)迄の全部か一部を持つ個人の死が、何程の損害金額を家族、若くは事業に與へるかを積算して見るのだ。尙事業に對する生命價值のことは後に説く機會もあると思ふ。

サツバリ解らない。一寸見當が付き兼ねるとの御小言が出た様だが、至極御尤も、簡單に解りつこはないと思ふ。併しアナタとアナタの御家族には、頗る重大問題の筈だ。忠實に考へて御覽になれば最後に必ず「答」が出る。

昔印度の或る王様が、象の目方を測れとの命令を出したが、象を量る様な秤は國內に一つもなく、他に方法もないので臣下一同當惑した。アナタの生命價值も象の目方と同じ難題かも知れぬ。併し象の目方は俊敏な王子が次の名案を出して立派に計測出來たといふ話。ソレは先づ象を船に積み、象の爲に沈んだ船腹に目標を付けよ、象を俵と積み

かへて目標迄船腹を沈めよ、個々の俵の目方を量つて累計せよ。



アナタの事情はアナタ自身が最もよく知つて居らるゝから、アナタの生命價値をバラバラにホゴして、象と積みかへた俵の如く再び總計をさるのだ。併し一寸思ひ切つた想像も必要の筈である。

昔から「獲らぬ狸の皮算用」といふ笑ひ話があるが、生命價値の評價は全部が獲らぬ

狸の皮の評價になる。併しソレだから此評價はアヤフヤだといふ譯ではない。吾々の領土樺太には、獲らぬ狸の皮どころか、生れぬ先きの狸の皮迄立派に企業目標にして經營する、堂々たる養狸會社がある。何萬光年の星の世界さへ科學的に計測し得る吾等文明人に、獲らぬ狸の皮の計算位ナンだと勇氣を御出しなさい。

第十四章 生命價値の資本化（其二）

本題に入る前に「チカ道」を案内する。之から後に説く生命價値現價と、ソレから導いた、貴下が實際に保険に這入り得る金額の算出は相當面倒だから、見て行く内にウンザリして途中でホリ出す人がないとも限らぬ。ソコで「人の行く裏に道あり花の山」といつた様な全然骨折りのない表が本書第二十三章の初めから四五頁目の處にあることを特に申上げて置く。此表の名は

年利三分 一定金額の 毎月 喰ひ盡し年月表
で預けた 受取

と稱へ、例へば一萬圓（三千圓、四千圓、五千圓から千圓づゝ増して三萬圓迄）

の金は毎月五十圓（五十圓、七十五圓、百圓、百二十五圓、百五十圓、）づゝ使つて、何年何ヶ月間に喰ひ盡すかの早見表である。之さへあれば簡單、明瞭、二三分間で貴下の必要保険金額を算出し得る筈だ。ソンを便利な表が後にあるのだから、ツマリ此長くて面倒な第十四章は、生命價値を徹底的、合理的に定めた人か、又は特に興味を持つ方丈けが御讀みになればよい。

コ、で前に述べた條件で二世八さんを裸にし、此人と私の相談で出來た八太郎君の生命價値現價の算出を御目にかける。

先づ諸君の理解を容易にする爲、八太郎君一人に當てはまる年齢三十歳、月給百圓の人の生命價値現價を出す第一表を作つて御目にかける。表を作るには種々の約束のあるものだが、表の成り立ちが第一表、第二表共通で、實際に讀者諸君に必要なのは第二表だから、約束は凡て第二表の備考として掲げる。但し此備考を先きに讀んで頂かねば第

一表が理解出来ないかも知れぬ。尙備考の第二で四十五才乃至四十七才を収入の極期と見る計算は、筋肉労働者と頭脳労働者を混同した傾きはあるが、人間活力消長の法則は大体に於て兩者略ぼ一致し、イクラ頭脳労働者でも、六十で俸給の最高額に達し、ソレから恩給へ橋渡しといふ様な幸運で且つ高級の人よりも、四十五で秋風が吹き初め、五十前後から恩給(俸給の延長と見てもよい)の片手間に易業に就く人の方が多から斯く計算した。

之で三十歳で月給百圓の人の生命價值現價が出来た。此表で見ると前途有望な三十歳の百圓取りが死ねば、遺族は三萬五千圓餘の損をしたといふ意味になる。若しサラリーマン諸君の内、ソンなら己れの分を一つと思召しても此表では只三十歳の人にしか應用出来ぬ。俸給額の違ふ分は比例で近似數を出すとしても、年齢の相違は是非共別の表が要る。但し眞に要るのは此表で右下の總計三五、二九五丈けだから、此の數字丈けを集めて一表にすれば始めて諸君の實用になる。第二表がソレだ。

第一表

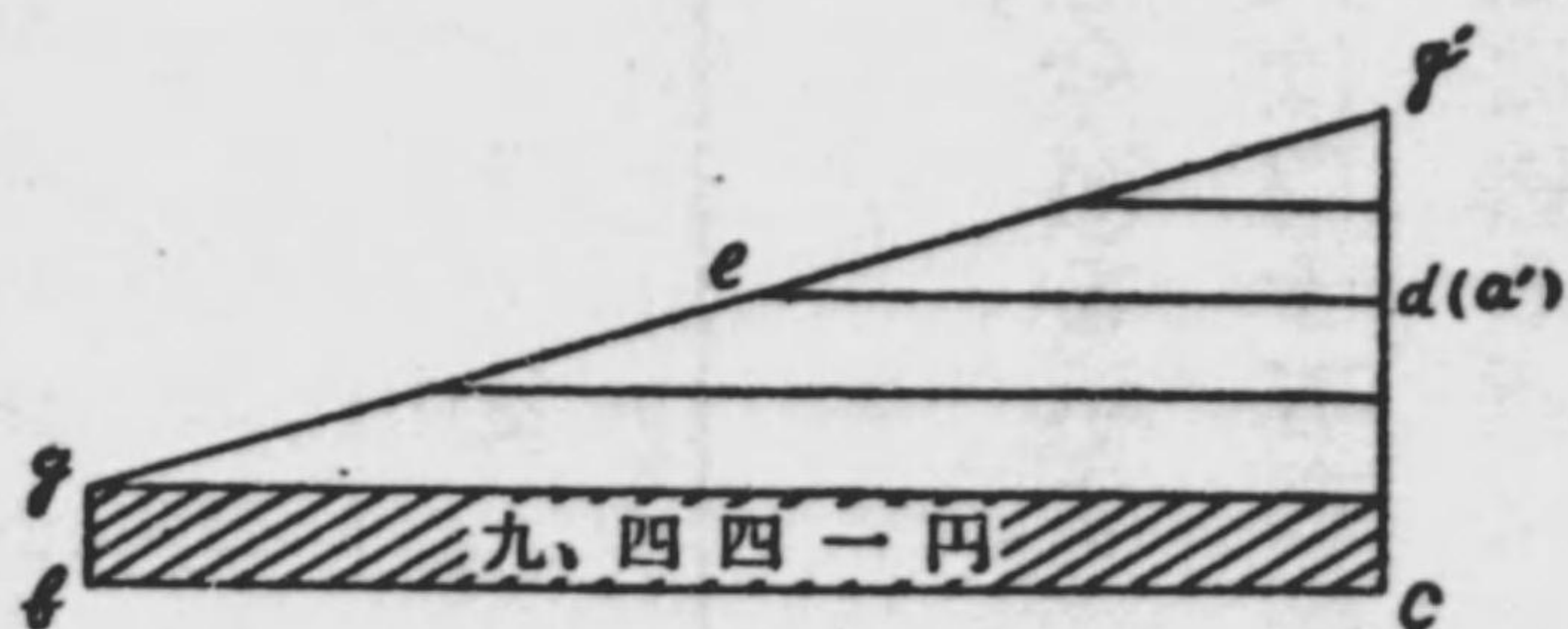
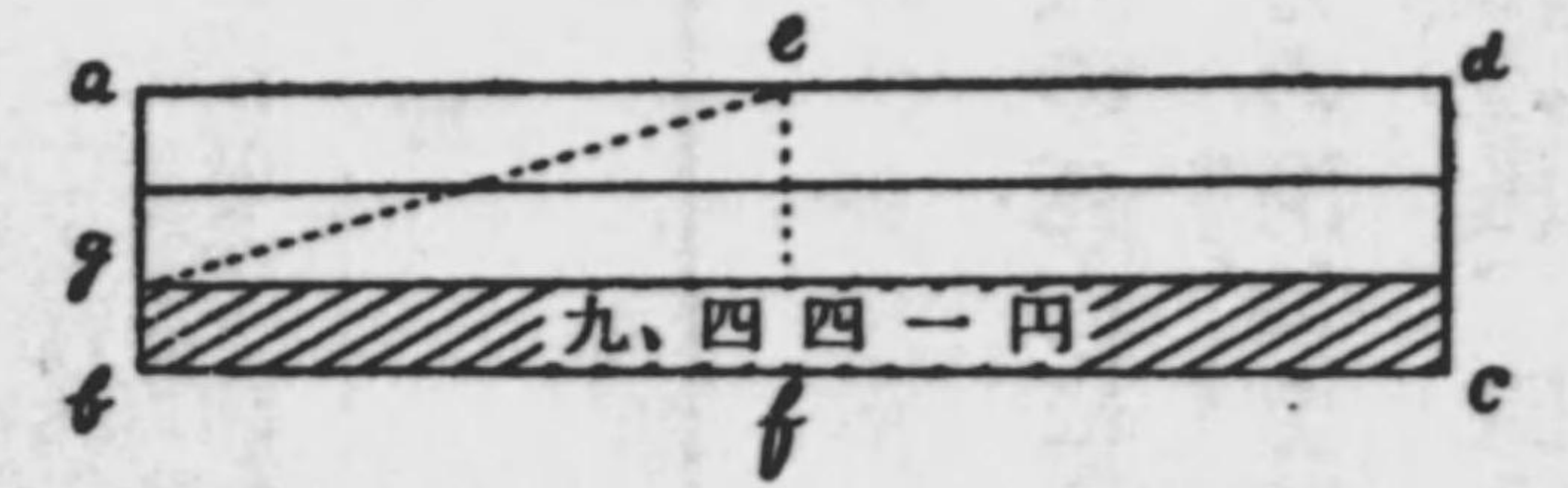
統計的活力に依り遞増遞減する 月給百圓 受領者の生命價值現價算出法

區別 年齢	俸給年額	死亡率に 依る減額	更に前項より年 利三分の利引き したる現價
30	1.200	1.200	1.200
31	1.296	1.285	1.248
32	1.392	1.368	1.289
33	1.488	1.450	1.327
34	1.584	1.530	1.359
35	1.680	1.607	1.386
36	1.776	1.683	1.410
37	1.872	1.757	1.429
38	1.968	1.829	1.444
39	2.064	1.899	1.455
40	2.160	19.66	1.463
41	2.256	2.030	1.466
42	2.352	2.092	1.467
43	2.448	2.151	1.465
44	2.544	2.206	1.458
45	2.640	2.260	1.451
46	2.640	2.227	1.388
47	2.640	2.194	1.327
48	2.534	2.073	1.218
49	2.428	1.954	1.114
50	2.322	1.836	1.017
51	2.216	1.719	924
52	2.110	1.605	838
53	2.004	1.492	756
54	1.898	1.382	680
55	1.792	1.273	608
56	1.686	1.167	541
57	1.580	1.064	479
58	1.474	963	421
59	1.368	866	367
60	1.262	771	317
61	1.156	681	272
62	1.050	594	231
63	944	512	193
64	838	434	159
65	732	361	128
總計			35,295

併し今一つ仕事が残つてゐる。八さんの食堂の方の収入計算だ。此計算は八さんの爲でもあるが同時に農、工、商各方面實業家の収入を計算する爲、單位千圓の恒常收入こうじょうしゅう（生きて居る間同額が續くものと見た）から、死亡率に依る減額と、年三分の利引きをした六十五才迄の年收累計數字（第一表と同算法）を第二表に組み添へることゝした。之なら農、工、商各方面の實業家にも各種の自由業者にも八さんにも其まゝ使へる。

只八さんは現在の年收五百圓だから、年齢三〇欄の一八、八八一圓に「〇、五」を乗けて、九、四四一圓と見るかと思へば、ドウしてドウして其三倍の「一、五」を乗けて二八、三二二圓の現價と見た。八さんは自分の事業の發展力を左圖の如く見たわけだ。

諸君も御自分の事業に發展の自信があるなら此圖の如く、御自分の現在年度純益の、二倍三倍を恒常收入こうじょうしゅうと見て、アナタの生命價值現價とせらるゝがよい。



別に勿体もったいを附けるわけではないが、斯くして出来る次の第二表は、實に第一表と同様の表を四十表作つて、其最後の一劃かく丈けを集めて作り上げたことになる。蛤はまぐりの貝柱かいばしらの鮭すしと鯛たいの頬肉ほくにくの刺身さしみで、一人前何十圓の御馳走ごちそうが出来たといふ話もあるが、相當手數のかゝつた珍味ちんみとして召上り下さい。

第二表
年齢別生命現價表

區別 年齢	① 増依る月俸 に依る引受 る死亡及へ る減額を百 活減る額給 力死を者現 に減額行生 依る率への る引受月俸 る死亡及へ る減額を百 活減る額給 力死を者現	② 常死亡減額 率による引 額千圓恒常 収入者の死 年額千圓恒 常収入者の 率による減 額及引き行 へる生命現 價
20	48.829	21.350
22	46.259	20.915
24	43.664	20.471
26	40.982	19.976
28	38.212	19.457
30	35.295	18.881
32	32.350	18.260
34	29.341	17.603
36	26.196	16.898
38	23.110	16.162
40	19.925	15.387
42	16.740	14.576
44	13.531	13.728
46	11.162	12.839
48	10.288	11.903
50	9.830	10.924
52	9.255	9.892
54	8.557	8.801
56	7.724	7.646
58	6.725	6.409

備考

- 一、本表は當人の死亡に依り家族の損失となる豫想金高を示す。
- 二、人間活動力の消長を示す統計に依り、俸給収入は四十五歳迄遞増、之を最高として三年持續の後、四十八歳以後遞減し六十五歳に終る。

- 三、六十五歳を統計の示す經濟的死線と見做し、凡ての収入を此年に打切ることとした。
- 四、死亡率による減額とは、三十歳の人が五十歳では七九%しか生き残る確率がないから、此確率迄豫想収入を切り下げる。統計の上では一個人が1/3死んで、残り2/3だけ働いて一向差支ない、此死んだ部分の幽霊は仕事をしないと云ふ理由で減額する。
- 五、「利引き現價」とは、例へば本年度の五百五十三圓七十一錢が三分複利にて二十年後に一千圓に膨れる故、之を逆に五十歳の豫定収入一千圓は、三十歳の人今日の現價では五百五十三圓七十一錢にしか當らないといふ意味である。
- 六、表を小さくする爲、二十歳より五十八歳迄の偶數年齢の人丈けの現價を出した。奇數年齢の人は上下の數字を平均して近似數を出す程度で辛抱して頂く。
- 七、本表の實際使用法としては、①の欄で月給八〇圓の人は「〇」、八「百五十圓の人は

「一、五」(此「〇、八」又は「一、五」を以下「比率」と呼ぶ)を當該年齢の現價へ乗せられたらよい。但し奇數年齢の人は先づ上、下年齢の現價を平均したる數を當該奇數年齢の現價と見做し、更に其現價へ比率を乗ずることゝして下さい。

八、②の恒常収入も五百圓の人は「〇、五」千五百圓の人は「一、五」の「比率」を當該年齢の現價へ乗せられたら、死ぬ迄變化のない恒常収入の總計がわかり、更に將來の發展を見込み度いなら、前の本文で八さんを例にして圖示した様に、現在收入を二倍、三倍した「比率」を乗せられたらよい。又今年は二千圓、昨年は四千圓一昨年は三千圓の商業上の利益を得た人が、平均三千圓の恒常収入と見るのも差支へない。

九、本表①、②兩欄の當該年齢の現價へ「比率」を乗じて計出した各の數字を加へたものが其人の生命價值現價である。併し此現價には當人の生存必要經費(生活費といふよりも一層深刻な意味)が引き去つてない。ソレ故に此儘の現價を直ちに保

險契約として資本化(證券化)することは出來得ない道理だ。イヤでも應でも諸君は御自分の考へで之から生存必要經費を引き去らねばならぬが、ソレ丈け言つて突き離しては餘りに不親切だから、著者の獨斷を御承知の上なら次の第三表の「係數」を御利用下さい。

一〇、クドいけれども次頁第三表の「係數」の意味を今一度説明する。實際に生命價值の低い人程生存必要經費の割合ひが大きいもので、例へば先きの話しに出た手傳ひの傳さんは、生存必要經費が生命價值現價の一〇〇%を占め、證券化の出來る部分は零となり、保険には全然這入り得ない人である。更に傳さんの倍額收入と見られた先代八五郎さんの若盛りでも、恐らく第一次に生命價值現價の一七%以上を證券化することは無理であつたらふ。第三表は此先代八五郎さんの一七%とか、之から後に説く二代目八太郎君の三二%とかに當る數字(即ち係數)を、誰れにでも使用出來る様に排列したものと思はれてよい。隨て此九、一〇、の二項

は次の第三表の説明にもなる。

第三表

生命價值現價を減額すべき 保險可能經驗係數

生命價值現價	年 齡	20 乃至 25	26 ~ 30	31 ~ 35	36 ~ 40	41 ~ 45	46 ~ 50	51 ~ 55	56 ~ 60
一 萬 圓以下		0.08	0.07	0.06	0.05	0.04	0.03	0.03	0.02
一萬五千圓 //		13	12	10	08	07	06	05	04
二 萬 圓 //		17	16	13	11	09	07	06	05
三 萬 圓 //		23	20	17	14	12	10	08	06
四 萬 圓 //		27	23	20	17	14	11	09	07
五 萬 圓 //		30	26	22	19	16	13	10	08
六 萬 圓 //		32	28	24	20	17	14	11	09
八 萬 圓 //		36	32	27	23	19	16	12	10
一〇萬圓 //		39	34	29	25	21	17	13	10
一三萬圓 //		43	37	32	27	22	18	14	11
一六萬圓 //		46	40	34	29	24	20	15	12
二〇萬圓 //		49	43	37	31	26	21	16	13
二五萬圓 //		52	45	39	33	27	22	17	14
三〇萬圓 //		55	47	41	34	29	23	18	14
三五萬圓 //		57	49	42	36	30	24	19	15
四〇萬圓 //		59	51	44	37	31	25	20	15
五〇萬圓 //		62	54	46	39	33	26	21	16
六〇萬圓 //		54	56	48	41	34	27	22	17
八〇萬圓 //		68	59	51	43	36	29	23	18
一〇〇萬圓 //		71	62	53	45	37	30	24	19

(備考)

一、小面倒な表の説明は最後に廻はし、諸君の實用には只第二表の①、②欄を總計した生命價值現價に、本表の「係數」(金額と年齢の縦と横から交叉する數)を掛けて頂けばよい。斯くして得たる數字が當人の保險可能、(資本化可能)生命價值現價である。

二、第二、第三表の數字でわかる様に、五十以上の高年者には、保險可能の生命價值は禁止的に激減する。事實も其通りで、此年になれば各社を通じて新契約の人員と金額が激減する。……ソコで勤勞所得者の生命價值といふものは、必ず二十、三十、四十の若い間に心掛けて、身分相應、收入相應に資本化して置かねばならぬことがよく御解りになる筈だ。

三、一つ思ひ違ひしてならぬことは、假令五十になつても五十五になつても、更に此以上は會社の方から御斷り申すギリ／＼の六十歳になつても、投資としての保險

は意義もあるし採算も成り立つ。又相續税の引き當てにしても、銀行預金で積み置くよりは概ね此方が遙か有利である。尙此外に受恩給者又は其豫定者が、恩給價值の下落を補ふ爲(本書第十七章の七参照)保険に入るとか、若くは退職手當を遺族の保護に残す爲、又は此手當を自分の老衰期迄保険の形で證券化して置く爲に保険に入るのは、此第二、第三表の計算とは別問題であると思つて頂き度い。四、最後に兼て御約束して置いた通り、私の獨斷で作つた本表の成り立ちを、かい摘まんで申上げる。本表は先づ經驗的に年齢二十六乃至三十歳の(1)最下級(2)中等、中堅階級、(3)高級に屬する三假定人の保険可能係數を定め、次に其間を級數的に補足、按配して右年齢に對する一列の「係數」を定めた。前にも言つた様に此「係數」は、先づ零に始まり、収入の増すに隨つて段々一〇〇%に近づく性質のもので、此一列では百萬圓を六二%と見る處で止めることにした。……更に特選した某社の營業保険料の逆比を以て、右一列の「係數」を上下の年齢に布衍した。之で

年齢、死亡率、及び収入と保険可能係數が函數的に關聯、伸縮すること丈けにはなつた筈だ。無論經驗の淺い著者の經驗係數に深ひ自信のあるわけもなく、切に大方の叱正と垂教を希望する。

x

x

x

以上第二、第三表の道具が揃へば、八太郎君の保険可能生命價值も容易に定めることが出来る。こうなれば八さん一人の爲に作つた第一表はワザと使はないで、同君を一般的使用法の模型とし第二、第三表の試運轉をやつて御目にかける。

八太郎君の年齢は三十歳だから、第二表三十歳欄を横に見て行き、①の欄月給百圓者の生命價值現價三五、二九五圓を先づ算盤に入れて置く。言ふ迄もなく若し月給五十圓の人ならば「〇、五」、百五十圓の人ならば「一、五」を此金額に乘ければよい。更に年額千圓恒常収入の三十歳欄を見れば二八、八八一圓とあるが、之は前に書いた様に八さん現在

の恒常収入は五百圓であるけれども、將來の發展を見込んで「〇、五」の代りに「一、五」を乗けて二八、三二二圓と見た。

此①、②欄の合計が六三、六一七圓となつたから、之に第三表の八萬圓以下と年齢二六一三〇の交叉する〇、三二の係數を乗けると二〇、三五七圓となるが、端數を切り捨て、二萬圓と見る。此二萬圓が實に今日只今八太郎君の保險可能生命價值現價といふことになつた。併し世の中の實情として、此金額全部を一度に資本化することは多くの場合六ヶ敷いものだが、大体に於て此額の半分丈は是非共今直ぐに保險して置き度い。更に残りの半分は宿題として今から五、七年の内に、成るべく早く補足する方針を取るがよい。(第十章千鳥參照)若し十年経つても此補足が出来ない様では、八さんの人世行路は平坦でなかつたと言へる。

サテ保險金を受取つた爲に遺族が現在以上の生活が出来るといつた様な、馬鹿氣た奮發も要らないが、實際自分の死後に家族の最小限度生活が保障せられ(米國の保險の本

には概ね經常収入の半額を確保せよとある様だ)今の八さんとしては、食堂の流通資本と、八歳の長男が職業學校を卒業する迄の學資が欲しい。ソレには本書第二十三章の「一定金額の毎月受取り喰ひ盡し年月表」も参考せねばならぬが、此表を見れば毎月七十五圓づゝ使つて一萬圓が十三年六ヶ月、百圓づゝ使つても九年七ヶ月は保つ計算になるから、今の處先づ一萬圓加入と決心をした。

さて此決心が出来て見れば、今迄の油斷が空恐ろしくなり、「おもちゃ」に近い一千圓を一躍十倍に増額して、愈一萬圓といふ保險を付けることに定めた。まだ之でも保險可能生命價值現價に對しては半分だけれど、サスガに豪勢な思ひがする。之で八太郎君の軀も一萬圓の資本と同じ存在となり、萬一の場合二千圓の流通資本と八千圓の預金年利二百四十圓を家族に約束することになつた。

再び話を現實化し且つコンな風に計算せねばならぬ場合もあることを示す爲に、私の家庭で行つた生命價值資本化の一例を申上げる。私の長男は中學校入學の前に五千圓、

高等學校在學中に五千圓、大學卒業の直後に一萬圓の保險を付けて現在二萬圓の生命價值資本化を實行して居るが、私の積りでは學生中萬一の死亡で、彼が父の家に學資空費の穴を明けぬ爲に第一次、第二次の保險、既に卒業したら若き醫師としての彼自身の爲に、更に一萬圓を増額して第三次生命價值資本化を行つた。斯様に生命價值評價を基とする保險は、少くとも毎五年目位に現在の保險高に再檢討を加へ、境遇の進展がある毎に、週期的増額を忘れてならぬことを特に附言する。

x

x

x

不吉な話したが靜かに御自分の軀に引き當て、御一考を願ふ。生きて居ればこそ日々月々の収入が生れて來るが、焼けば灰となり埋めれば土となる此肉体の死んだ後の死骸を、鳥邊山一片の煙と共に見送つて跡かたもなくし、之を無常迅速の宿命だと諦めさせた昔と違ひ、八太郎君は今日死んでも一萬圓の大金を、然り生きて働いた時でさへ見た

こともない此大金を、冥土へ旅立つ置土産として、残る家族へ遺すとは、サテも不思議な文明の機關、それ程巧妙に生命價值を資本化する生命保險とは、ソモ如何なる仕組みに出來てゐるものか、其大体の原理を明かにして、此長い話を終ることとする。

惚れ藥、何がよいかと蝶蜥に問へば

野暮なわしより佐渡の土

と歌はれ、佐渡は金山、土まで黄金といふ通念が日本國民を支配し、徳川幕府の軍用金明治政府の興隆資金を掘り出した、此國寶佐渡の金山も、遂に掘り盡す時期が來て廢礦となつた(佐渡金山再興のニュースは別問題)。吾々も元氣で働く時は此軀から無限の資金が生み出される様に思ふが、無事で働いても最後は老衰と定まつて居り、運が悪ければイツ病氣、死亡で活動が中絶するかも知れぬから、之を鑛山に比べて見れば、必ず掘り盡す時期のあること、途中イツ斷層にブツかつて鑛脈が切れるかも知れぬことなど、頗るよく似た共通點がある。

今或る企業家が、コンな風に漸次其價値を減損する性質の鑛山を借り受けて採掘するとか、又は幾年の後は伐り盡す大森林の伐木事業を經營する場合には、初めに鑛石の埋藏量、若くは材木の石數を見積り、二十年間經營する豫定なら、二十年後には全額を積立て了る債券を發行して、先づ山主に渡す、ソレには途中の事故には債券額面の全額を拂ふと書いてある。

だから債券所有者は、積立ての正規に行はるゝかを監視し、萬一の中絶に全額拂戻しの出来る爲の他の填補資源の衰亡を注意する。此の監視と注意の二つが行き届きさへすれば、山主は掘り荒した廢坑や、切り盡した禿山を抱き込んで損をする心配はない。此債券を「請求拂減債基金付債券」と名づける。重ねて言ふが吾々の軀も年月を追ふて減損し、最後に廢滅を約束する點で頗る此鑛山や伐木事業に似通つてゐる。だから之と同様の債券發行が出来ねばならぬ道理だ。然り出来る。人間と鑛山、人間と森林、餘りに大小かけ離れてはゐるが、五十貫の鮪も百匁の鯛も、よく似通つた刺身が出来る様に、

此の豫想は事實の上で全然的中してゐるから面白い。

コ、迄書いて私の言ひたいことが思ふ存分言へることになつた。前の八太郎君の軀を此鑛山(森林)と見る、此山の持主を彼の家族と見る、此山を借り受けて、氣永に三十年の先きを楽しみに經營してくれる企業家(假説に非ず)が、誰あらふ天下の大富豪三井、三菱、住友、安田等々の大財閥と、更に此財閥と肩を比べる大資産を持つ株式、相互の大生命保險會社である。

ソコで八太郎君は五年、十年、二十年も後日の俸給や、海のものとも山のものともわからぬ今の食堂の、十年、十五年先きの年度の飯汁代五錢、參錢の利益金迄計算して、今日只今政府の公債や一流社債と同じ信用のある、一萬圓といふオツタマゲた額面の大債券を受取り、ソレを家族の手にシカと渡して置く。之が生命價値の資本化である。

腰辨技手兼民衆食堂主人の八太郎君も、今日からは一萬圓の確定資産の持主、之で彼の持つ義務はと言へば實に軽い、鑛山から出る黄金の様に、彼の軀から月々に沸き

出る月給の一割十圓を天引すること、及び毎年の食堂利益の半分足らずをポツポツ積み立て、行けばよい。ソレさへ四五年の後には休み休み拂つて差支へないのみか、斯くして積み立てた金へ現在では銀行利以上の配當が付く。コンな虫のよい條件で、生れぬ先きの狸の皮迄すつかり上値に賣り付けた。

諸君、吾々はイツでも買へると思つて、ツイ／＼コンな好條件の保險證券を買ふこと（反對に言ひ換へれば、生命價值を有利に賣り付けること）を油斷してゐるが、タシカ一二年前の事だ。勸業銀行が僅か斗り利廻りと福引き條件の良い債券を賣り出したとて東京は元より各地の銀行、郵便局前は人ばかり、警官の交通整理やら、怪我人迄出したといふではないか。若し假に今月限り『生命價值を資本化する保險證券は賣り止め』の廣告が出たとしたらドウだ。交通整理や怪我人どころの騒ぎでは治まるまい。併し實際問題として『保險證券の賣り止め』は個人々々には屢々見舞つて來るものだ。例へば一寸の病氣をしても一定期間は斷然買へなくなるし、又今都合の付く第一回掛金を外へ廻

せば、次の工面の付く迄は買へなくなる道理、コンなことでは折角の機會を失ふが多い。更に今一つの想像を逞しうして見よふ。

若し時の舞臺を逆に廻はし、日本に未だ生命保險のなかつた明治十年の今月今日、吾々の祖父にコンな有利な生命價值資本化の話をして聞かせたら、恐らく眼を廻してヒツクリ返つたかも知れぬ。汽車、汽船、ラヂオ、トーキー斗りが發明ではない。吾人は今コンな大發明に直面してゐる。之を利用して家族の將來と御自分の安心の爲に、諸君の生命價值を資本化すると否とは、偏へに諸君の理解と決心如何にある。

第十五章 資産家と生命保険 (其一)

必要の程度からいへば、富豪とか資産家と呼ばれる、諸君に保険の必要は、中流中産階級の次に位するかも知れぬ。併し之が却て諸君を油断させる。僕が資産家に生命保険は不急だといったからとて、ウン其通り俺達には保険の必要はない！といった様を油断が萌したら、もう貴下の後には貧乏神が笑ひ乍ら立つて居る。一寸振り返つて御覽なさい。

保険は元來甚だ縁起でもないことを豫想するもので、前にも書いた様に死、貧乏、破

産などいふことを、眞剣に御自分の身に當て嵌めて考へて見らるれば、餘り多くを云ふ必要はない。併し貴下の生命に萬一の事があつたらとか、若しくは破産して貧乏せられたらなど無稽なことは、諸君の嘗て聽かざる處、又聽くことを好まざる處である。諸君の從者、召使は勿論、知己、朋友に至る迄、決して左様な無禮不吉の言を弄するものはない、之は社交上の「忌み詞」である。然らば諸君は萬一の破産、失脚等を全然忘れて差支へないか？

否々諸君も充分御氣付きの事、諸君の交友中でも時々は、こんな話が交はさるゝ筈だ。A君もトウトウ失敗だとよ、ウン新聞では見たがホンとかね、實際は新聞以上だね。ナカナカ向ふ意氣の強い男で、用心が足りなかつたのだね。A君はよいが細君や子達が可哀そうだ、奥さんはB男爵の妹さんだつてね。ソレがさ、落目になれば兄弟でも……といった様を濕っぽい話しがタマタマ出るには出ても、餘りに諸君の周囲が明るい爽快な空氣に充ちてゐる關係で、永くこんな話しに拘はつてはゐられない。忽ち事

業の上の要談か、さもなくば享樂のエンゼル共が注意を他にサラつて行く。ソレに誰れかの言つた様に

他人の不幸に堪へ得ない程の善人もなく

他人の榮達に平かなり得る程の達人もない

といふのが普通の人情で、若しAの出来事が自分であつたらと、泣き泣き自分の身に引き比べ、當てはめて同情したり、反省したりする處迄は行き得ないものだ。

御經驗のあることと思ふが、船中の食堂では難船の話しは勿論、苟も乗客の不安不快を催す様な話題は、作法として忌まれてあるから、風の「カ」の字も口にする者はないが、足一歩食堂を出れば救命艇がある、「ブイ」がある。嘗ては海中へ押し出した城郭の如しと謳はれた巨船「タイタニック」も、時が來れば沈没する。其後で歐米の新聞が盛んに一般客船の救命艇不足を論じたが、死んだ人は生き返らない。

私は諸君に、先づ此の大船に備付けてある救命艇や「ブイ」にも匹敵すべき生命保険

を、御忘れになつてはならぬと警告する。

「ブイ」や救命艇が諸君に必要なことは、一般の月給取りや貧乏人に幾倍する。何となれば諸君は、努力奮闘で巨萬の富を作つた一代分限でない限り、概ね泳ぎを知らぬ人々だ。子供の時から働いて食ふこと、食はねばならぬ事を教へられない諸君は、イツの間にか南極の氷雪に棲むペンギン鳥が、鳥であつて飛ぶ翼を持たないと同様の退化をして御座る。嘘と思はゞ入念に身体を點検して御覽。マサカの時に使ふ手や足を持つてる人が幾人ある？。

A市の百萬長者B氏（實談なれど市と姓は遠慮する）が、歐洲戰末期財界のバニツクに失脚して、氣の毒にも裸一貫となられた。動産不動産一切ケシ飛んで、思ひもそめぬものが残つた。ソレは同氏の全盛期に入つてゐた十萬圓の短期生命保険が既に四五萬圓も掛けられてゐたので、之を拂濟（其會社は幸ひ拂濟み保険にも利益配當をする規定があつた）にしたたら、年々二千圓の配當が年金として渡さるゝことになつた。之が彼をドン

底生活に送らなんだ唯一の助け船であつたとか。著者も或る機会に失脚後の彼氏と二三度會つたが、立派な風采で堂々と舊友紳士の間を往來してゐられた。之でA市の紳士は深刻に保険の實物教育を受けたと聞いたが、此種の例は相當にあることと思ふ。

之だから少々穿ち過ぎた申分だが、萬一の失脚に備へるための保険は、逆境の場合掛金の心配がある様を油断があつてはならぬ。受取る年齢は遅くともよいが、拂込みの期間は成るべく短くし、出来れば一時拂ひがよい。只一時拂は今年に萬一があれば、十萬圓の保険で四五萬圓の損だから、保険通は兎角溢る様だ。ソコで一舉兩得の方法は、最後の掛金を最初に信託會社に供託し、信託會社にチビチビ掛金をして呉れる様頼むがよい。斯くすれば萬一の場合に十萬圓は全部受取つた上に、四五萬圓の請取勘定が信託會社に残ることゝなる。

保険料前預りの制度は、保險會社にも實行してるのがチラホラあるけれども、今云つた様な目的には、次に述べる理由で信託の方がよい。

念の爲申上げて置くが、生命保険も破産の場合には債權者に取られてしまふ。解約して解約金を取る筈だ。その對策には保險金受取人を信託會社に移して置けば安全な筈。(勿論ソレが事前であつて、且つ善意と認めらるゝ場合に限る)。

最悪の場合B氏の如く現金四、五萬圓にもなり、又順境で死亡の際は十萬圓の保險金にもしよふといふ、兩道かけた目的ならば、先づ一文吝みをしなない様立派に相続税を拂つて金五萬圓也を奥さんと子達に譲渡し、此金を信託會社に委託する。會社は受託財産を以て年々保險金を支拂ひ、途中の萬一には掛金の残りも、受取つた保險金を奥様、子達の口座へソレソレ保管し満期の場合にも代つて受取つた保險金を最初の指定通り處理する……以上は私に萬一の思ひ違ひはないかを慮り、最も信用ある某信託會社へ問合せた處

御照會の趣拜誦仕候處、御高見洵に肯綮に當り、略々要を盡し候へ共、委託者又は受託者の破産と信託財産の關係は種々なる法令と關係有之、到底簡潔正確には説明致

し難く(下略)

の回答が来た。愈々(いよいよ)の場合は貴家の顧問辯護士、又は委託せんとする信託會社と協議して萬全を期せらるゝ必要はあるが、大体に此方法の有効であることは御想像が付いたことと思ふ。

此救命艇やブイに當る保険を、次に述べる投資としての保険又は其他の目的に利用する保険と混同せられては困る。投資としては一錢たりともソツのない様に、利害を考量すべきは勿論だが、只今述べ來つた萬一の失脚に備ふる分の保険は、損得を超越し、今有り餘る金の中から、捨てた積りで五萬なり十萬なりを處分してしまつて置くのだ。之がイツ迄も「お父さんの用心屋！」と家庭の笑ひ草にならば之程結構なことではない。

併し萬に一つ、然りホントウに萬々に一つ、失禮乍らB氏の如き利用の場合があつたとしたら、之が貴下の幾十、百萬の財産の、眞半分よりもまだ大きな働きをする。昔は「期間使つた金に使はるゝ」と嗤つたものだが、萬一貴下が昔讓つた此僅かな信託財産

に寄食する時は、「お父さんの用心屋」が死ぬ迄光る。否、死んだ後の後迄光る。コンな失敬で無賤けな保険のススメ方は、恐らく空前にして又絶後の筈、必ず御腹を立てないやうに卷末に書いた、福の神が飛び込んだと思はれてもよし、又は死なれた御先祖の御導きと心得られてもよし、兎に角シカと胸中に止め置いて、善は急げと直ちに實行に移されたいものだ。何事も轉ばぬ先きの杖である。

x

x

x

以上は富豪資産家諸君に對し、保険の最も消極的な方面、但し最も大切な保険本來の使命を述べたのだが、積極的にも更に幾多の有益な使用法がある。

諸君は生命保険こそ餘り注意を向けられなんだかも知らぬが保険は前から無意識の「おなじみ」で、相當の理解はおありになる筈だ。

見よ、諸君は地主であつて船會社の株主となり、船乗りと心配を共にしたり、東京、大阪の真中に住み乍ら、九州、北海道の山奥で石炭を掘つて御座ることあり、此外瓦斯、電燈、紡績、人絹、製糖、製紙、製鋼、製鐵、と案外なものに苦勞をし、又同じく土地に投資すると言つても、田畑、山林もあれば市街地もある。有價證券といへば前記株式の外に、國債、公債、社債あり、銀行の取引きと預金は、ワザと甲、乙、丙、丁に分けて行ひ、少々皮肉かも知れないが、餘り保険付きでもない骨董品迄之も財産目録の一つだなど、買ひ漁られた時代もある筈。之等數々の事實は意識無意識の内に「危険の分散」といふ立派な保険思想が内にあるからだ。

此外危険として平素堅く株式賣買を慎しむ人でも、底無しの不景氣を前にしては、持ち株の賣りつなぎ、所謂保険賣りをやる人も相當にある。生命保険こそ案外契約が少くとも本宅は勿論別荘にも倉庫にも、充分の火災保険が付けてあり、日常の交際に迄物事を頼むに便利な友人へは、持病の「かんしゃく」を用心する迄に、マサカの用意が百般

に行き届いてゐる。

コンな用心堅固な先天的保険屋さんともいふべき資産家、富豪諸君を、保険キラヒとか保険にウブとか思ふのが間違ひの骨頂、問ふ迄もなく保険は好きの好きの大好物、只私をして評せしむれば、之迄「生命の保険に縁が薄かつた」といふ迄の事だ。こうした人々に對する保険の勸説は、立派な一つの商取引、保険といふ一商品を如實に説明すればよい。保険の外に投資なしといった様な説明ぶりの素人扱ひは、保険賣る人の認識不足、遂に諸君の食指を動かさし得なかつたかも知れぬ。

某知名の新聞記者が或時面白いことを言つた。自分の好物の數ある中で、「が好き」といふのは一つもない。凡ての好物は「も好き」であると。其譯は地方へ行つて、鮎が好きと言へば朝から晩まで鮎攻め、松茸が好きと言へば茸攻めに遇ふ。之にはホトホト閉口した。ソコで先生の好物は？と問はれたとき、「が好き」はなくて「も好き」斗りと料理の偏よりを防いで置く云々。

滿天下十八萬の保險人に問ふ。之程危険の分散に敏感な資産家諸君に對し、百萬大衆の中に混入する外斷じて彼の獨力を許さない生命價值喪失の危険分散をナゼ説かないのか、千、億の長者はイザ知らず百萬二百萬の資産家なら、彼の幾十百種の資産目錄中、必ず第△位を下つてはならぬ。投資としての生命保險の順位をナゼ研究して差上げないのか、諸君が若し此二つの調理に成功したら、「も好き」になつたの好い返事は、必ず期待出来る筈。切に保險人諸君の研究と認識を新にせられん事を薦める。

x

x

x

私は前節で保險賣る人の認識不足を責めたが、資産家諸君も保險人に對する態度を改めて頂きたい。改められねば諸君の御損だ。樂屋をスツバ抜くといふ程でもないが、日本でも米國でも、保險人の功名談は、如何にして大資産家に近づき得たか、如何に簡潔

に彼の心を捕へ得たかの二つにある様だ。コンな狙ひ方で話されては、ケレン斗りが多く、後の扉を氣にしては、實のある話は出来ない筈だ。諸君はなぜ斯くも高い障壁を彼等の前に築くのか、ナゼ又斯く迄に保險キライを装はるゝか。

コ、で妙な話しをお耳に入れる。ソレは一旦諸君の契約を頂いた限り、保險會社は解約の少いことを非常に喜んで居る。勿論之れは掛金に困られないことも原因の一つだけれど、私をして言はしむれば、資産家と見らるゝ人の大部分は、皆保險に對する結婚適齡期の方々斗り、縁を取持つた保險人は身分なき使ひの者でも、相手は三億五億の大資産家、サもなくば三井、住友、安田の御次男格、縁が熟するに何の不思議もないことだ。

只家柄や血統に不足はなくとも、家風と性格には夫れ夫れ御好みがある筈。諸君の保險も其通り、細かい詮索をなさるなら相當に目の付け處もあるならん。各社各様の長所を捕へて契約されたが有利である。ソレ故之からの契約は、門戸を開き温顔を以て、保

險人を迎へてやり、豫告した二十分か三十分の間丈けは、話す丈けを話させて、急所々々には質問を試み、腹に入るまで聴ひて取り、一社が意に充たねば二社、三社、ヒヤカシは彼等の歓迎する處、話しを聴いて貰つた丈けでも、無上の光榮と心得る。

ソコで私の以下述ぶる處の保險投資はどの手がよいか、遺産分配には保險種類を何れに選ぶか、信託の利用は如何にするか、相続税は如何なる税率が適用さるゝか等々、私は只綱目丈けを擧げて置くから、之等の詳細は保險人から御聴きなさるがよい、以上各項に就て、保險賣る人々は職業がら詳しく調べて、サービス百パーセントならんことを心掛けてゐる。

第十六章 資産家と生命保險 (其二)

生命保險の利用は、次の第十七章にも述べるが、本章では特に資産家に關係の多い利用法を述べて見たい。

一、生命價値の資本化

前の第十三、十四章で生命價値の事を少し書いたが、之は諸君の爲に今少し入念に書くべき筈であつたけれど、ソんな大仕事は此豆本の範圍でもなく、寧ろ専門の學者に御願ひしたらよいと思ふ。東京大阪あたりの紳士諸君は機會を作り、是非大學の先生か大會社の保險技師から、生命價値を中心とする一夕の保險談を聴かれんことをおス、メする。

私は生命價值を象の目方に比べたが、諸君の生命價值を定めんとする時には、ツクツク此譬へは適切だと思ふ。ドコから手をつけてよいか、一寸見當が付き兼ねる。併し大体に於て左の三つの考へで貴下の生命價值を資産化し、證券化して置かれたらよい筈。

(1) 家族に對する生命價值

僕の識る一資産家をスケッチして見る。此資産家……自分は株や、土地の賣買はやらない。遊んでゐると仰せになるが恐らく三、五年に一度位、狙ひ射ちの買込みをなさる様だ。ソコで或株主名簿では廿年以上の古顔だが、ソレでも極めて澁々賣り放ちもやる。土地も略其通りの買方で、幾十倍の騰貴を示したものもあり、之も必ず賣らぬといふのでもないらしい。此忘れた様に落ち付き拂つた投資振りこそ、彼をして今日の大をなさしめたものならん。「此時義經少しも騒がず」が萬金の價值のある處。此靜かなること林の如き將軍は、何もしない様に見へて、水鳥の足にひまなき大きな仕事をなすつゝあるのだ。郷土の人は今太閤と呼ぶが、併し人間は棺を蓋ふて後に眞の價值が定ま

るもので、此將軍を失つた場合にはじめて將軍平生の用意がうかゞはれると僕は思ふ。

一、若し無保險であつたら此優れた良い頭腦を相続税丈け額面を割つて取引したこととなり。

二、若し相続税が保險で賄へたら額面取引き

三、幸に將軍自らの手腕力量を見込んだ生命價值資本化(證券化)が行はれ、適當の保險が付けられてゐたなら、其時こそ生命價值相當の「プレミアム」付きで取引されたことになる。

武夫は名こそ惜しけれ、生前智謀を以て鳴つた好漢、金の損得は別として、死後の名を辱めぬ爲めにでも、適當な生命價值の證券化を心掛けらるべきである……。スケッチは此位にして置くが、事業に手を擴げてゐる方は之から來る恒常收入の減損を填補することも其一つ、萬一家道の衰へた時の用意に就ては前に平生の用意を周到に述べて置いたが、よく之が、不幸はいつも大ぜい手をつなぎあつて來るといふ